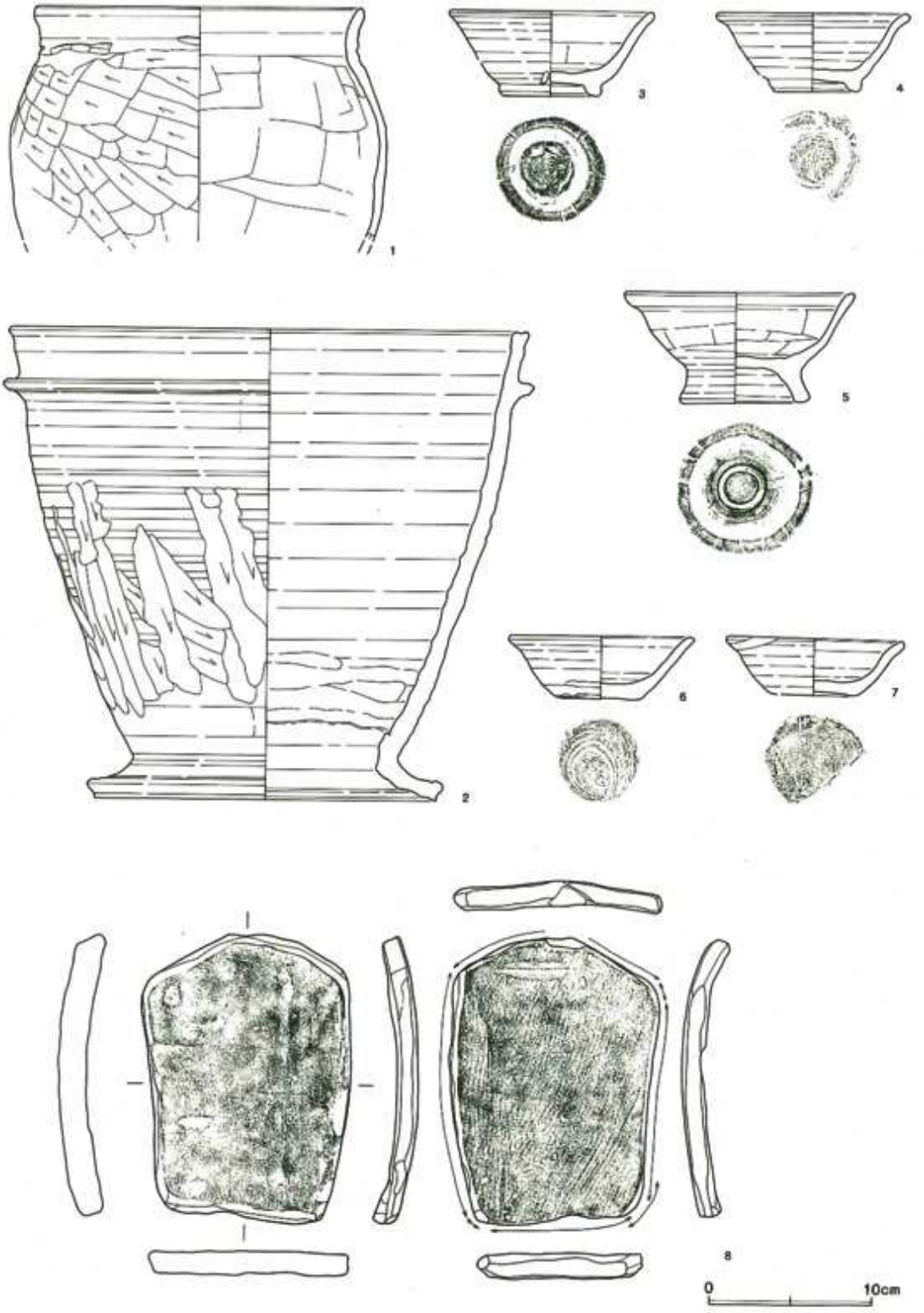
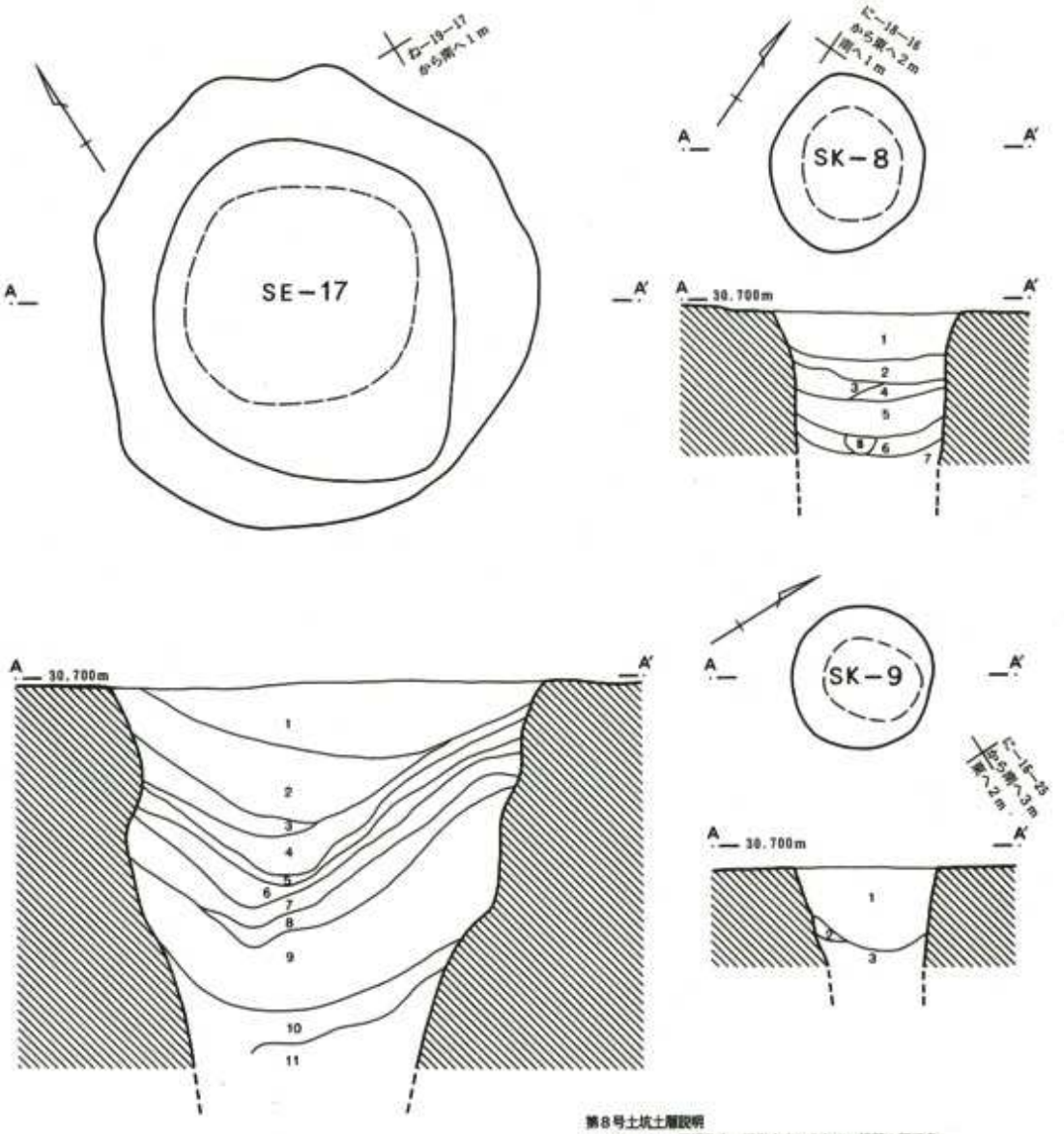


第127図　第18号井戸跡出土遺物



第17号井戸跡土層説明

1．10YR3/2　黒褐色土　浅間A軽石多。L・C粒少。
2．10YR3/2　黒褐色土　1に準ずるが、浅間A軽石やや少ない。
3．10YR3/2　黒褐色土　1に準ずるが、浅間A軽石さらに少ない。
4．10YR6/8　明黄褐色土　L、青灰色粘土を含む。浅間A軽石微。
5．10YR6/8　明黄褐色土　4に準ずるが、黒色土多い。
6．10YR6/8　明黄褐色土　4に準ずるが、浅間A軽石やや少ない。
7．10YR6/8　明黄褐色土　4に準ずるが、浅間A軽石さらに少ない。
8．10YR2/2　黒褐色土　1に準ずるが、浅間A軽石を含まない。
9．10YR5/6　黄褐色土　8に準ずるが、Mnが発達する。
10．10BG3/1　暗青灰色土　緻密な粘土層。
11．10YR4/6　L、G・Fe粒少。

第8号土坑土層説明

1．10YR3/2　黒褐色土　旧表土？からなる。浅間A軽石多。
2．10YR2/1　1に準ずるが、多量のC粒を含む。
3．10YR6/8　明黄褐色土　Lからなる。若干のC粒を含む。
4．10YR3/1　黒褐色土　3に準ずるが、ややC粒が多い。
5．10YR3/1　黒褐色土　4に準ずるが、Mn粒が多い。
6．10YR3/1　黒褐色土　4に準ずるが、G粘土を含む。
7．10YR3/1　黒褐色土　4に準ずるが、G粘土多量。

第9号土坑土層説明

1．10YR6/8　明黄褐色土　Lを基本とし、旧表土？・浅間A軽石を含む。
2．10YR4/1　褐灰色土　暗色G粘土からなる。C粒少。
3．10YR6/6　明黄褐色土　Lを基本とし、2のブロックを含む。

0　2m

第128図　第17号井戸跡　第8・9号土坑

覆土は自然堆積で粘土化が進行している。形状や覆土の状態は第18号井戸跡のそれに近似している。調査の及んだ範囲内では、遺物の出土が見られなかった。

第18号井戸跡出土遺物(第127図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	甕	(20.2)×(14.2)× —	口縁—胴部	W′+粗R+B′多	浅黄橙	
2	甑	(32.0)× 28.7 × —	40%	W′+B′多	にぶい黄橙	瓦質
3	高台付椀	(12.6)× 5.1 ×高台6.0	40%	B′多	〃	須恵、赤焼
4	〃	(12.0)× 4.5 ×高台5.5	40%	W少+B′	浅黄橙	須恵、赤焼、底部回転糸切り
5	〃	14.0 × 6.8 ×高台7.8	80%	W+W′	にぶい黄(内面黒褐)	
6	坏	11.0 × 4.0 × 5.0	完形	W+W′+B′多	にぶい黄橙	須恵、赤焼、底部回転糸切り
7	〃	(11.0)× 3.5 × 5.5	45%	W′+B′多	淡黄	須恵、赤焼、底部回転糸切り
8	砥石	タテ 17.2 ×ヨコ 12.3 ×厚 1.7	完形	W+粗W′多	褐灰	須恵、甕破片転用

第11表　砂田遺跡土坑一覧

No.	グリッド	長軸方向	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考	No.	グリッド	長軸方向	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
1	ぬ—17—13	—	楕円形	0.55	0.46	0.60		6	は—21—3	N-68°-E	長方形	2.0	0.80	0.20	
2	欠番	—	—	—	—	—		7	ね—20—23	—	円形	0.90	0.85	0.71	
3	ね—20—13	—	楕円形	0.65	0.45	0.16		8	に—17—15	—	〃	0.85	0.85	—	井戸跡
4	ね—19—19	N-0°	長方形	2.90	0.96	0.80		9	に—16—19	—	〃	0.75	0.75	(0.60)	〃
5	は—21—2	N-20°-W	〃	1.80	1.30	0.26									

第12表　砂田遺跡井戸跡一覧

No.	グリッド	半面形	最大径(m)	深さ(m)	備考	No.	グリッド	半面形	最大径(m)	深さ(m)	備考
1	な—15—24	円形	1.90	1.10	SJ1より新	10	ね—18—3	円形	1.20	1.10	墓坑か？
2	欠番	—	—	—		11	ね—18—4	〃	2.20	(1.10)	
3	ぬ—17—9	略円形	0.85	0.90	墓坑か？	12	ね—19—11	〃	1.40	0.17	墓坑か？
4	ぬ—17—13	楕円形	1.40	1.20	〃	13	の—20—6	略円形	1.00	1.45	
5	ぬ—17—14	円形	1.10	1.20	〃	14	ね—20—7	楕円形	1.10	1.90	
6	ぬ—17—15	〃	1.20	1.80		15	欠番	—	—	—	
7	ぬ—17—25	〃	1.30	1.65		16	の—20—13	円形	1.40	—	
8	ぬ—18—21	〃	1.20	1.45		17	ね—19—12	不整円形	2.40	2.00	
9	ぬ—18—21	不整円形	1.30	0.13		18	に—17—14	〃	0.80	2.20	

第13表　砂田遺跡溝一覧

No.	大グリッド	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	長軸方向	備考	No.	大グリッド	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	長軸方向	備考
1	に—16・17	9.90	2.20	1.40	N-29°-W		3	に—16	34.80	1.20	0.59	N-23°-E	
2	に—15	2.00	0.80	0.60	N-0°								

V　柳町遺跡の調査

1　遺跡の概要

上武道路関連の遺跡でいえば、柳町遺跡は北から3番目にあたる。北側は砂田遺跡と連接し、南側は埋没河川を挟んで城北遺跡に臨んでいる。調査区中央部の［ち－12］グリッド杭は、第Ⅸ系座標でX＝23.850m、Y＝－45.300mである。これを経緯度に換算すれば、北緯36°12′50.1261″、東経139°19′45.9878″になる。標高は30.5m前後で、北から南へいくぶん傾斜している。城北遺跡からは2mほど高い立地である。

調査前は一面が水田であったが、陸軍参謀本部が明治期に作成した迅速測図では、大部分が畑地となっている(第2図参照)。これは繰り返し述べたように、煉瓦用粘土の採掘が行なわれたことに起因している。調査でも全面に削平の跡が窺え、遺構確認面の上は直接耕作土となっていた。特に南部では激しく、それは住居跡の床面にまで達している。

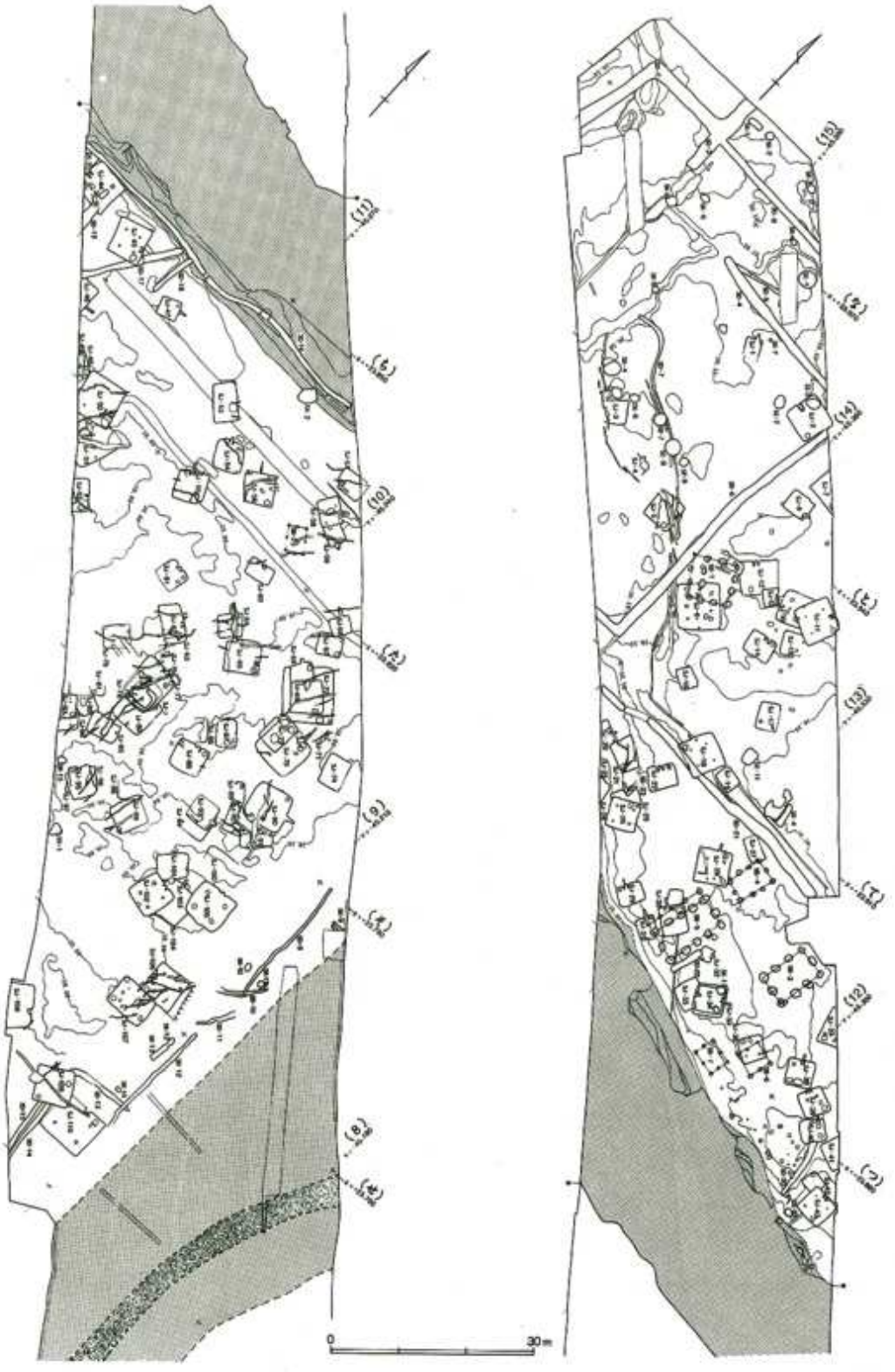
柳町遺跡もローム状粘質土からなる自然堤防上に営まれている。自然堤防は砂田遺跡から続くもので、南側は埋没河川で画されている。東側も同じ河道によって限られている可能性が高いため、調査区は遺跡の東辺を縦断する形となっている。また調査区内には、これに合流すると思われる旧流路が走り、住居跡群を南北に二分している。

この埋没河川は、その河道上に柳町・城北・居立と、3遺跡が連続しているという点で重要である。調査の所見や先出の迅速測図、さらに現在の河川や地割から復元すれば、河道と各遺跡の関係はおおよそ次のようになる。なお記述上の混乱を避けるため、本埋没河川は「城北(しろきた)川」と仮称する。

城北川は第4図に示したように、利根川方面から南へ流れると思われる小河川である。砂田遺跡の北側は利根川の旧河道となっており、これより柳町遺跡の南端までは調査区内に城北川が現れることはない。北部は既に利根川に呑み込まれてしまったのかもしれない。あるいは、城北川は乱流していた利根川の一支流なのであろうか。いずれにせよ、城北川は砂田・柳町両遺跡の東側を南流し、次第に流向を西へと転ずる。そして城北遺跡の西辺を画しながら、今度は逆に東へと蛇行し、居立遺跡の東端部で現在の福(ふく)川に合流する。3遺跡はいずれも古墳時代の大規模集落で、調査されたものだけでも400軒を越えている。各遺跡の住居跡を時期的に把握し、集落としての変遷を充分に検討しなければならないが、周辺にこのような状況は見られないことから、当時の集落環境にとって、城北川の存在は大きな意味を持つものと考えられる。

城北遺跡と柳町遺跡に挟まれた部分からは、祭祀跡や多くの木製品が検出されており、中には柳町遺跡に関係するものも含まれている可能性がある。ただし、河川自体の発掘調査は城北遺跡の関連で実施したため、その詳細については同遺跡の報告書に委ねる。

上記のように城北川の両岸には三つの集落跡が連なり、この地域における最大規模の集落群を形成している。本書に報告する柳町遺跡は、その北側を構成する集落跡である。検出された遺構は、古墳時代から平安時代の住居跡110軒、平安時代の堀立柱建物跡7棟、平安時代から中世の井戸跡11基、同じく溝23条、中世と思われる土坑17基、性格不明遺構2基である。



第129図　柳町遺跡全体図

2　検出された遺構と遺物

(1)　住居跡

柳町遺跡から検出された110軒の住居跡は、古墳時代が75軒、奈良・平安時代が９軒、時期不明が24軒となっている。分布的には調査区全体にわたっているが、中央部を東西に横切る埋没河川によって、南北二つの大群に分けることができる。南群の67軒はこの埋没河川と、仮称「城北川」のなす三角形の頂点部に分布している。また、北群は砂田遺跡まで広がり、一連の住居跡群を形成すると考えられる。砂田遺跡の分布状況を援用すれば、北群もほぼ城北川に沿った占地であることが窺える。密度的には南群に多いものの、調査区内では特定の部分に集中するようなことはない。重複は半数以上の住居跡で見られ、最大では６軒にも及んでいる。

遺存状態は埋没河川の両岸は比較的良いが、調査区両端部では削平が激しく、床面を失うものも少なくない。削平と遺構の遺存状態から見れば、本来の地形は北から南へ傾斜していたと思われる。このほか、全面に噴砂の亀裂が縦横に走り、ほとんどの遺構を破壊している。

カマドは調査区外や削平されてしまったもののほかは、大半の住居跡で検出されている。逆に、伴わないことが確実なのは、第19・42・53号住居跡の３軒である。本書ではこれらも住居跡として扱った。しかし、形状や床面の状態もやや異なっているなど、機能的には住居以外の遺構かもしれない。

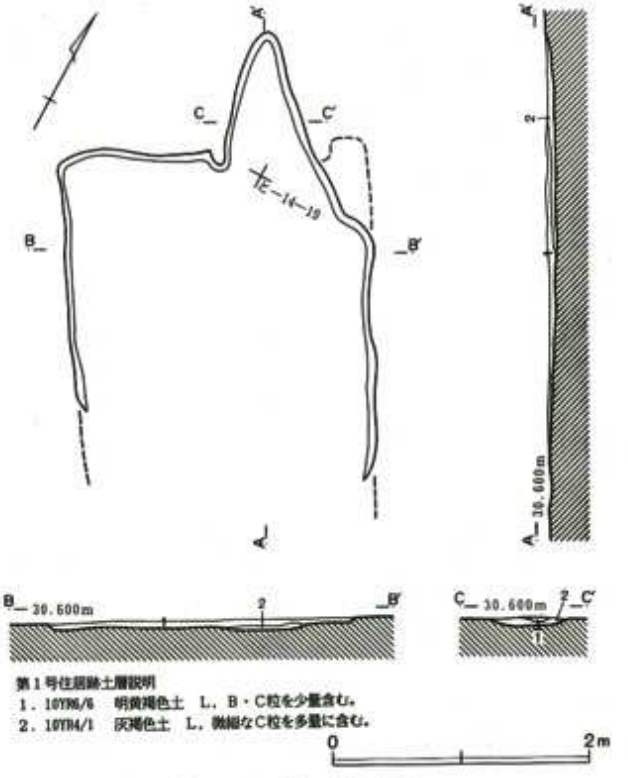
第１号住居跡（第130図）

と―14―13グリッドを中心に位置する。これより北側、および西側は削平が激しく、住居跡は検出されなかった。砂田遺跡の第１号住居跡とは約50mを隔てている。平面は長方形を呈し、南壁と北東隅部は削平のため失われている。現状での規模は軸長(2.64)m×2.33m、面積6.2m²を測る。主軸方向はおよそN―28°―Wを指す。

覆土は単一で厚さは４cm弱が残るにすぎない。床面は中央部が窪んでいる。

カマドは北壁の北寄りに設けられ、わずかに左袖が残存する。燃焼部は床面と一体で、煙道と区別も付けづらい。

遺物は時期不明の微細な破片のみであり、図示することはできなかった。



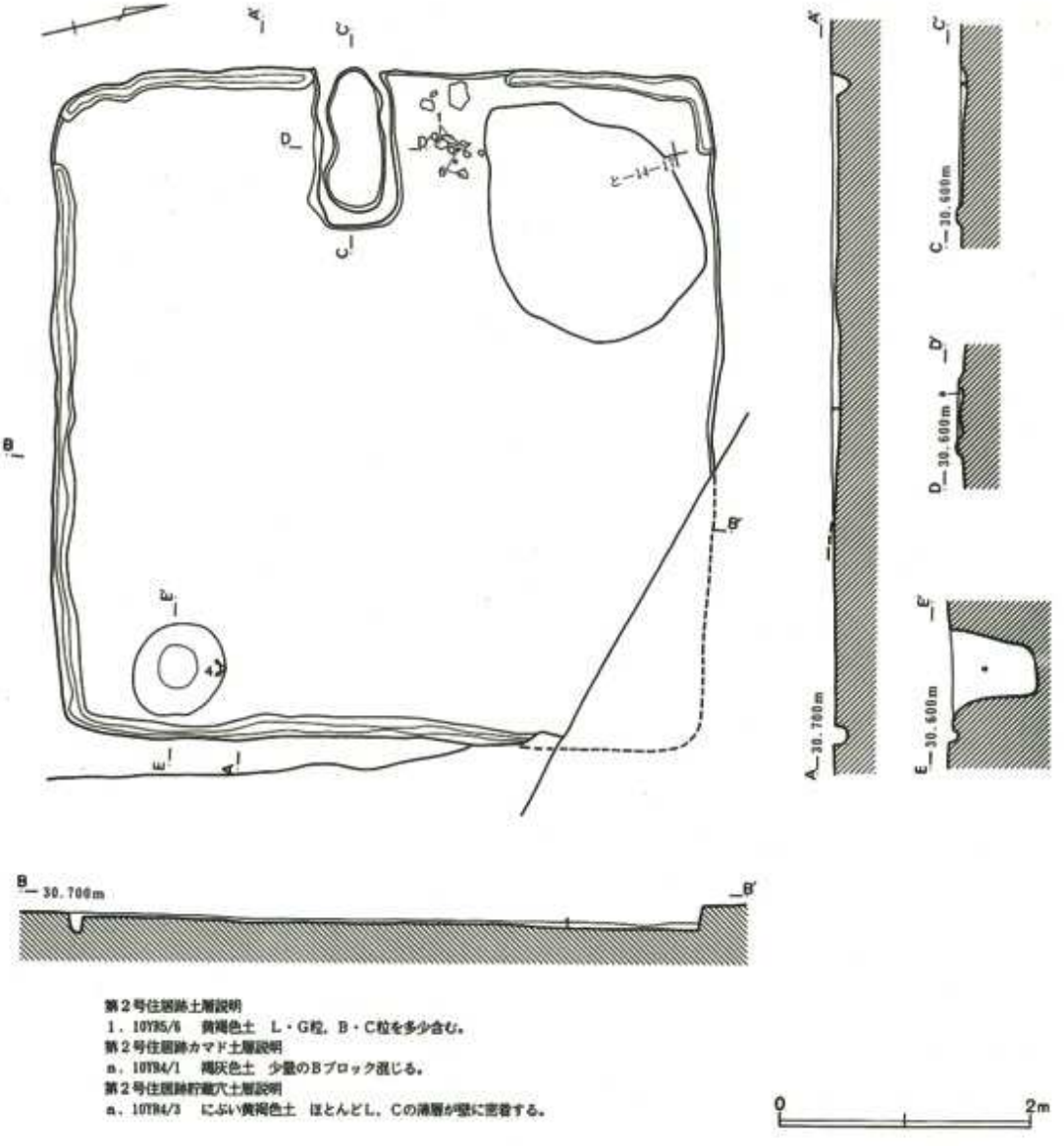
第130図　第１号住居跡

第２号住居跡(第131図)

と―14―13グリッドを中心に位置する。北東隅部がわずかに調査区外になるほか、第３号井戸跡が床の一部を掘り抜いている。全体は一辺5.25mの正方形を呈し、面積は約27.5m²を測る。主軸方向はほぼN―75°―Wを指す。

覆土は単一で、床の全面にはカヤ状の炭化物が密着している。ただし床面自体はまったく焼けていないため、焼失住居とは断定できない。遺構確認面からの深さは約６cmであり、床面は削平された東側がやや高い。なカマドの周辺は他の部分よりも硬くしまっている。

カマドは西壁の中央からやや南に寄っている。袖は壁より楕円状に削り出され、現状では高さ約



第131図　第２号住居跡

3㎝の突堤となっている。規模的には1.25m×0.7mほどで、燃焼部には灰が堆積している。

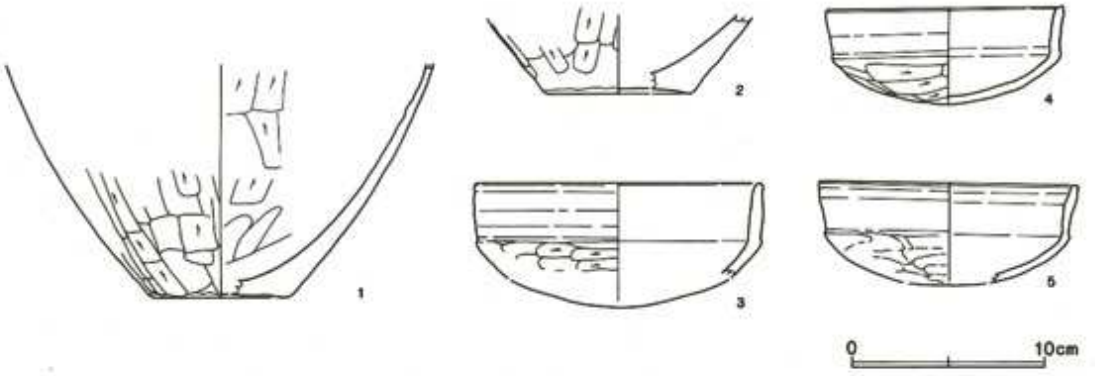
壁溝は幅約15㎝、深さ約7㎝で、部分的に途切れる。

貯蔵穴は住居跡の南東隅部に設けられ、平面は直径78㎝の円形を呈する。断面は逆台形状で、床面からの深さは72㎝を測る。覆土は地山の粘質土を主体にしており、やはり上部の壁にはカヤ状の炭化物が密着している。

遺物はカマドの右脇から坏や甕がまとまって出土している。いずれも炭化物の上に乗っており、破片となって散乱していた。

第2号住居跡出土遺物(第132図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	—　×(12.0)×(6.6)	底部	W+W′+B多	灰褐	
2	〃	—　×(3.9)×(7.4)	底部	W+W′+B	にぶい橙	
3	坏	(15.0)×(4.9)×　—	15%	W+W′多+R+B少	橙	
4	〃	12.6×　5.0×　—	70%	W+W′+R+B+B′	にぶい橙	
5	〃	(13.4)×(4.9)×　—	20%	W+R+B	橙	



第132図　第2号住居跡出土遺物

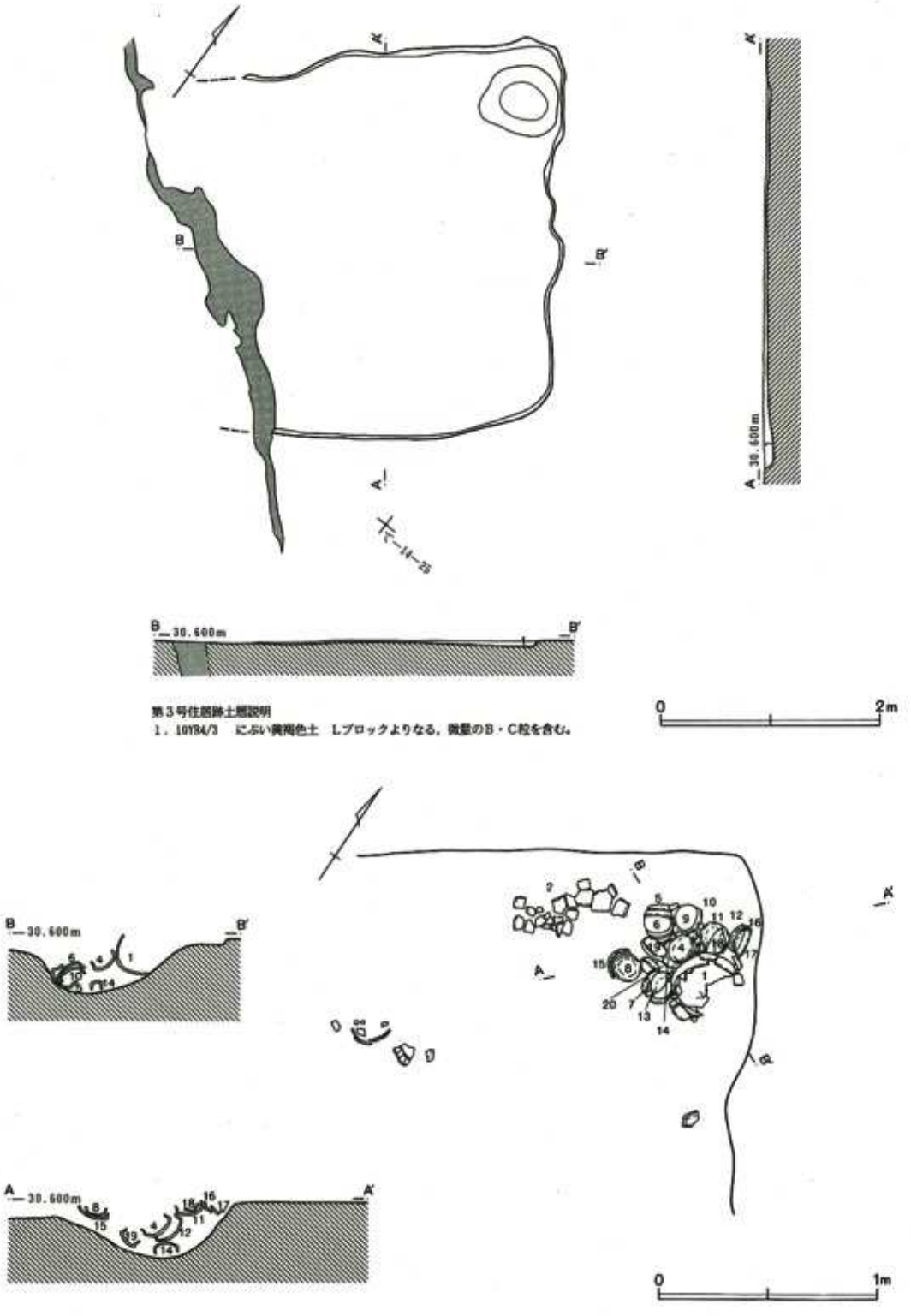
第3号住居跡(第133図)

て—14—25グリッドを中心に位置する。削平および噴砂の亀裂により、本跡は著しい損壊を受けている。平面形は方形、あるいは長方形であったものと思われるが、現状は南北(A—A′)で3.48mが測れるにすぎない。

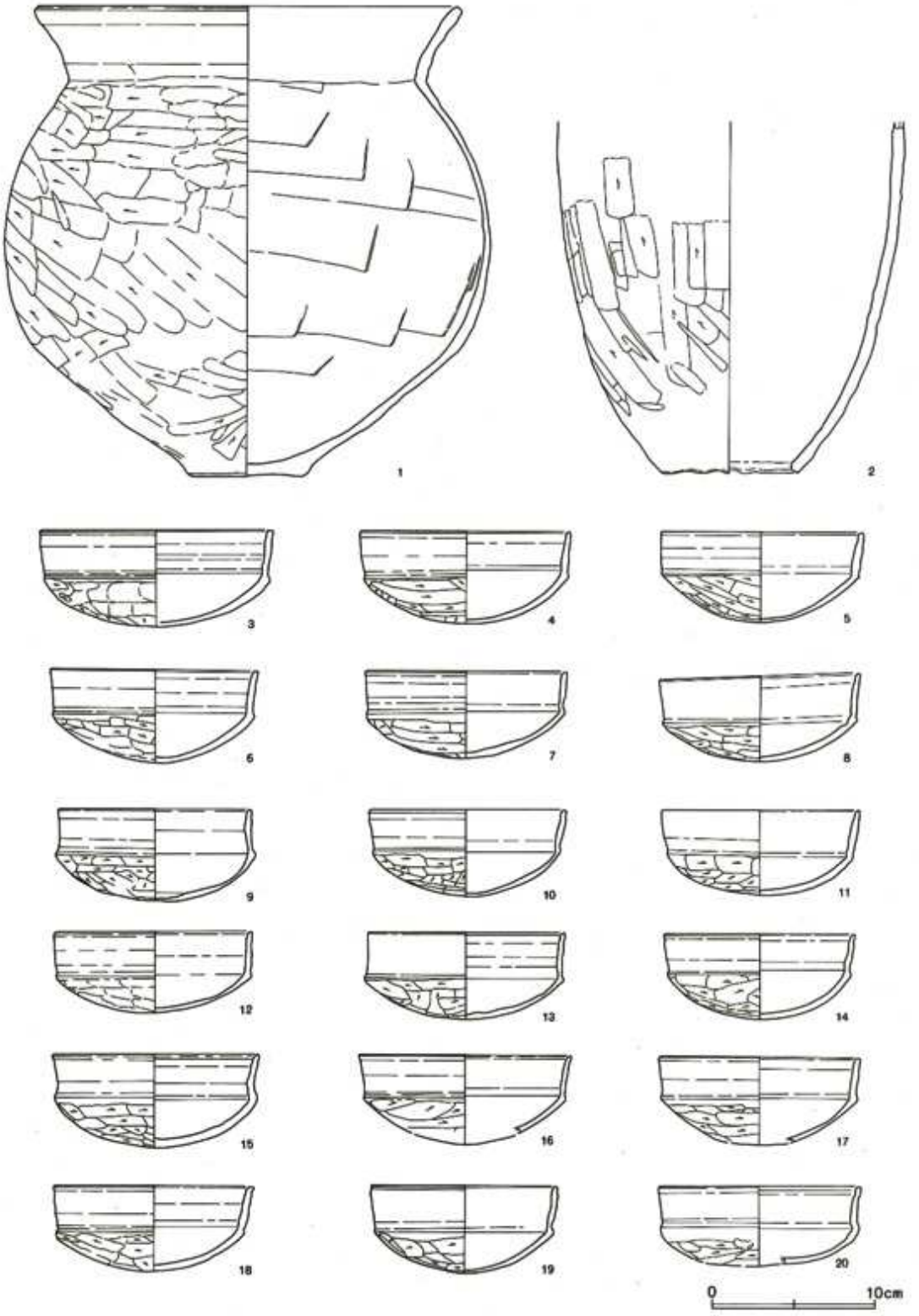
削平後も耕作機器による攪乱と塡圧により、覆土と床面・壁が同質化している。床面は中央部がやや高くなっており、壁際での深さは2㎝～3㎝である。南西部は地震で隆起し、その後に削平されたため、床と壁は完全に失われている。

カマドはその形跡すら確認できなかった。

北隅には多量の遺物を含む落ち込みが検出された。これは皿状の浅い窪みであり、いわゆる貯蔵穴とは異なるものである。遺物は大半が完形で、坏18個体、壺1個体が出土している。



第133図　第3号住居跡・同遺物出土状態



第134図　第３号住居跡出土遺物

第3号住居跡出土遺物(第134図)

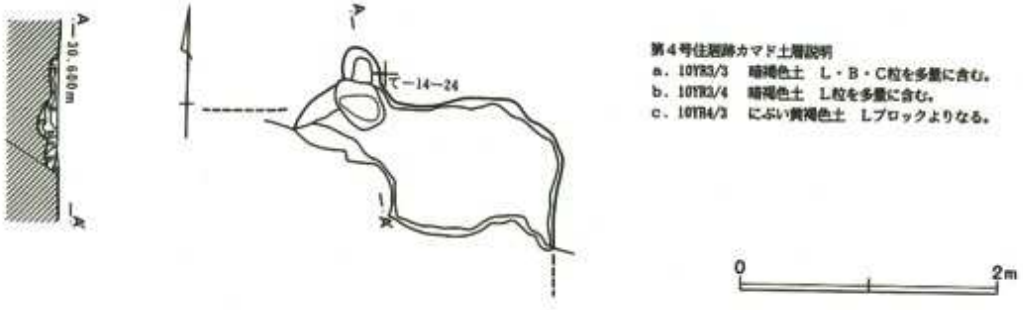
No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	(26.2)× 28.6 × 7.7	50%	W′多+R多+B′	灰白	
2	甑	— ×(21.8)× 8.2	胴～底部	W′+R+粗B多	灰黄褐	
3	坏	14.2 × 5.9 × —	ほぼ完形	W+W′多+R多+B+B′	橙	
4	〃	12.9 × 5.7 × —	〃	W+W′微+R+B	〃	
5	〃	12.6 × 5.4 × —	〃	W+W′+B+B′微	〃	
6	〃	12.6 × 5.7 × —	〃	W+W′+B多	〃	口縁やや歪む
7	〃	12.4 × 5.3 × —	〃	W+W′微+R+B+B′	〃	
8	〃	12.2 ×(5.2)× —	〃	W+W′+R多+B+B′多	〃	
9	〃	11.9 × 5.6 × —	〃	W+W′+B+B′	〃	
10	〃	12.1 × 5.2 × —	〃	W微+W′+R微+B+B′	〃	
11	〃	12.2 × 5.2 × —	〃	W+W′微+R多+B′	〃	
12	〃	12.0 × 5.1 × —	〃	W+W′多+B′微	〃	磨耗著しく口縁歪む
13	〃	12.2 × 5.2 × —	〃	W+W′微+R+B+B′	〃	
14	〃	11.7 × 5.1 × —	完形	W+W′+R少+B′	〃	
15	〃	12.8 × 5.7 × —	80%	W+R多+B	〃	
16	〃	(13.1)×(4.8)× —	30%	W+B多+B′多	〃	
17	〃	(12.4)×(5.2)× —	40%	W+R微+B′多	〃	
18	〃	12.2 × 5.2 × —	90%	W+W′+R+B	にぶい黄橙	口縁歪む
19	〃	11.6 × 5.2 × —	ほぼ完形	W+W′+R+B′	橙	
20	〃	(12.4)×(4.9)× —	50%	W+W′+R多+B	にぶい黄橙	

第4号住居跡(第135図)

て—14—18グリッドを中心に位置する。地震による隆起と削平により、その大部分は失われている。わずかに残存しているのは、北東隅部のみである。カマドより見れば、主軸方向はおよそN—10°—Wということになる。遺存する床面の状態も悪く、軟質で凹凸が激しい。

カマドは北壁に付設されている。燃焼部は床面よりも7cmほど低く、煙道は半円状に壁から突出している。覆土中に明瞭な灰層は観察されず、焼土も少ない。袖は検出されなかった。

遺物の出土はまったく見られず、本跡の所属時期は不明である。



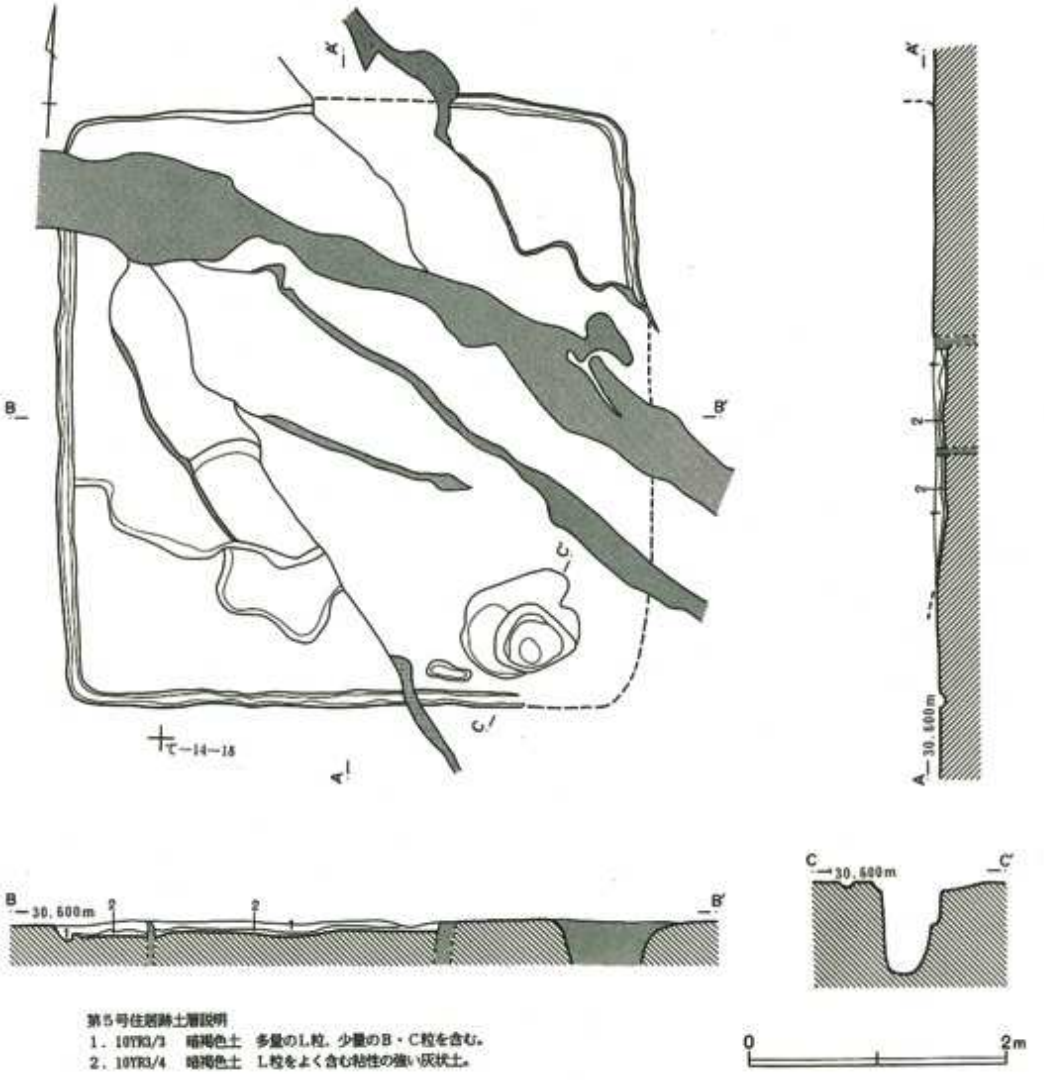
第135図　第4号住居跡

第5号住居跡(第136図)

て—14—17グリッドを中心に位置する。本跡も噴砂の亀裂と削平により、住居本来の姿は大きく損なわれている。平面は4.5m×4.6mの方形を呈し、面積は約20.7m²を測る。いずれの壁からもカマドが検出されなかったため、主軸の方向は不明である。仮に北壁に備わっていたとすれば、それはN—5°—Wとなる。

覆土は耕運機による塡圧などにより、かなり硬くしまっている。しかし、2層は住居使用時に堆積した塵埃や、人間の足について運び込まれた土を起源にすると思われ、農家の土間が想起される。このため、床面との境界は明瞭である。

床面は地震による亀裂を境に、至る所で段差が生じ、でこぼことなっている。加えて、後世の削平では高くなった面が削り取られている。それでも、残存部ではかなり硬く踏みしめられた様子が



第136図 第5号住居跡

窺えた。

カマドは完全に削平されたようで、なんらの痕跡も確認できなかった。可能性としては、北壁ないしは東壁それぞれの中央部であろう。

削平部を除けば、壁溝は北壁の西半で欠けている。幅10cm、深さ4cmほどで一定している。

貯蔵穴は南東隅部に備わるり、地震の影響であろうか、形は著しく乱れている。直径はおよそ50cm、深さは約70cmである。

遺物は覆土中より、坏の破片が少量出土している。

第5号住居跡出土遺物(第137図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	坏	(11.6)× 5.3 ×—	40%	W+W′+B+B′	にぶい橙	
2	〃	(13.1)×(4.6)×—	30%	W+R+B+B′	橙	
3	〃	(12.2)×(4.2)×—	30%	W+R+B+B′	にぶい橙	
4	〃	(11.9)×(4.0)×—	20%	W+W′+R	にぶい褐	

第137図　第5号住居跡出土遺物

第6号住居跡出土遺物(第139図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	坏	20.0 ×(6.6)×—	60%	R+B多+B′	にぶい橙	
2	〃	16.6 × 6.2 ×—	50%	W′+B′多	灰白	
3	〃	13.1 × 4.5 ×—	80%	W+W′微+R+B+B′	にぶい橙	
4	〃	13.6 × 4.3 ×—	90%	W+W′微+R+B+B′多	橙	
5	〃	13.8 ×(3.7)×—	30%	W+R+B	〃	
6	〃	(13.7)× 4.4 ×—	50%	W+R+B+B′多	黒褐	黒色
7	〃	13.0 ×(4.1)×—	60%	W+W′多+R+B+B′	橙	

第6号住居跡(第138図)

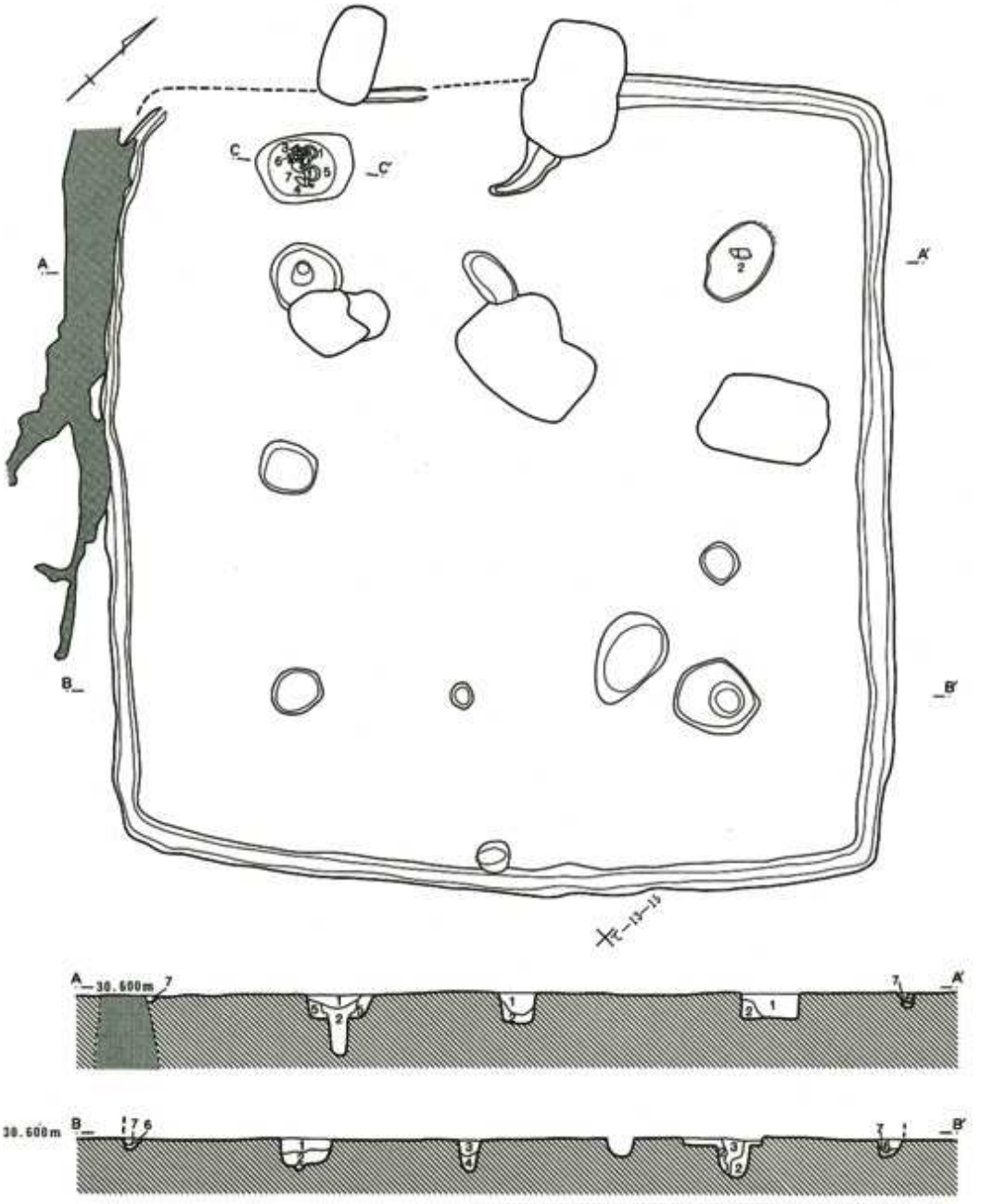
て—13—15グリッドを中心に位置する。噴砂の亀裂と第1号掘立柱建物跡に切られるほか、削平により床面の大部分を失っている。平面はやや四辺の膨らむ方形で、軸長は6.56m×6.8mほどである。面積は約44.6m²を測り、北西壁にカマドを想定すると、主軸方向はN—45°—Wとなる。

東隅の一部に残る床は硬く、よく踏みしまっている。ここと壁溝内からは、多量の焼土と炭化物が検出されており、本跡が焼失住居である可能性を窺わせている。

カマドは検出されなかった。壁溝の状態から見れば、北西壁の中央部に設けられていたものと考えられる。

壁溝は現状でもほぼ全周している。幅約20cm、深さは5cmから10cmと差がある。

貯蔵穴は東隅のやや北寄りに設けられる。80cm×62cmの楕円形で、深さは現状で約46cmを測る。覆土中位より坏がまとまって出土している。底面は平坦で、断面は箱形を呈する。



第6号住居跡土層説明

1．10YR3/4　暗褐色土　多くのLブロックのほか、B・C粒を含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　Lブロックよりなる。しまり強い。
3．10YR3/4　暗褐色土　しまり弱くボソつく。
4．10YR3/4　暗褐色土　3に準ずる。しまりさらに弱い。
5．10YR4/4　褐色土　Lブロックよりなる。しまり、粘性強い。
6．10YR3/3　暗褐色土　多量のBブロック、C粒を含む。
7．10YR4/4　褐色土　ほとんどL。

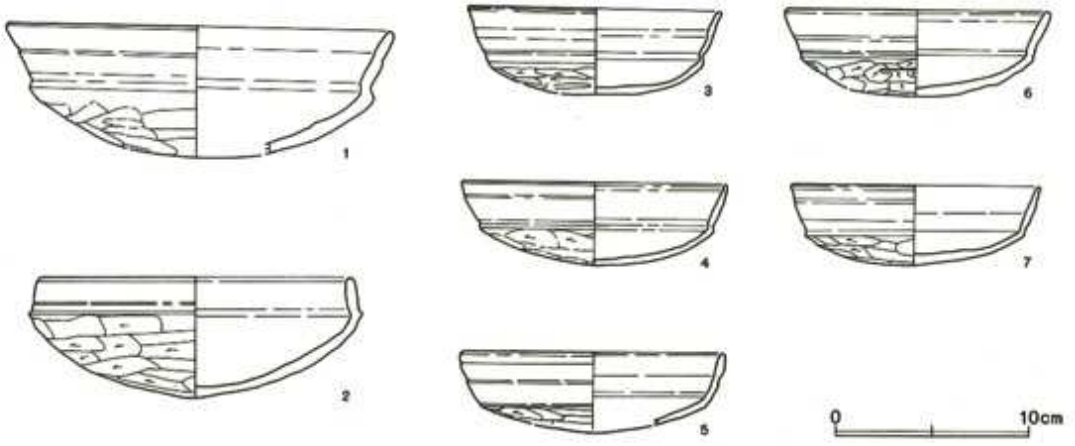
第6号住居跡貯蔵穴土層説明

a．10YR3/4　暗褐色土　L粒を多く含む。
b．10YR3/4　暗褐色土　aとの境にCの薄層。
c．10YR4/4　褐色土　Lブロックよりなる。
d．10YR4/3　にぶい黄褐色土　ほとんどL，粘性強い。

0　2m

第138図　第6号住居跡

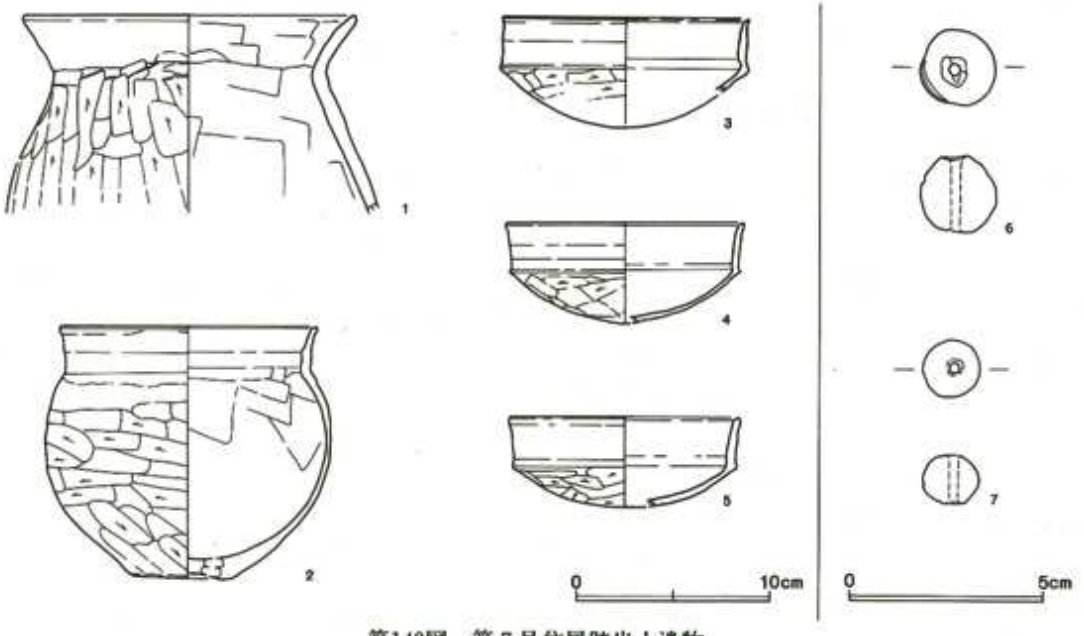
柱穴は住居跡の対角線上に4本が検出されている。直径40cm～60cm、深さ30cm弱で、貯蔵穴の南のものには柱痕が見られる。これ以外にも小穴が6個所で検出されたが、本跡に伴うものか否かは不明である。



第139図　第6号住居跡出土遺物

第7号住居跡(第141図)

と―13―10グリッドを中心に位置する。北側は調査区外となるため、半分以下の検出にとどまった。平面は方形あるいは長方形であろう。調査範囲では西・南壁ともに直線を描き、隅部はほぼ直角となっている。他の3隅が未検出であるため、規模や主軸方向は明らかとしえない。貯蔵穴の位置から推せば、カマドは北壁ないし東壁に存在すると考えられる。



第140図　第7号住居跡出土遺物

覆土は自然堆積であり、地山の粘質土を基本としている。遺構確認面から床までは約15cmである。床面は軟質で、中央部がやや高くなっている。また、西壁部は段状に低くなっている。

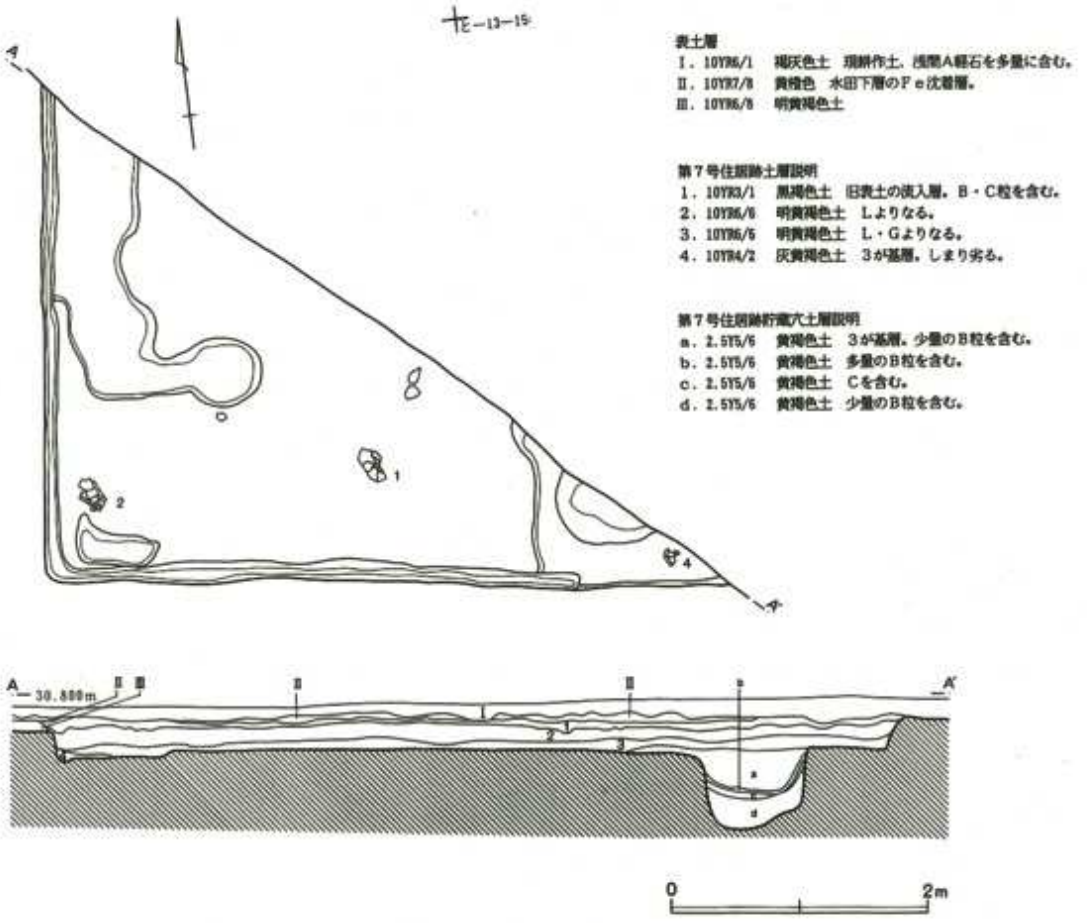
調査された部分での壁溝は、貯蔵穴部を除いて全周する。幅はおよそ13cm、床面からの深さは6cm～7cmで一定している。

貯蔵穴の位置は南東隅部を示すものと思われる。上部は方形に浅く窪み、その中央が深さ50cmほどに掘り込まれる。覆土中には焼土や炭化物をよく含んでいる。

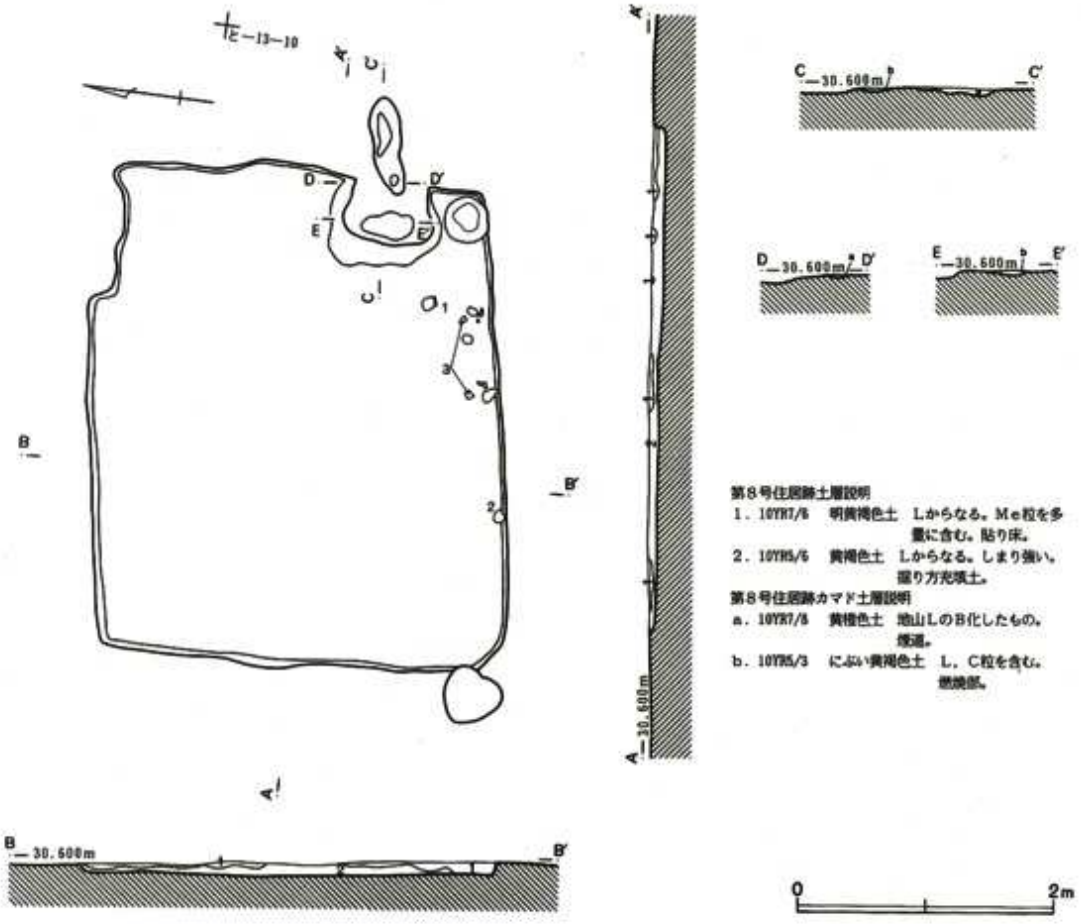
遺物には甕・小型甕・坏・土玉がある。いずれも床面よりわずかに浮き、破片となっている。

第7号住居跡出土遺物(第140図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	17.0 ×(10.2)× —	口縁～肩部	W+W′+R+B+B′	にぶい黄褐	
2	小型甕	13.6 × 13.3 × 5.0	90%	粗(W+W′+B)+B′	にぶい赤褐	
3	坏	(12.8)×(4.5)× —	30%	W+W′+B′	橙	楕円状に歪む
4	〃	(12.4)× 5.2 × —	40%	W+W′+R+B	にぶい黄褐	
5	〃	(12.0)×(4.6)× —	25%	W+W′多+R+B′	〃	



第141図　第7号住居跡



第142図　第8号住居跡

第8号住居跡(第142図)

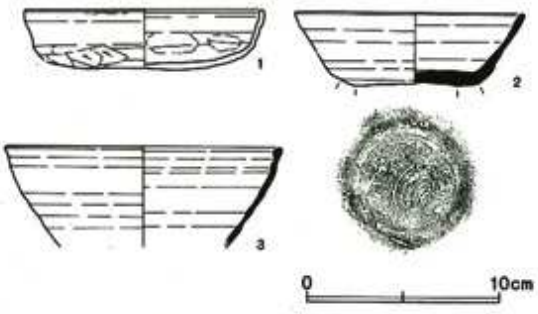
と—13—5グリッドを中心に位置する。本跡は床面まで完全に削平されているため、ここに図示したものは住居の掘り方とカマドの残存部である。現状での平面形は平行四辺形ぎみで、規模は3.87m×3.2m、面積約12.4m²を測る。主軸方向はおよそN—93°—Eを指す。

掘り方は遺構確認面から8cmほどの深さを有し、底面は概ね平坦である。覆土は1層が貼り床、2層が充填土である。

カマドは東壁のかなり南側に設けられている。燃焼部と煙道の痕跡が確認されたにすぎず、形状や規模などは不明である。燃焼部は地山が半円状に掘り残されたもので、掘り方底面よりも一段高くなっている。

貯蔵穴は南東隅部、カマドの右脇に位置する直径40cm、深さ20cmほどの小穴である。

遺物は充填土中より少量出土している。



第143図　第8号住居跡出土遺物

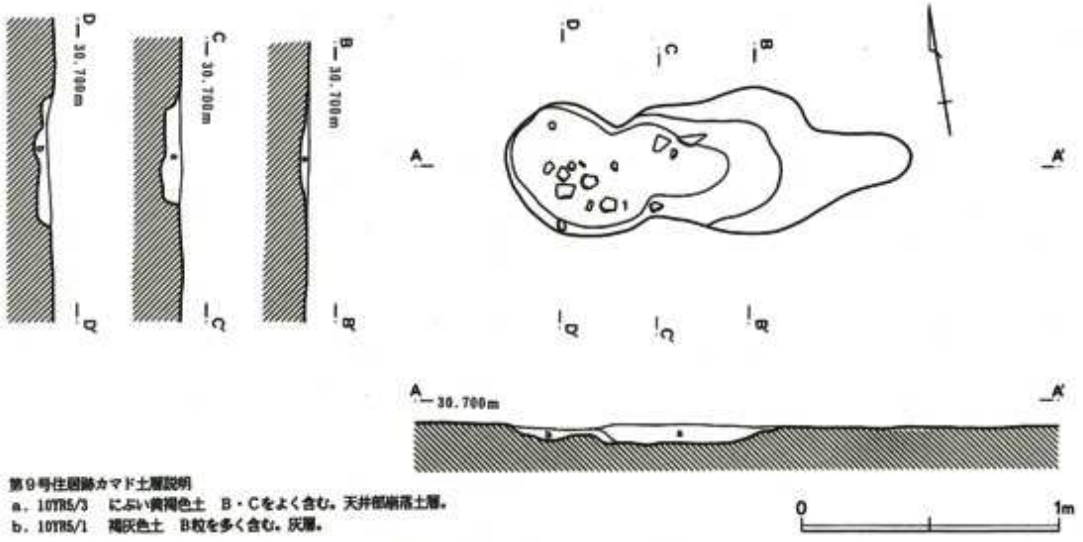
第８号住居跡出土遺物（第143図）

No.	器種	法　　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	坏（土師）	(12.4)×　3.1 ×—	70%	W＋W′＋B＋B′多	にぶい橙	底部—回転糸切り 周辺—回転ヘラ削り
2	〃（須恵）	(11.4)×　3.7 × 6.1	70%	W＋W′＋B	灰白	
3	〃（　〃　）	(14.4)×（ 5.2)×—	破片	W＋W′＋B＋粗礫少	〃	

第９号住居跡（第144図）

て—13—18グリッドに位置する。カマド燃焼部のみの残存である。おそらく住居跡本体は、この西側に存在していたのであろう。遺構確認時の観察では、第10号住居跡にわずかに残る覆土上に検出されている。住居跡の規模や形状はまったく不明で、カマドの方向N—99°—Eがかろうじて測れるにすぎない。

確認されたカマドの範囲は1.57m×0.55m、深さは７cmほどである。火床面は西側の赤く焼けた部分で、東側へ舌状に延びる部分が煙道と思われる。燃焼部からは甕や須恵器の坏破片が少量出土している。



第９号住居跡カマド土層説明
a．10YR5/3　にぶい黄褐色土　B・Cをよく含む。天井部崩落土層。
b．10YR5/1　褐灰色土　B粒を多く含む。灰層。

第144図　第９号住居跡（カマド）

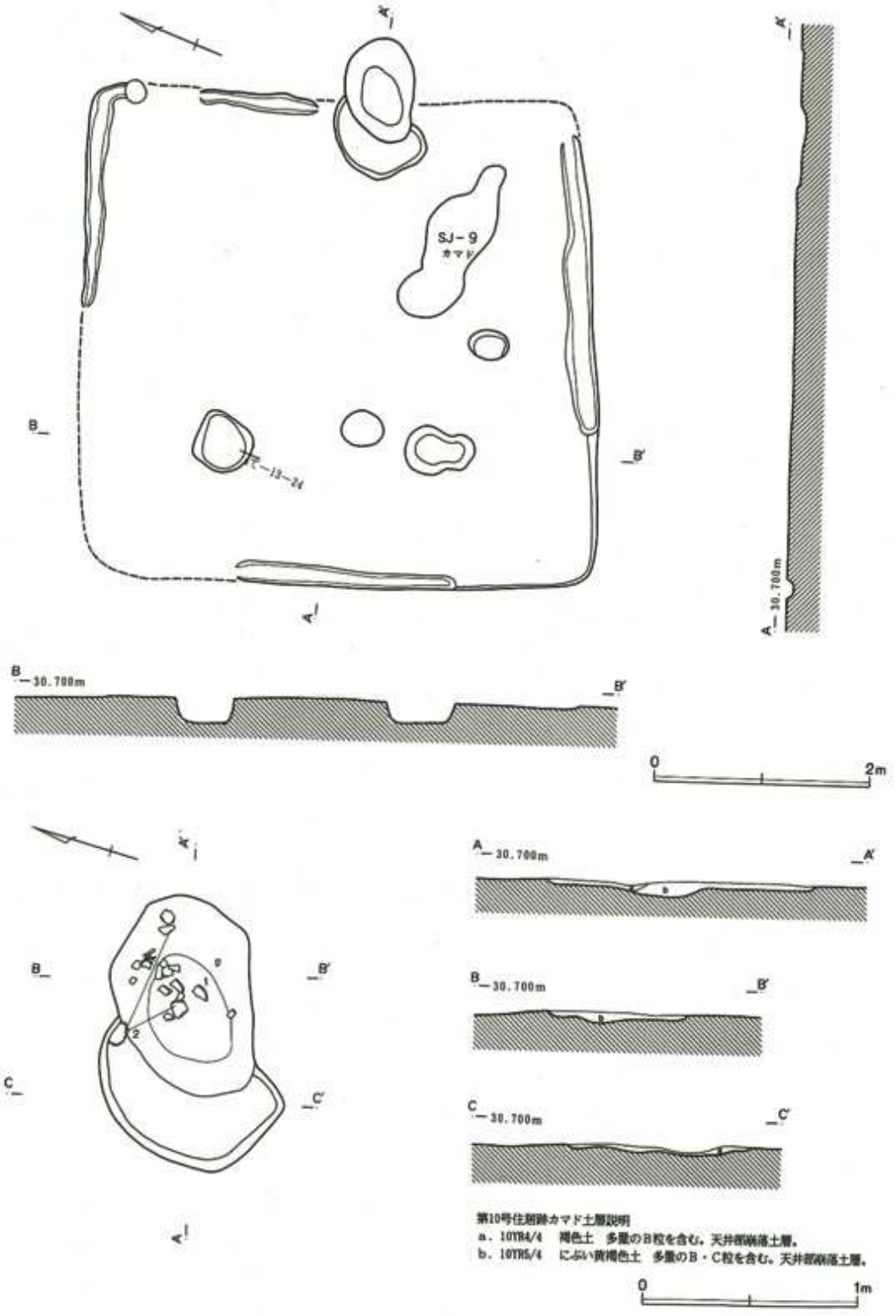
第10号住居跡（第145図）

て—13—18グリッドを中心に位置する。第11号住居跡の覆土を掘り込んで設営されているが、床面はほとんど削平されている。残存するカマドや壁溝から想定される姿は、およそ4.46m×4.73mの方形を呈する。面積は約21.1㎡となり、主軸方向はおよそN—69°—Eを指す。

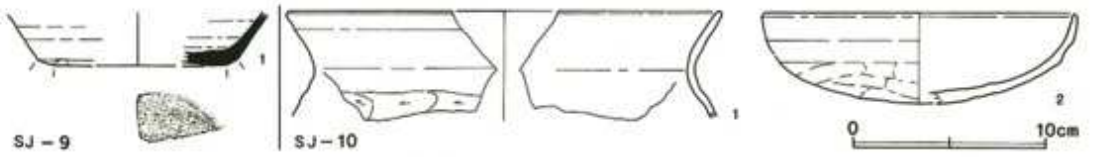
覆土と床面は部分的に残りはするものの、その状態は極めて悪い。覆土は薄皮状で、床面も塡圧を受けており不明瞭である。

壁溝は南東隅部で切れることが確認された。南壁では幅約20cm、深さ５cmほどである。

カマドは東壁中央部に付設されており、燃焼部とこれに続く足場状の窪みが残存していた。燃焼部は96cm×66cmほどの楕円形を呈し、覆土には焼土を多量に含んでいる。



第145図　第10号住居跡



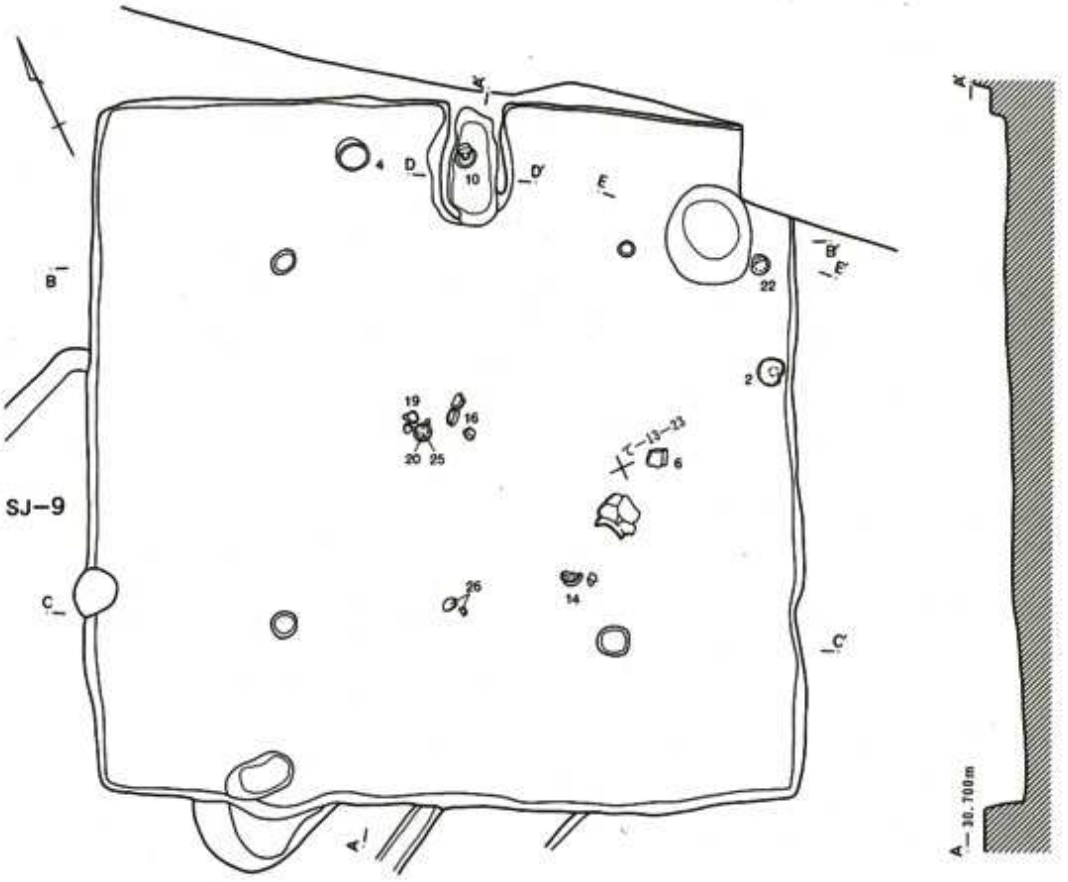
第146図　第9・10号住居跡出土遺物

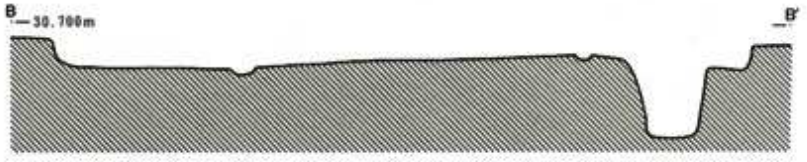
第9・10号住居跡出土遺物（第146図）

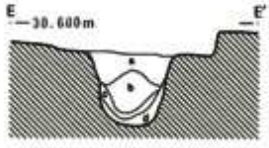
No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
第9号						
1	坏	― ×(2.8)×(9.2)	底部破片	W＋粗W′	灰黄褐	回転ヘラ削り
第10号						
1	甕	(22.6)×(5.6)× ―	口縁破片	W＋W′多＋B	にぶい黄橙	
2	坏	(16.4)× 4.9 × ―	40%	W＋W′＋B＋B′	にぶい褐	外面一磨耗の為、ヘラ削りの単位は不明瞭

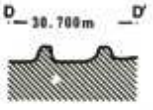
第11号住居跡出土遺物（第148・149図）

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	(18.8)×(11.8)× ―	口縁～肩部片	W＋R＋B＋B′	にぶい褐	
2	〃	― ×(6.9)× 7.0	底部	粗W＋W′＋B′微	にぶい黄橙	底部ヘラ削り
3	甕	19.0 ×(24.7)× ―	70%	粗砂(W＋W′＋B＋B′)多	灰白	
4	〃	17.5 ×(17.5)× ―	50%	W′＋R＋B′＋粗砂	〃	
5	〃	18.3 ×(13.4)× ―	40%	W＋W′＋B＋B′	〃	
6	甑	(25.4)×(16.5)× ―	口縁～胴部片	W＋W′微＋R＋B′	橙	
7	〃	― ×(16.7)×10.6	胴中部破片～底部	W＋粗R＋B＋B′	にぶい橙	
8	鉢	(19.2)×(11.1)× ―	30%	W＋W′＋B＋B′	明赤褐	外面ヘラナデ
9	坩	8.7 × 16.0 × ―	完形	W＋W′＋R＋B′	〃	
10	高坏	12.0 × 8.6 × 9.7	80%	W微＋W′＋B′	〃	
11	坏	(15.5)× 6.5 × ―	40%	W＋W′＋R多＋B＋B′	橙	
12	〃	15.0 ×(6.0)× ―	70%	W＋W′＋R＋B＋B′	にぶい橙	
13	〃	12.8 × 5.5 × ―	60%	W＋R＋B′	にぶい黄橙	
14	〃	12.4 × 5.4 × ―	ほぼ完形	W＋W′＋R多＋B＋B′多	橙	磨耗著しい
15	〃	12.1 × 5.6 × ―	〃	W＋W′＋R微＋B′多	にぶい橙	
16	〃	12.0 ×(5.2)× ―	50%	W＋W′＋R＋B	橙	
17	〃	(12.8)×(5.7)× ―	60%	W＋W′＋R＋B′	〃	
18	〃	(13.0)×(5.1)× ―	50%	W微＋W′＋B多＋B′	にぶい橙	
19	〃	13.3 ×(5.4)× ―	60%	W＋W′微＋B多＋B′	橙	
20	〃	12.1 × 4.9 × ―	完形	W＋W′＋R少＋B′多	にぶい橙	磨耗著しい
21	〃	12.0 ×(5.4)× ―	60%	W′＋R＋B′多	〃	
22	〃	12.1 × 5.7 × ―	完形	W＋W′＋R＋B′	〃	
23	〃	(12.8)×(5.7)× ―	40%	粗W＋B＋B′	橙	
24	〃	(12.2)×(5.9)× ―	40%	W＋W′＋B＋B′	にぶい橙	
25	〃	10.4 × 5.1 × ―	完形	極微細(W′＋R＋B′)	〃	口縁楕円状に歪む 内面一煤ける
26	〃	10.1 × 4.4 × ―	90%	W＋W′＋粗B	橙	
27	支脚	― ×(9.5)× ―	両端欠く	W＋W′＋B	〃	





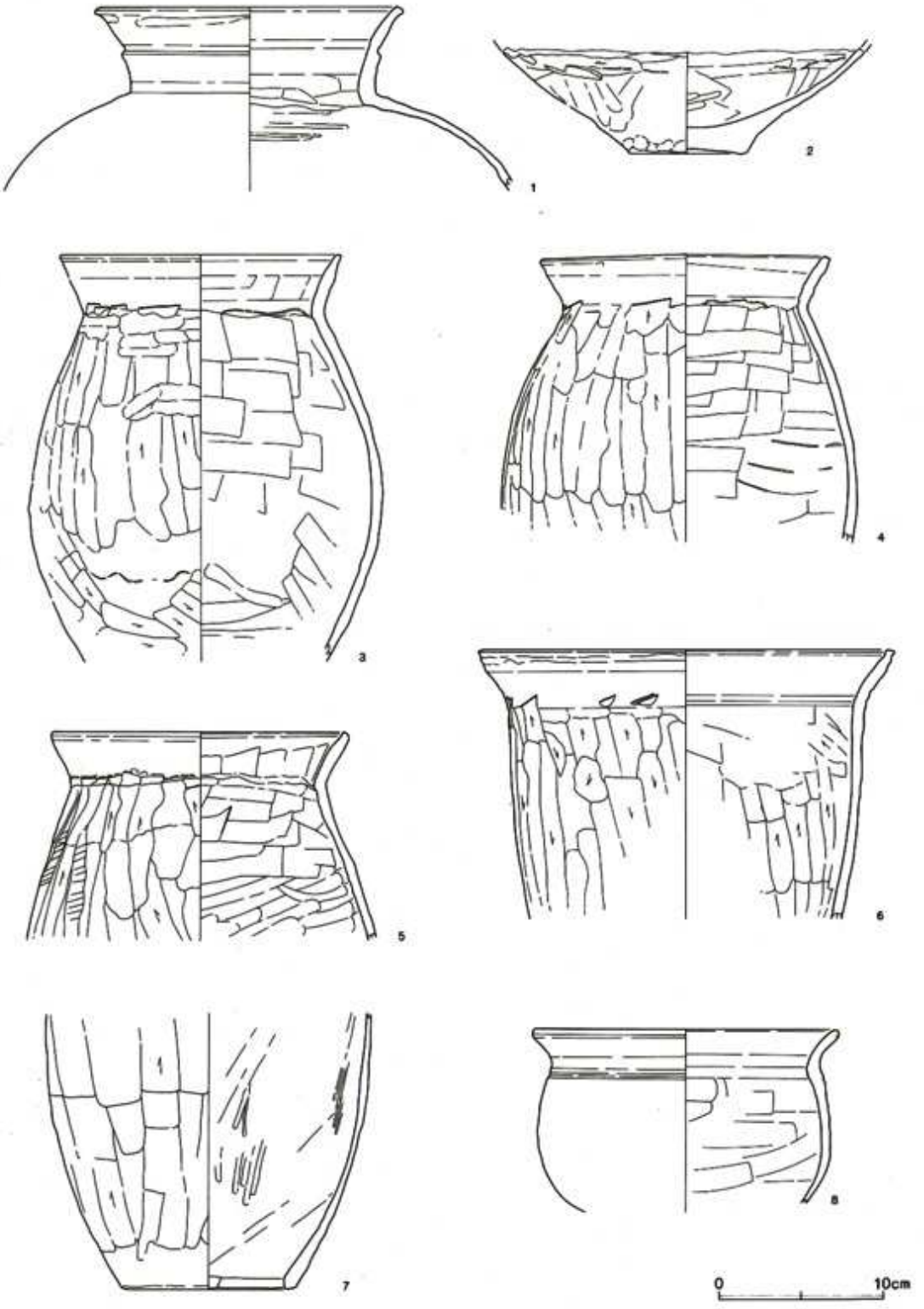




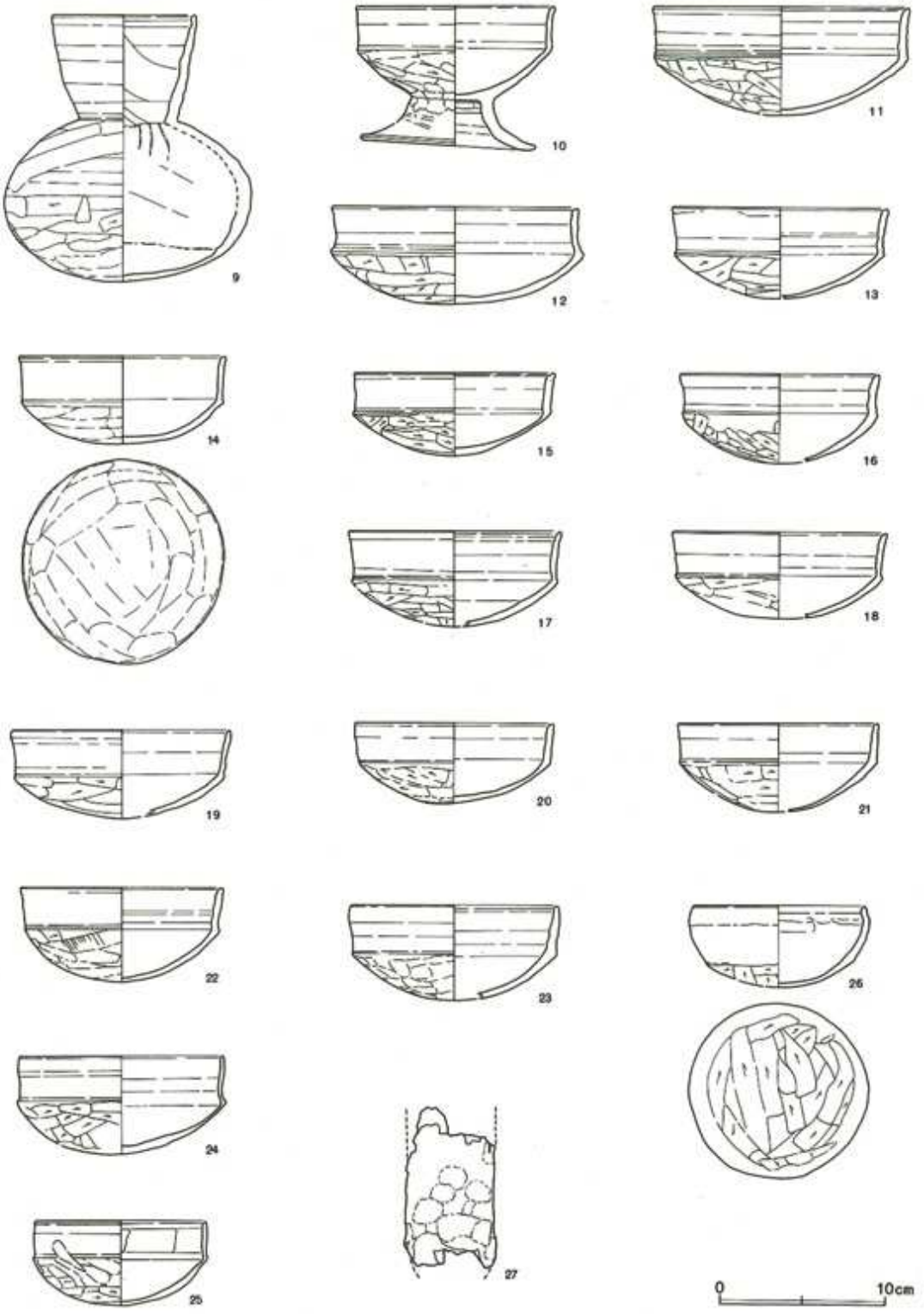
第11号住居跡貯蔵穴土層説明
a．黄褐色土　Lよりなる。G・C粒をよく含む。
b．黄褐色土　aに準ずるが、しまり劣る。
c．灰色粘質土　G，C・L粒を含む。
d．灰色粘質土　cに準ずるが、C粒を含まない。

0　2m

第147図　第11号住居跡



第148図　第11号住居跡出土遺物(1)



第149図　第11号住居跡出土遺物(2)

第11号住居跡(第147図)

て—13—23グリッドを中心に位置する。南隅部で第15号住居跡を切断し、覆土上には第10号住居跡が乗る。平面は方形を呈し、各隅部のなす角度は鋭い。規模は軸長5.4m×5.47m、面積約29.5m²を測る。主軸方向はほぼN—25°—Eを指す。

カマドを含めた覆土の状態は、担当調査員が観察を怠ったため、示すことができなかった。

床面は東から西へ向かって傾斜するうえ、起伏もかなり多い。遺構確認面からの深さは東隅部で18cm、西隅部で33cmとなっている。

カマドは北西壁の中央部に設けられる。両袖は壁から削り出され、燃焼部全体は90cm×63cmほどの楕円形を呈している。袖の高さは削平のため一律になっているが、焚き口部は開口している。火床面は床面よりも2cm深くなっており、袖内面とともによく焼けている。その中央部左寄りには、支脚として高坏(10)が逆位に据え置かれている。

貯蔵穴は東隅部のやや内側に穿たれている。径74cm×65cmの楕円形で、床からの深さは58cmを測る。断面は逆台形状となり、底面は概ね平坦である。

住居跡の対角線上には4個所の窪みが見られる。どれも「へこみ」程度の浅いもので、柱穴として掘り込まれたような形跡は窺えなかった。

遺物は住居跡中央部に坏6個体(14・16・19・20・25・26)と甑(6)、カマド左脇に伏せられた状態で甕(4)、貯蔵穴脇に完形の坏(22)、その南の壁際に鉢に転用したと思われる壺の底部(2)が、いずれも床面直上から出土している。図示した遺物のうち、上記以外は覆土中からの出土である。

第12号住居跡(第150図)

て—13—19グリッドを中心に位置する。東隅部は第13号住居跡の覆土上に乗り、西隅は攪乱坑、南東壁は削平によって失っている。全体は(4.9m)×5.72mの長方形を呈し、主軸方向はおよそN—47°—Wを指す。面積は28m²ほどとなろう。

覆土は1cm～2cmばかりの残存で、ほとんど地山化している。床面も耕作による攪乱を受け、遺存状態は極めて悪い。面的には平坦といえよう。

カマドは北西壁の中央からやや南へ偏っている。削り出された両袖は壁より舌状に垂下し、燃焼部を楕円形に区画している。燃焼部は長さ約1m、幅約0.4mで、床から火床面までは約4cmが測れる。

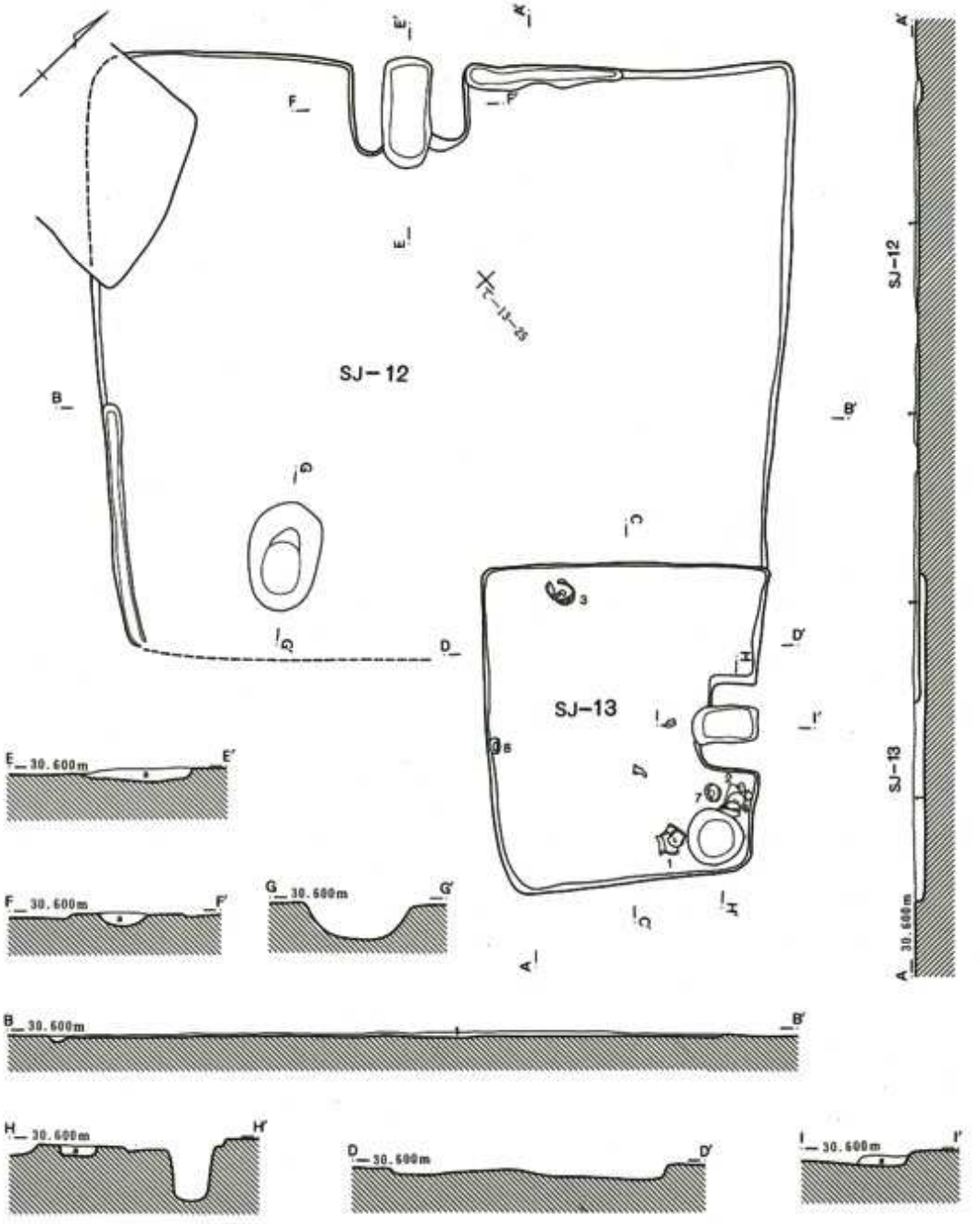
貯蔵穴の掘られた位置は、南隅部からかなり中央へ寄っている。平面は径92cm×59cmほどの楕円形となり、床面からの深さは約20cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかであり、断面は擂鉢状を呈する。

遺物の出土は見られなかった。

第13号住居跡(第150図)

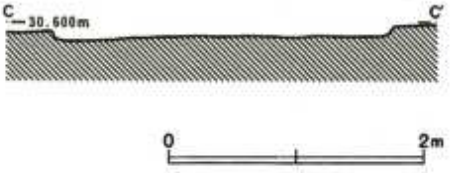
て—13—19グリッドに位置する。北西壁上には第12号住居跡が乗る。南東壁が短いため、平面形は台形状を呈している。軸長2.35m×2.65m、面積約6.2m²という規模は、柳町遺跡で検出された住居跡中2番目に小さい。主軸方向はおよそN—41°—Eを指す。

覆土は単一で、地山の粘質土からなっている。やはり耕作による攪乱や塡圧を受けており、床面



第12号住居跡土層説明
1．10YR5/6　黄褐色土　L．Fe・Mn粒を多く含む。
第12号住居跡カマド土層説明
a．10YR5/6　黄褐色土　B・C粒を含む。

第13住居跡土層説明
1．10YR5/6　明黄褐色土　L．G・Mn粒を含む。
第13住居跡カマド土層説明
a．10YR5/4　にぶい黄褐色土　Cおよび多量のB粒を含む。



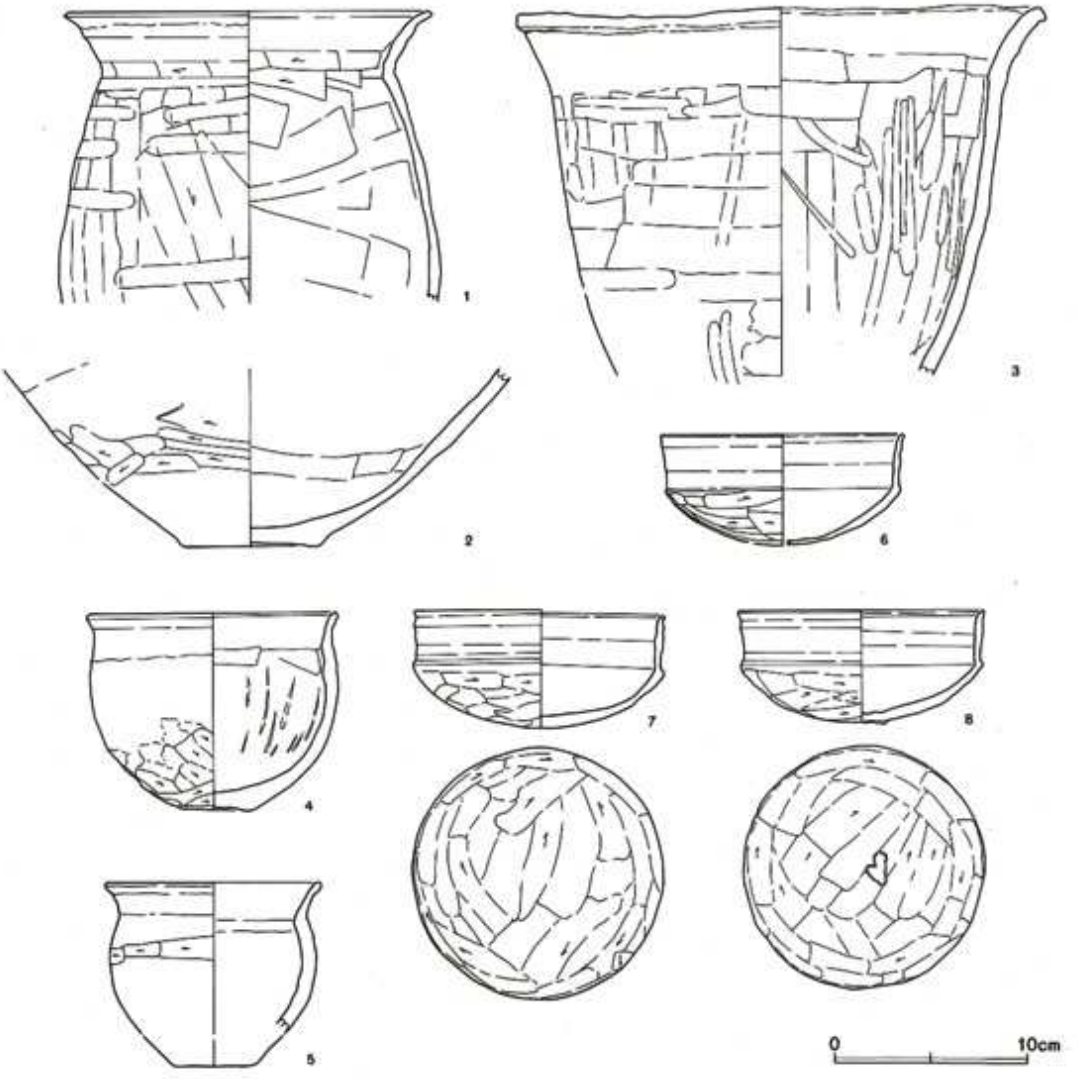
第150図　第12・13号住居跡

との境界は不明瞭である。遺構確認面からの深さは約7㎝で、床面の中央部はわずかに高くなっている。

カマドは北東壁の中央に設けられ、形状は第12号住居跡のものによく似ている。袖は舌状に削り出され、燃焼部側は直線的である。このため、燃焼部は長さ56㎝、幅30㎝ほどの長方形になっている。火床面は床から緩やかに傾斜し、壁部で鋭く立ち上がっている。

貯蔵穴はカマドの右側、住居跡東隅部に備わる。直径約55㎝の円形で、床面からは37㎝の深さを有する。断面形は円筒状をなし、底面は平坦となる。

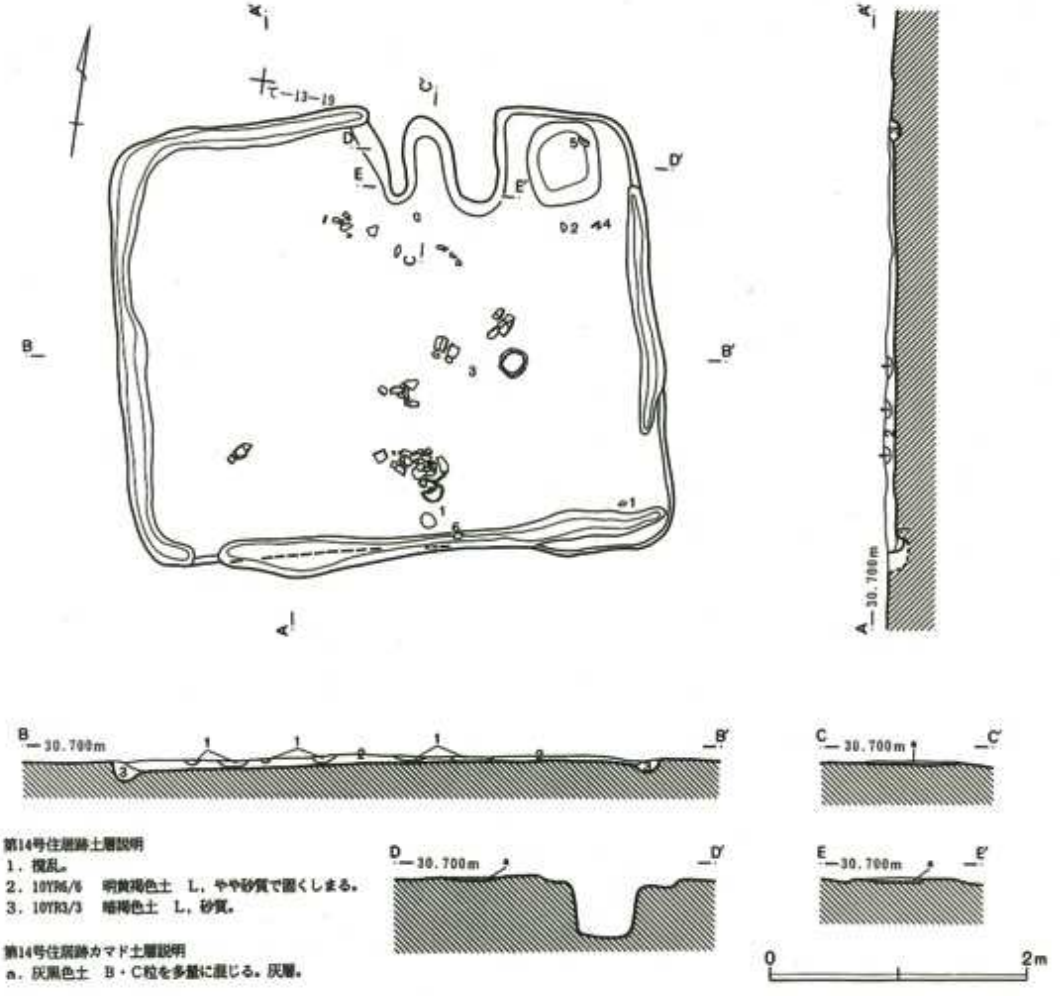
遺物は貯蔵穴のまわりから坏(7)・小型甕(4)・壺(2)・甕(1)が、南西壁中央部から坏(8)、西隅部から甑(3)が各々出土している。レベル的にはすべて床面直上である。



第151図　第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡出土遺物（第151図）

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	甕	(19.2)×(15.2)× —	口縁一胴部片	W多＋B＋B′	明赤褐	外面―ヘラ削りはナデ状 内面―指ヨコナデ
2	壺	— ×(9.2)× 7.2	底部	W＋W′＋粗B多	にぶい橙	
3	甑	27.5 ×(19.2)× —	60%	W微＋W′＋粗R多＋B′	橙	外面―ヘラ削り→ヨコナデ 内面―ヘラナデ、一部ミガキ状
4	小型甕	13.2 × 10.8 × 3.3	完形	粗W＋細W′＋B＋B′少	明褐	磨耗著しい
5	小型壺	(11.2)× 7.8 × —	破片	W微＋粗W′＋R＋B′	橙	
6	坏	12.6 × 5.7 × —	80%	W＋W′＋B＋B′	〃	底部ヘラ削り
7	〃	12.6 × 6.1 × —	完形	W微＋W′＋R＋B′多	〃	
8	〃	12.8 × 5.8 × —	〃	W＋W′＋R＋B′	〃	



第152図　第14号住居跡

第14号住居跡(第152図)

て—13—13グリッドを中心に位置する。平面は長方形で、四隅は丸みを有している。軸長3.46m×4.15m、面積約14.4㎡を測る。主軸の方向はおよそN—17°—Wを指す。

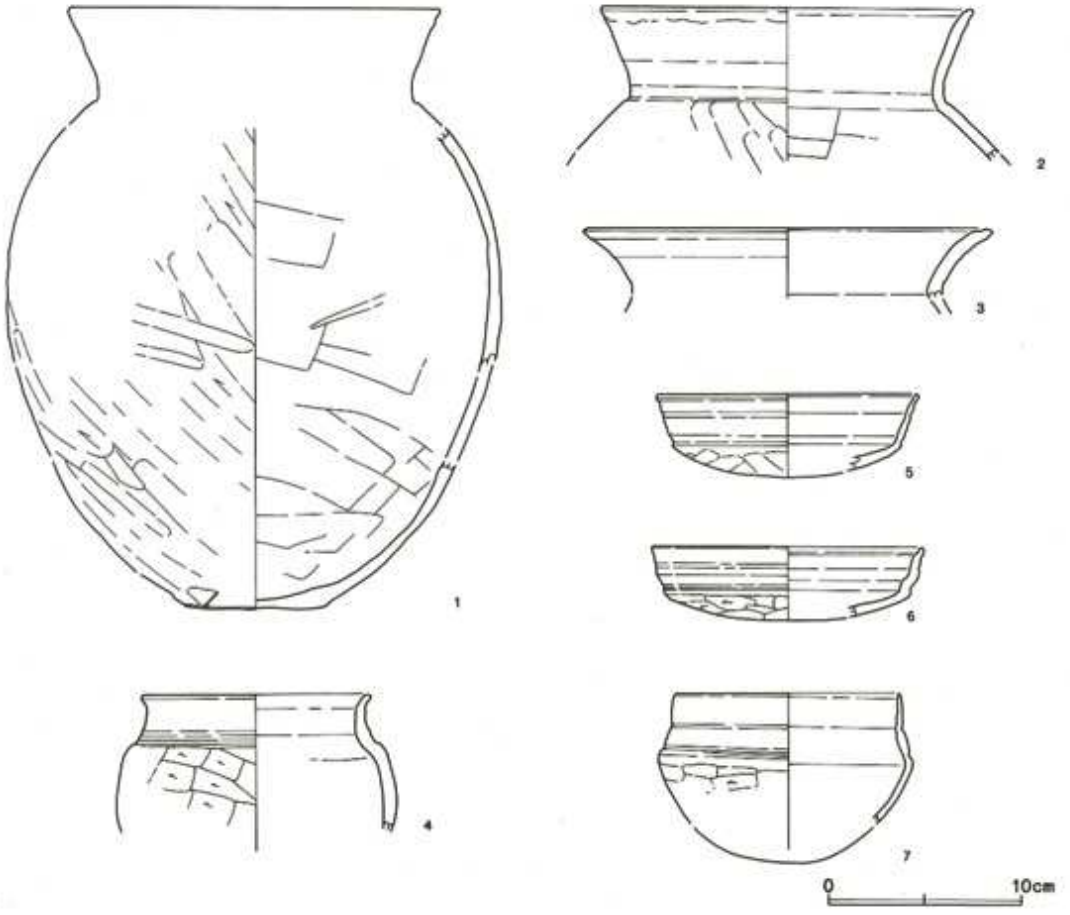
覆土はやや砂質の地山を主体にしており、耕作の影響で硬くしまっている。床までは平均5㎝程度である。床面は全体的に緩傾斜(北東から南西)しているほか、中央部がわずかに盛りあがっている。カマドの手前から中央部は比較的硬質である。

カマドは北壁やや東寄りに設けられている。袖は壁より舌状に削り出され、右袖は基底部とはいえ、幅が58㎝にも達する。燃焼部は両袖の開口部で幅約53㎝、奥行き約75㎝である。火床面は床面と同一レベルで、燃焼部内には灰層が形成されている。

貯蔵穴は北東隅部に備わり、空間的にはカマド右袖によって、独立性の高いものとなっている。上面は68㎝×59㎝の方形を呈し、深さは39㎝を測る。断面はきれいな箱形で、底面は平坦である。

壁溝は貯蔵穴の周囲など、部分的に切れはするものの、幅15㎝～20㎝でほぼ全周している。

床面上には壺(1・2)等が、破片となって散乱していた。



第153図　第14号住居跡出土遺物

第14号住居跡出土遺物(第153図)

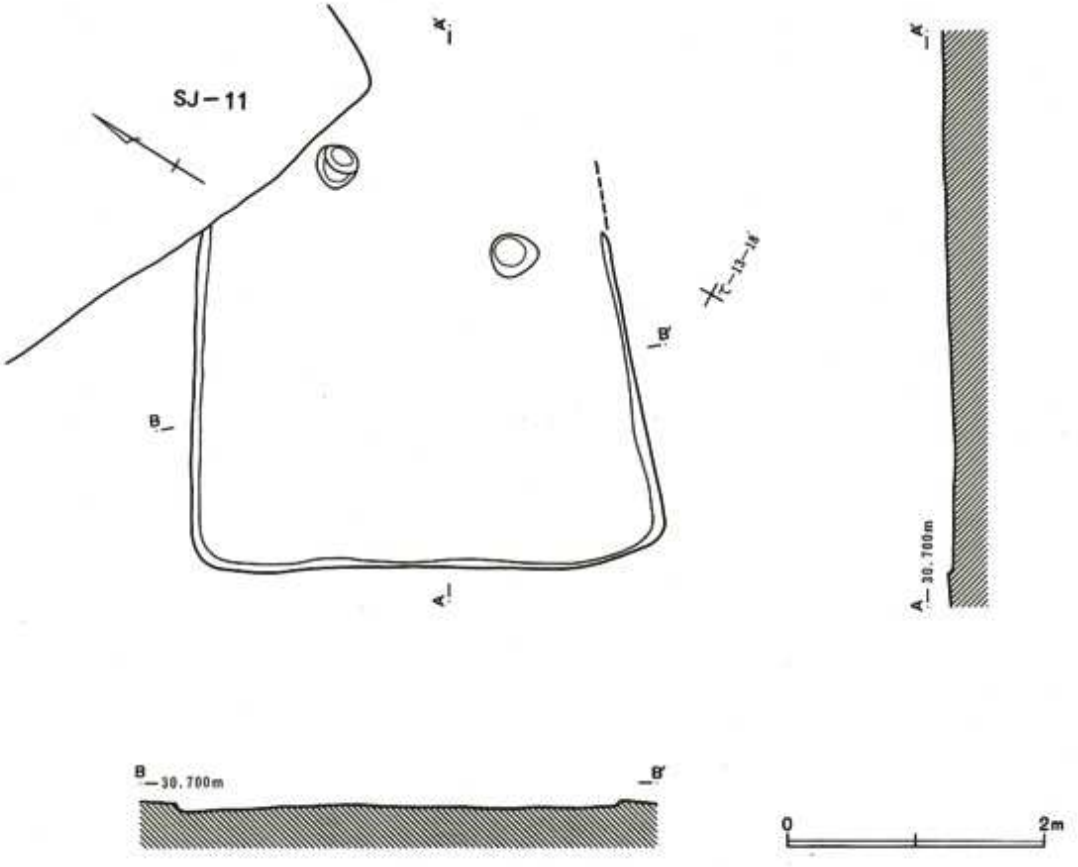
No.	器種	法　　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	—　×(24.9)× 7.4	40%	粗(W+W′+B′) 多	にぶい黄褐	
2	〃	19.0 ×(9.2)×　—	口縁～肩部	粗(W+W′+B+B′)	橙	剥落著しい
3	甕	21.2 ×(3.5)×　—	口縁	W+粗B多+B′多	にぶい黄橙	
4	小型壺	(12.4)×(6.7)×　—	口縁片	W微+R微+B′多	〃	
5	坏	(13.7)×(4.0)×　—	20%	粗W+R少+B′多	〃	
6	〃	(14.2)×(3.6)×　—	20%	粗W少+B′多	にぶい褐	
7	椀	11.6 ×(6.8)×　—	60%	W+W′+B′多	〃	

第15号住居跡(第154図)

て—13—18グリッドに位置する。北隅を第11号住居跡に切られるほか、北東壁部を完全に削平されている。現状では南東壁が内傾し、台形状となっている。規模は約3.4m×？である。

覆土は第8号住居跡のものに近似し、しまりの強い地山からなる。このため本跡で確認された床面は、掘り方の底面であると考えられる。覆土と底面は同質化しており、その境界は不明瞭である。確認面からの深さは約7㎝を測る。

カマドは北東壁にあったものかとも思われるが、掘り方のみの残存では判然としない。



第154図　第15号住居跡

第16号住居跡(第155図)

て—13—4グリッドを中心に位置する。全体は長方形を呈し、軸長2.5m×3.06m、面積約7.6m²の規模を有する。カマドは明らかにできなかった。もし北東壁に設けられていたとすれば、主軸の方向はおよそN—30°—Eとなる。

覆土はほとんど粘質土で構成され、硬くしまっている。床面以上は完全に削平され、掘り方のみが検出されたものと考えられる。

カマドは削平のため確認できなかった。ただし、北東壁の南寄り突出部には焼土が多く散っているため、ここにカマドの存在を想定することも可能かと思われる。

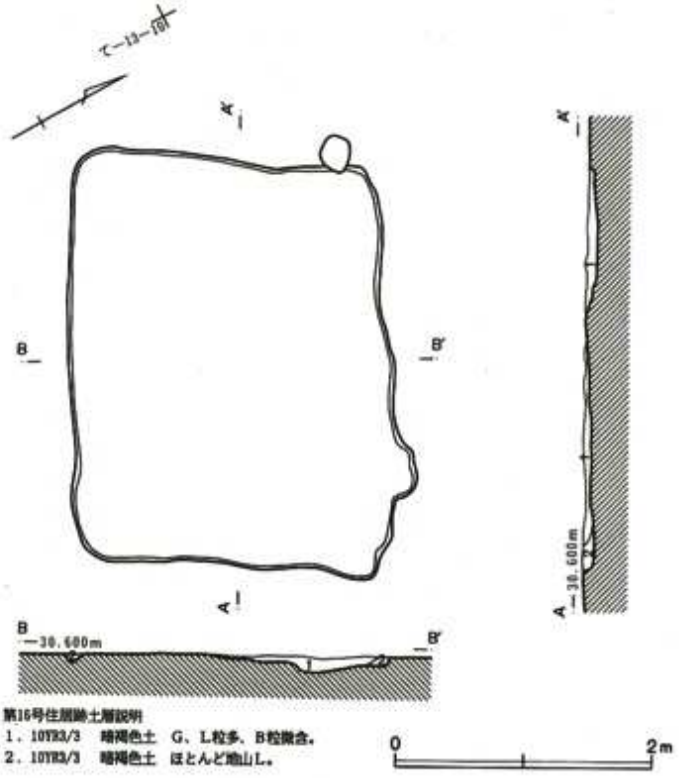
第17号住居跡(第156図)

て—13—4グリッドを中心に位置する。本跡も著しい削平を受け溝に、住居跡の姿がとどめられているにすぎない。平面は隅部に丸みを持った長方形で、規模はおよそ3.15m×4.06m、面積約12.8m²を測る。主軸方向はカマドが北東壁に想定されることから、N—56°—E程度となる。

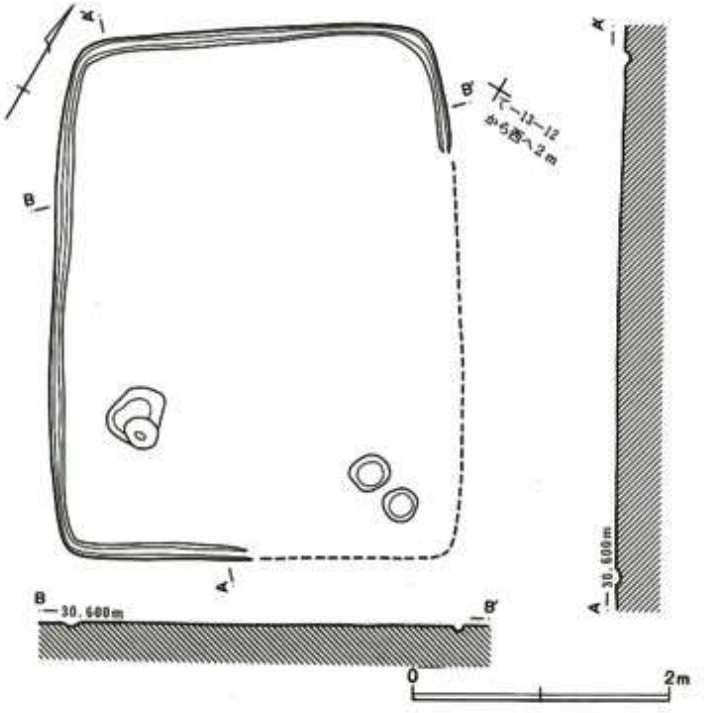
覆土は壁溝の中以外、まったく存在しない。壁溝にはしまりのない粘質土が詰まっている。

カマドは完全に削平されている。北東壁に設けられていたのであろうか。

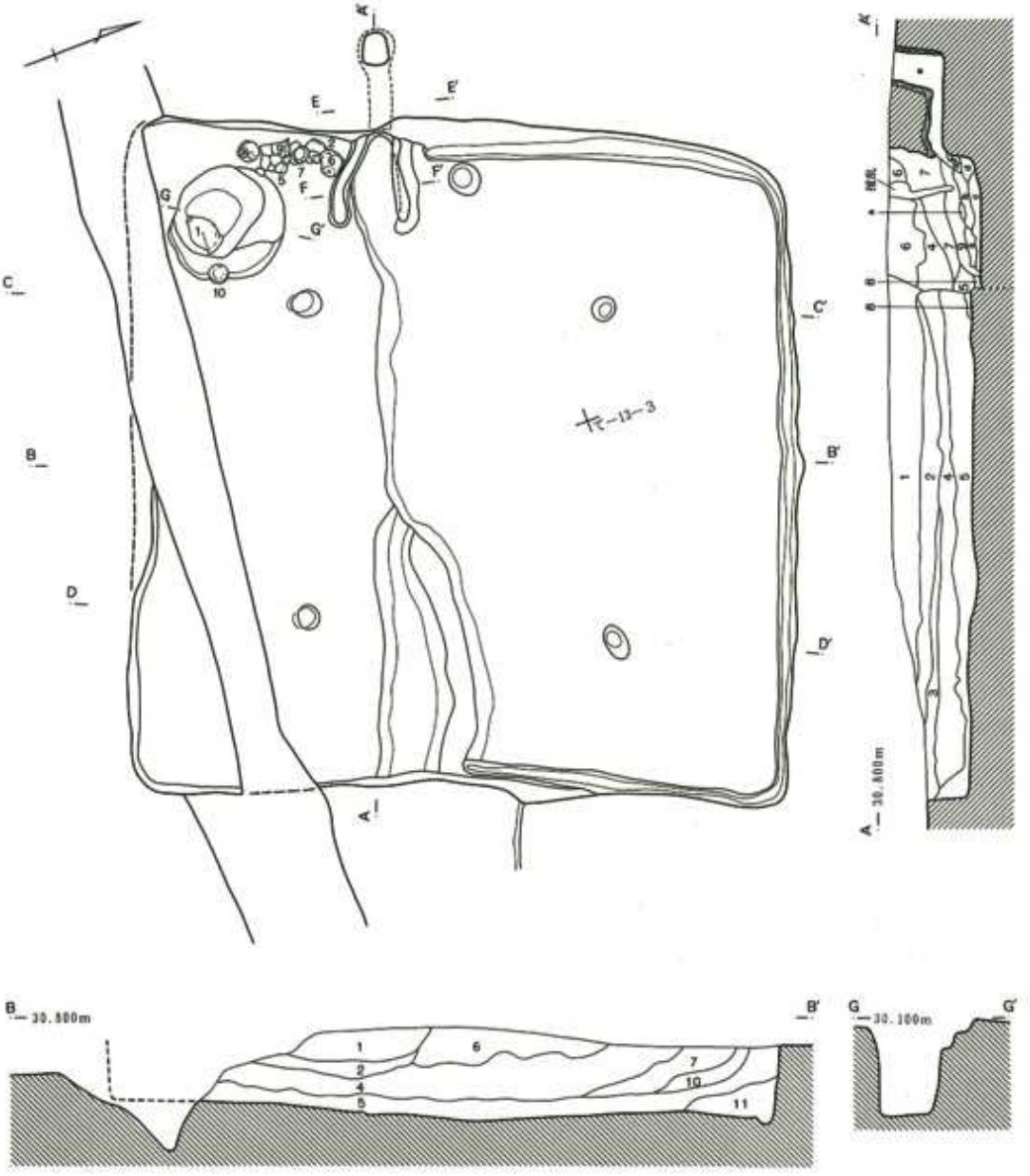
遺物は図示できなかったが、坏の小片が1点出土している。



第155図 第16号住居跡



第156図 第17号住居跡



第18号住居跡土層説明

1．10YR4/3　にぶい黄褐色土　明砂（10YR6/1）の２次堆積層。
2．10YR4/1　褐灰色土　Ｇブロックからなる。Ｆｅ多く、湧水していたと思われる。
3．10YR3/3　暗褐色土　基本は４。水の影響でＦｅ多く、バリバリ。
4．10YR3/3　暗褐色土　ほとんどＬブロックからなる。Ｂ・Ｃ粒微。
5．10YR3/4　暗褐色土　砂質Ｌブロックからなる。Ｇ多く、Ｂ・Ｃ粒微。
6．10YR3/3　暗褐色土　Ｌ粒多い。Ｂ粒含む。
7．10YR3/4　暗褐色土　基本は６。ＦＡブロック多含。
8．10YR4/3　にぶい黄褐色土　Ｇよりなる。Ｃ粒多。
9．10YR4/4　褐色土　Ｌと砂ブロックからなる。Ｂ粒微。
10．10YR4/4　褐色土　砂質Ｌと褐色土ブロックからなる。Ｂ粒微。
11．10YR3/4　暗褐色土　ほとんどＬからなる。Ｇ多。

0　2m

第18号住居跡カマド土層説明

a．2.5YR4/8　赤褐色土　Ｂブロックからなる。天井部崩落土層。
b．10YR4/4　褐色土　Ｂ粒を多く含む。
c．10YR3/1　黒褐色土　Ｂ・Ｃ粒を多く含む。単純灰層。
d．10YR3/4　暗褐色土　Ｂ粒少ない。
e．10YR3/4　暗褐色土　Ｌ・Ｇよりなる。Ｂ粒少ない。

第157図　第18号住居跡(1)

第18号住居跡(第157・158図)

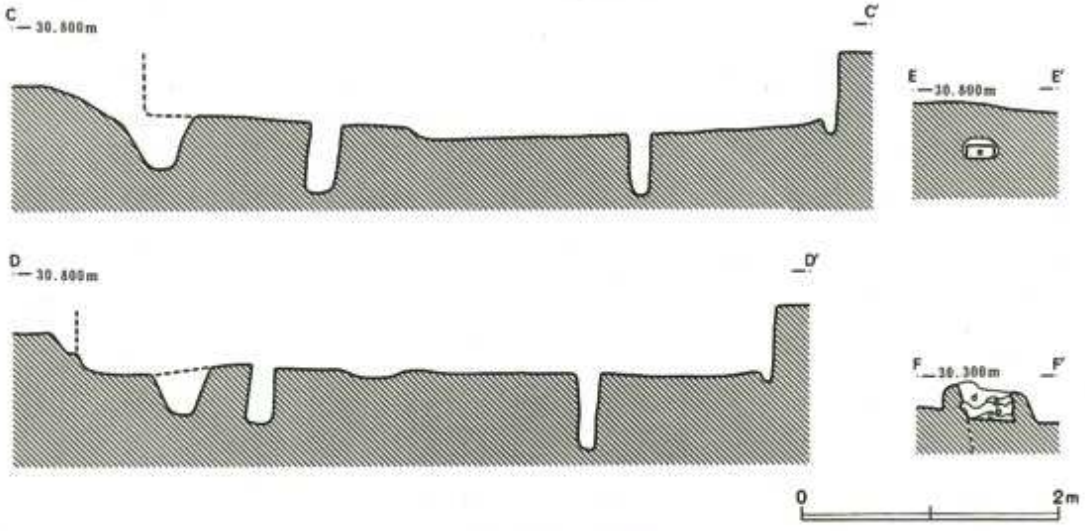
つ—13—22グリッドを中心に位置する。南壁部を第21号溝に切断される。全体は5.35m×5.44mの方形を呈し、面積は約29.1㎡を測る。旧地形はこの溝を境に南西へかなり傾斜していたと思われ、本跡以南の住居跡は削平を深く受けていない。主軸方向はおよそN—69°—Wを指す。

覆土は1層が噴砂の二次堆積で、砂が厚く積もっている。3層上面は水溜まりの底面であったと思われ、鉄分でバリバリとなっている。また、7層中にはFA(榛名山二ツ岳噴出の火山灰)のブロックが多量に含まれている。　床面は中央部がやや低くなっているほか、地震のため段差を生じている。遺構確認面からの深さは約70cmである。

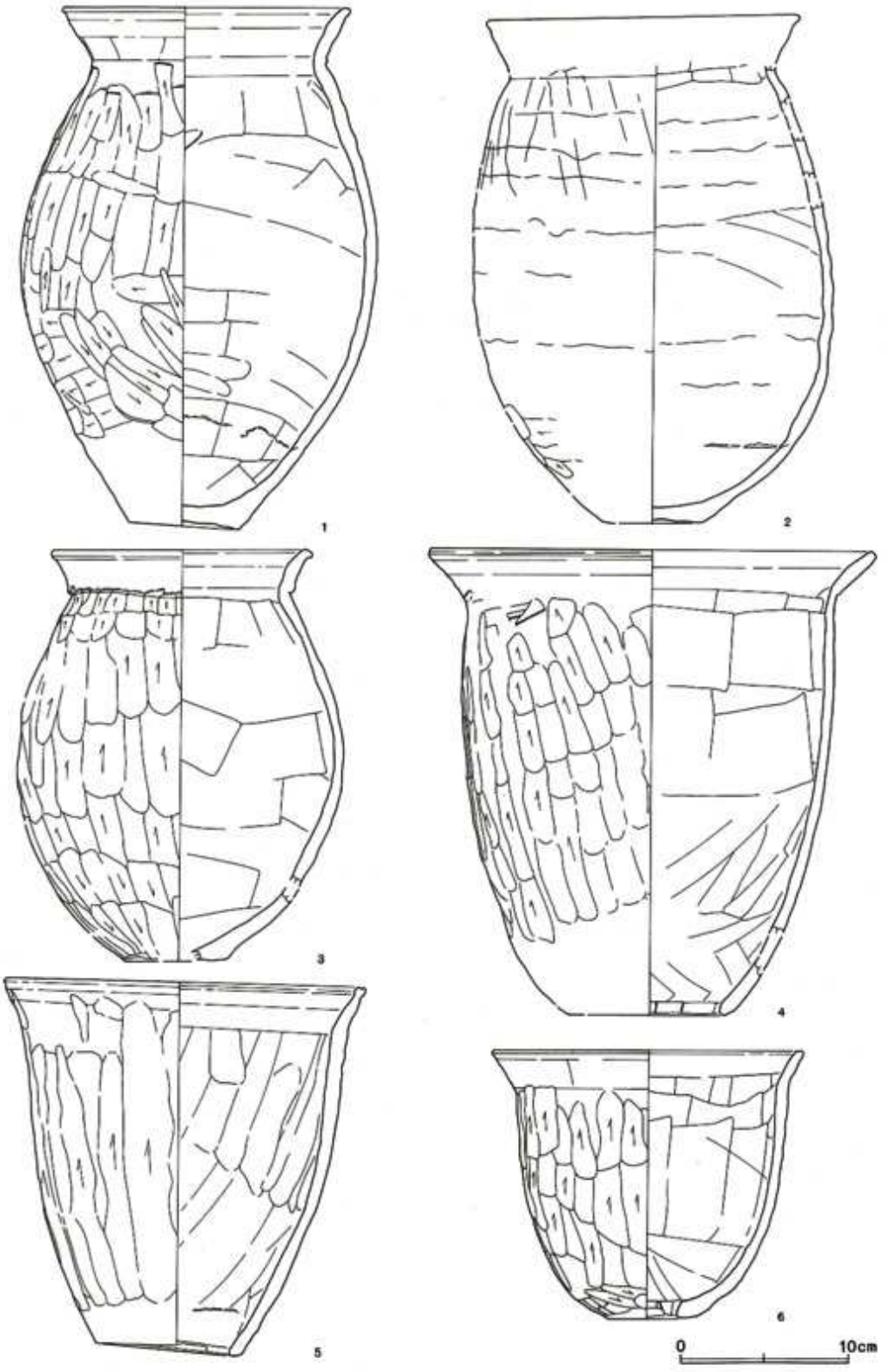
カマドは西壁の南寄りに付設されている。袖は床面から高さ15cm～25cm、壁から長さ75cmほどが削り出されている。硬く赤焼した燃焼面は内傾し、横断面は台形状を呈している。火床面はほぼ床面と同じで、概ね平坦である。焚き口部の幅は約45cmを測る。煙道は崩落がまったく認められず、旧状のまま検出された唯一の例である。燃焼部からは壁を55cmほど水平に掘り込み、急角度で立ち上がっている。横断面は23cm×10cmの長方形であり、煙出部はこれが25cm×27cmと広くなっている。天井部が粘土などで架設された様子はなく、すべて掘り抜かれている。上面はよく焼け、底面には薄く灰が堆積している。

柱穴は対角線上に4本が検出されている。いずれも直径20cmほどで、深さは最も深い北東のもので約90cmである。覆土中に明らかな柱痕は見いだせなかった。

貯蔵穴は南西隅部、カマドの左脇に備わる。上面は100cm×88cmの楕円形で、肩部が崩落している。内面は74cm×62cmの長方形状となり、断面は箱形を呈する。底面は平坦で、床からの深さは約76cmを測る。最上部より甕(1)と坏(10・11)が出土している。さらに、カマドとの間には甑(5・6)、甕(2)、小型甕(7・8・9)が壁に沿って一列に伏せられていた。



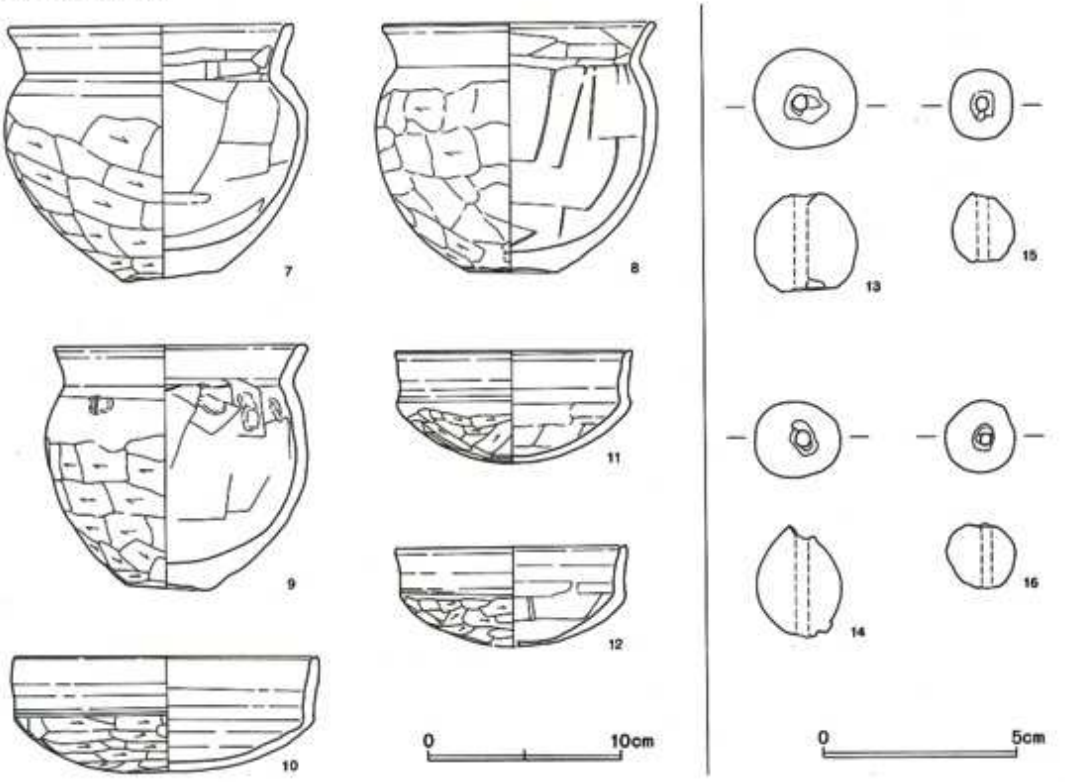
第158図　第18号住居跡(2)



第159図　第18号住居跡出土遺物(1)

壁溝は北半部に巡っている。幅約20cm、深さ約7cmで一定している。

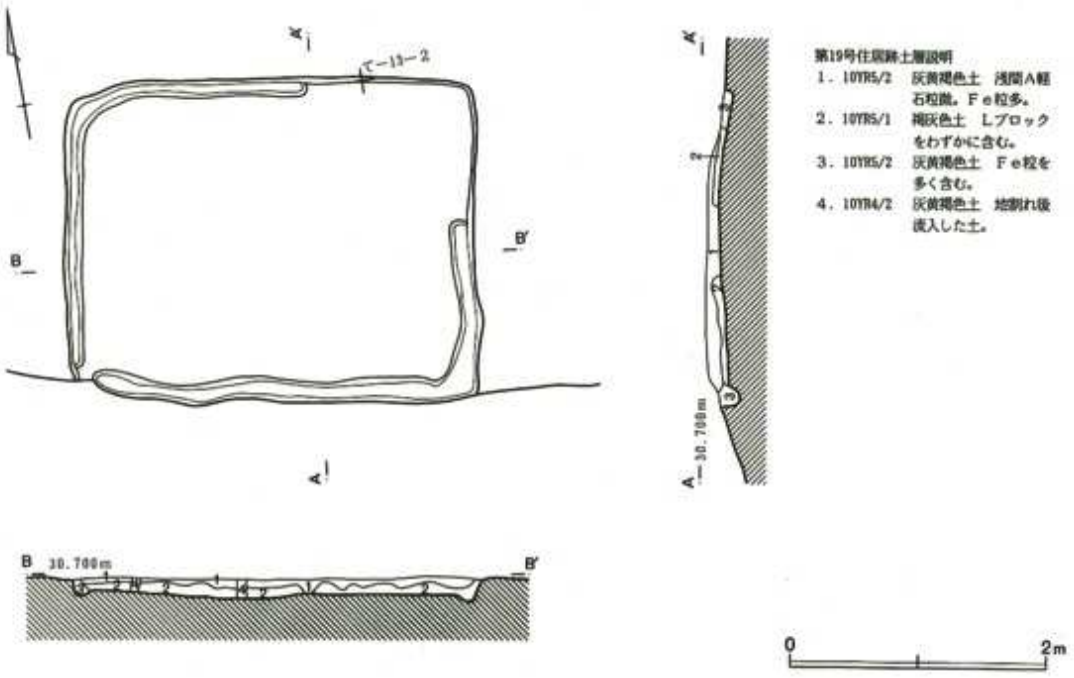
遺物は貯蔵穴の周囲にまとまっているほかは、甑(4)や土玉(13～16)などが床面上に散在しているのみであった。



第160図　第18号住居跡出土遺物(2)

第18号住居跡出土遺物(第159・160図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	甕	17.2 × 30.7 × 6.4	完形	W′+R+B+B′	にぶい黄橙	
2	〃	— ×(27.1)× 5.9	70%	W+W′+B′	明赤褐	
3	〃	17.0 ×(25.0)× 5.8	60%	粗(W′+B)	橙	
4	甑	21.5 × 22.3 ×孔6.9	70%	W+W′+R+B′	〃	
5	〃	21.6 × 22.0 ×孔7.6	80%	W′+B′	にぶい黄橙	
6	〃	18.6 × 15.9 ×孔3.0	完形	W+W′+B′	橙	
7	小型甕	14.7 × 13.3 × 5.3	ほぼ完形	W′+B′多	にぶい橙	
8	〃	14.2 × 13.1 × 4.7	完形	W+W′+B′少	橙	
9	〃	13.0 × 12.6 × 4.5	〃	W′+B′	〃	
10	坏	15.9 × 6.1 × —	〃	W′+R+B′	〃	器表ウルシ状残る
11	〃	12.3 × 5.8 × —	80%	W′+R+B′	〃	
12	〃	12.0 × 5.2 × —	90%	W′+B′	〃	



第161図　第19号住居跡

第19号住居跡(第161図)

つ—13—22グリッドを中心に位置する。軸長3.16m×2.5mの長方形を呈し、面積は約7.9m²を測る。長軸の方向はおよそN—80°—Wを指す。

覆土は地山の粘質土を主体とし、よくしまっている。堆積はやや不自然なものがあり、層位も乱れている。遺構確認面からの深さは約15cmである。

床面は中央部が盛りあがり、南北へ傾斜している。その上、かなりの凹凸も見られる。覆土との境界は明瞭で、硬化面の検出は容易であった。

カマドは覆土が残存するにもかかわらず、ついに検出することはできなかった。床面もしっかりしていることから推して、本跡には当初よりカマドは備わらなかったものと考えられる。

壁溝は北東隅部を除き、幅約15cm、深さ約6cmでほぼ全周している。

遺物の出土もまったく見られなかった。

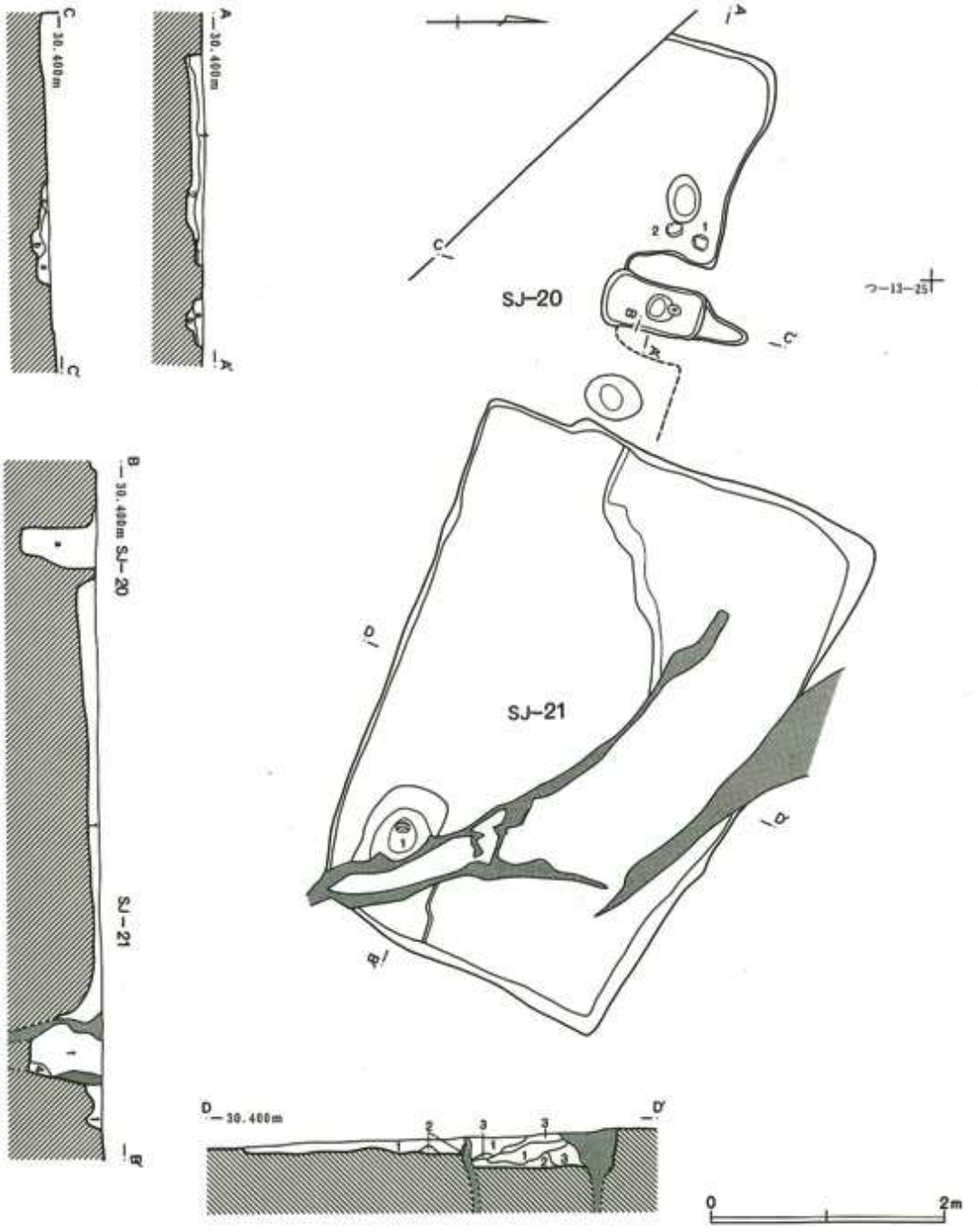
上記のように、本跡を通常の住居跡と捉えることにはやや難がある。

第20号住居跡(第162図)

つ—13—20グリッドに位置する。南半が調査区外となるほか、西側は床面を完全に削平されている。このため、第21号住居跡との重複関係は不明である。平面はおそらく方形になるものと思われる。主軸方向はおよそN—14°—Eを指す。

覆土は地山を主体とし、壌圧のため硬くしまっている。床の最も深い部分までは約10cmである。残存する床面は概ね平坦であり、わずかに中央部が高まる。

カマドは北壁に営まれる。貯蔵穴の位置から見れば、壁中央よりは東に寄っている。袖は地山が



第20号住居跡土層説明
1．10YR5/2　灰黄褐色土　Fe粒少。FA微。
2．10YR5/1　褐灰色土　Lブロック少。

第20号住居跡カマド土層説明
a．10YR5/1　褐灰色土　LブロックとB粒を少し含む灰層。
b．10YR5/3　にぶい黄褐色土　B粒を多く含む灰層。
c．10YR5/2　灰黄褐色土　Fe粒を微量含む。

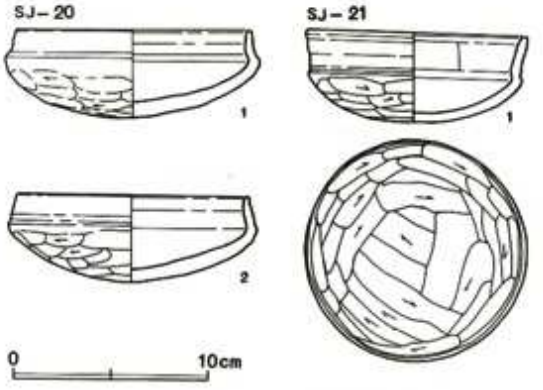
第20号住居跡貯蔵穴土層説明
a．10YR3/1　黒褐色土　Fe・B粒を微量含む。

第21号住居跡土層説明
1．10YR5/1　褐灰色土　Fe・Mn粒を多く含む。
2．10YR5/2　灰黄褐色土　Fe・Mn粒を多く含む。
3．10YR5/2　灰黄褐色土　2に準ずるがFe粒多い。
4．10YR5/2　灰黄褐色土　G・L粒を多く含む。

第162図　第20・21号住居跡

舌状に削り出されたもので、右袖は削平で失われている。燃焼部は約90cm×42cmの長方形を呈し、壁外には煙道が突出する。火床面は床より9cmほど低く、壁へ向かって緩傾斜している。その中央部は径20cm、深さ3cmほどの浅い掘り込みがあり、灰が堆積している。

貯蔵穴は北東隅部、カマド右脇に存在する。約51cm×39cmの楕円形を呈し、深さは66cmに達する。断面形は筒状となり、壁は平坦な底面へ移行する。またカマド左脇には、深さ5cmの窪みがある。



第163図　第20・21号住居跡出土遺物

遺物はカマド左脇の床面直上より、ほとんど完形の坏2個体(1・2)が出土している。

第21号住居跡(第162図)

つ—13—19グリッドに位置する。全体はほぼ長方形であるが、噴砂による分断が激しい。現状では長軸4.66m、短軸2.23m、面積約10.4m²をそれぞれ測る。長軸の方向はおよそN—70°—Wである。

覆土は主に地山の粘質土からなり、床と同質化している。床面は地震のため軟化しているほか、噴砂の亀裂でズタズタになっている。最も深い部分は確認面から30cmほどである。

カマドはいずれの壁からも検出できなかった。覆土中にも特に焼土などが集中した部分は見られなかった。当初からカマドは設置されていなかったのであろうか。あるいは、噴砂で破壊されてしまったのであろうか。

南東隅部から検出された貯蔵穴は、やはり噴砂で切られている。上面は長径90cmほどの楕円形で、深さは66cmばかりとなろう。覆土中位より坏(1)が出土している。

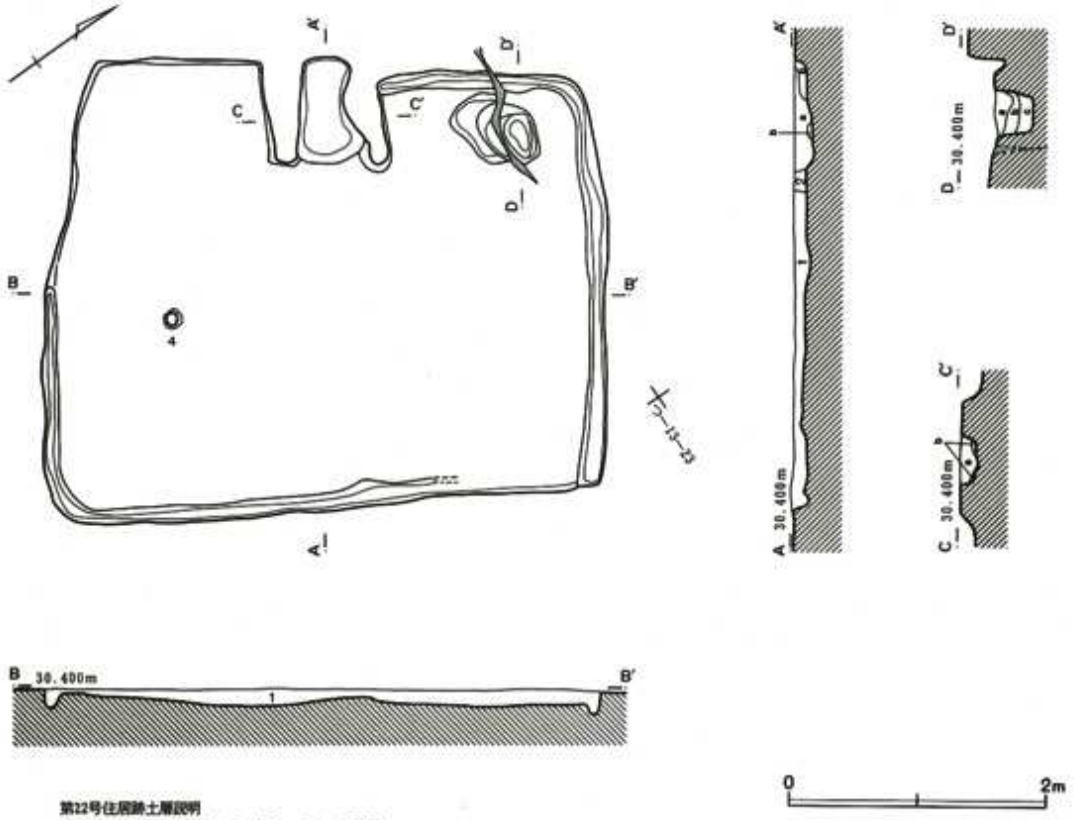
第20・21号住居跡出土遺物(第163図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
第20号						
1	坏	12.0 × 4.5 × —	ほぼ完形	W′+B′多	橙	
2	〃	11.8 × 4.5 × —	90%	W′+B多	にぶい黄橙	
第21号						
1	坏	11.4 × 4.6 × —	完形	W+W′+R多+B′	橙	焚割れ？

第22号住居跡(第164図)

つ—13—18グリッドを中心に位置する。全体は南西壁が内傾ぎみとなる長方形で、軸長3.4m×4.3m、面積約14.6m²を測る。主軸方向はN—55°—Wを示す。

覆土と床の同質化は著しく進行し、調査員の不注意もあって、床の大部分は掘り抜いてしまった。土層観察で確認できた床面は、地震のための軟化と凹凸が激しい。遺構確認面からは深さ約10cmである。



第22号住居跡土層説明
1．10YR5/1　褐灰色土　Fe粒多。FA．B粒微。
2．10YR5/2　灰黄褐色土　L・Fe粒少。
第22号住居跡カマド土層説明
a．10YR5/2　灰黄褐色土　L粒多。Bブロック少。灰層。
b．10YR5/2　灰黄褐色土　B・L粒を少量含む。

第22号住居跡貯蔵穴土層説明（D－D'）
a．10YR5/2　灰黄褐色土　Fe粒多く、Lブロック微。
b．10YR5/2　灰黄褐色土　Fe・Lブロック微。
c．10YR5/3　にぶい黄褐色土　Fe粒多く、Lブロック微。

第164図　第22号住居跡

カマドは北西壁の中央部に存在する。舌状に削り出された袖によって、燃焼部は90cm×36cmほどの長方形となっている。火床面は床より約5cm低く、灰層が乗っている。

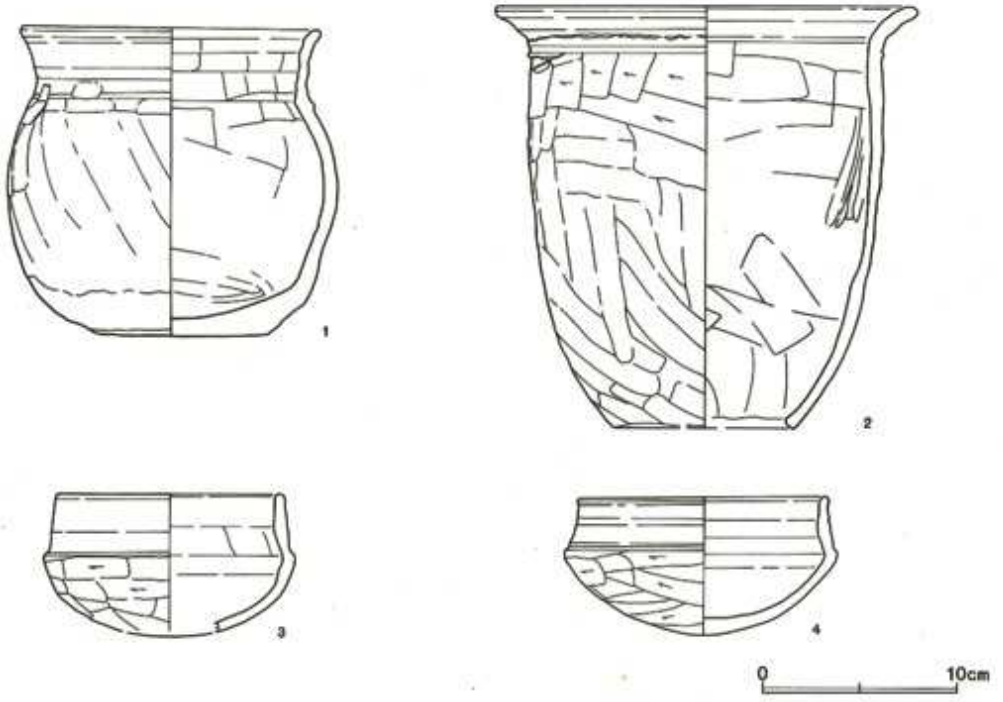
貯蔵穴は北隅に備わり、噴砂の亀裂によって破壊される。平面形は乱れているが、本来は楕円形を呈していたものと思われる。床面からの深さは約26cm、底面は平坦である。

壁溝は西の隅部で切れる。幅は約13cm、深さは2cm～3cmと浅い。

遺物は床面上より坏(4)・甑(2)・小型甕(1)が出土している。

第22号住居跡出土遺物(第165図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	小型甕	15.4 × 15.9 × 8.7	75%	礫(W+W')	にぶい黄橙	
2	甑	(21.8)× 21.5 ×(9.0)	45%	W+W'+B'	橙	
3	坏	(11.8)×(7.0)× —	40%	W'+B'	にぶい橙	
4	〃	12.3 × 7.1 × —	ほぼ完形	W'+B'	橙	

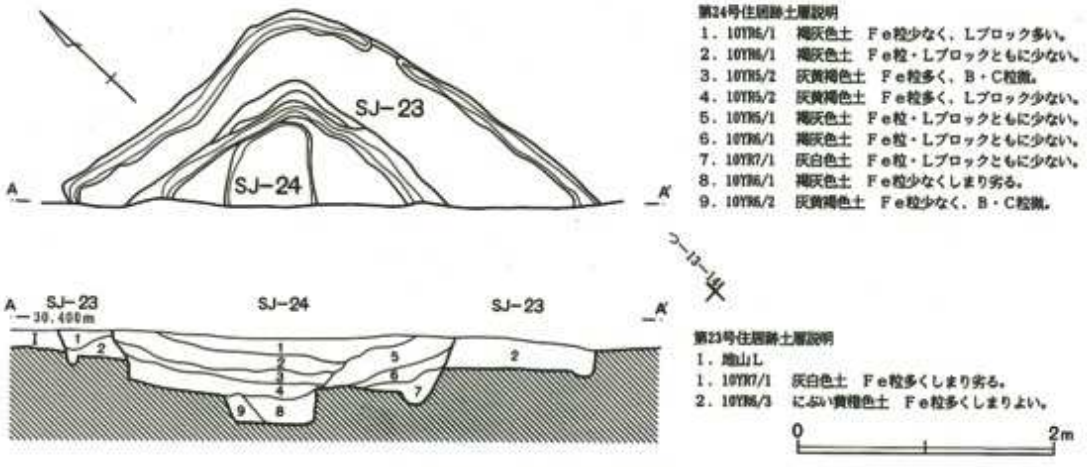


第165図　第22号住居跡出土遺物

第23・24号住居跡(第166図)

つ―13―18グリッドを中心に位置する。ともに大部分は調査区外となっているため、全体の形状や規模は明らかにしえない。断面観察により、第24号住居跡が第23号住居跡の埋没後に設営されたことは明らかである。両者の重複はきれいな入れ籠状となっている。

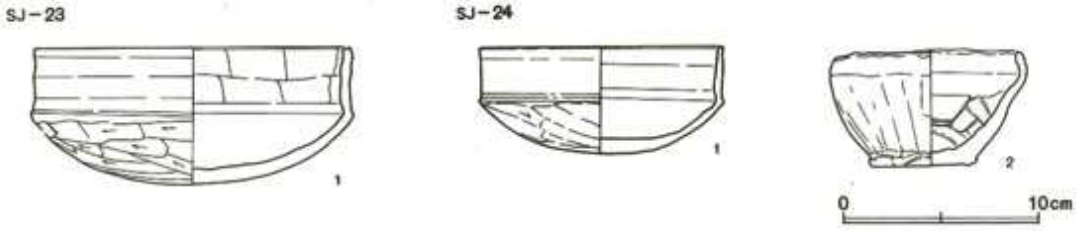
第23号住居跡の覆土は、よくしまった地山を主体としいる。ただし、人為的に埋め戻されたような状況は認められないため、両者の重複が意図的なものとは思われない。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは約20cmである。検出部での壁溝は全周し、幅約15cm、深さ約3cmを測る。



第166図　第23・24号住居跡

第24号住居跡の覆土は自然堆積で、第23号住居跡覆土との境界は明瞭である。床面は軟質で、遺構確認面からは約45cmの深さを有する。中央部には土坑状の掘り込みが見られるものの、これが貯蔵穴であるのか否かは不明である。本跡の壁溝も検出部では全周している。幅は約20cm、床面からの深さは10cm～15cmが測れる。

遺物の出土はいずれも覆土中で、第23号住居跡には坏(1)、第24号住居跡には椀(2)と坏(1)が見られた。



第167図　第23・24号住居跡出土遺物

第23・24号住居跡出土遺物(第167図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
第23号						
1	坏	16.4 × 7.0 × —	70%	W+W′+R+B′	橙	
第24号						
1	坏	12.6 × 5.5 × —	ほぼ完形	W+R+B′	橙	磨耗著しい
2	椀？	9.2 × 5.8 × 5.4	60%	粗W′多	灰褐	底部に木葉痕

第25号住居跡(第168・169図)

つ—13—13グリッドを中心に位置する。第26号住居跡の埋没後に設営された住居で、北西隅部を第23号溝に切断される。平面は3.16m×4.13mの長方形を呈し、面積は約13.1m²を測る。主軸方向はほぼN—65°—Wを指す。

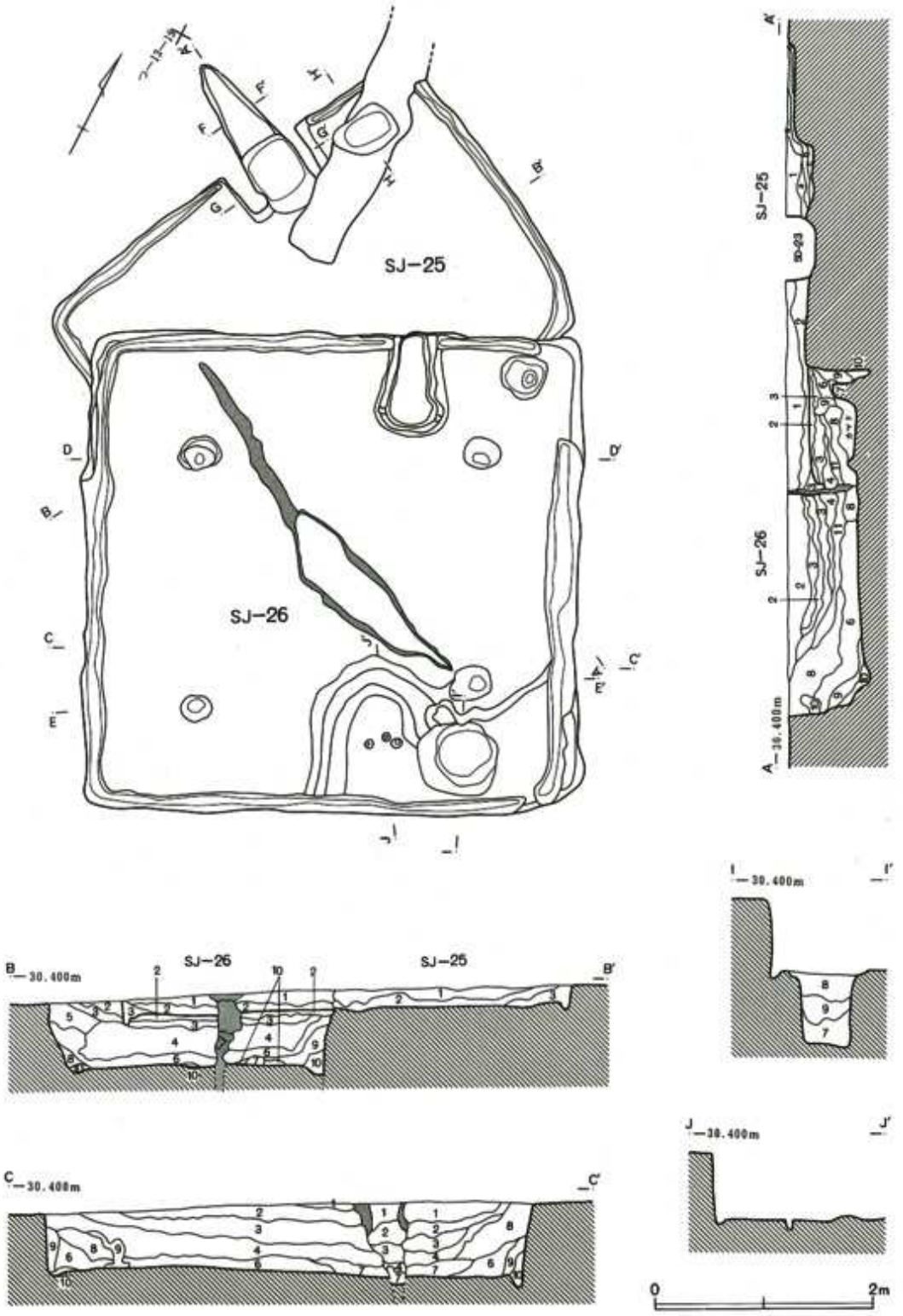
覆土は自然堆積を示し、床までの深さは約20cmである。床面は概して平坦であり、カマド前面を中心に硬化が顕著である。第26号住居跡の覆土となる部分では、貼り床など特別な処置は施されていない。

カマドは西壁やや北寄りに設けられている。壁と削出された袖により、燃焼部は72cm×45cmほどの長方形となっている。断面は箱形で、よく赤焼している。火床面は床より5cm深く、ほぼ平坦である。煙道は逆V字状に約88cm延びている。平坦な底面は極めて緩やかに立ち上る。

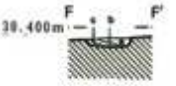
貯蔵穴は北西隅部、カマド右側に備わる。上面は第23号溝に削られており、現状で58cm×38cmの不整長方形となる。床面からの深さは約26cmである。

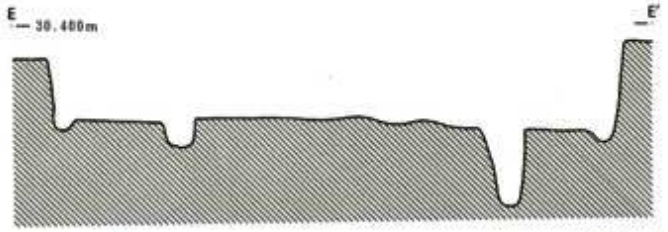
壁溝は全周しており、幅約13cm、深さ約5cmを測る。

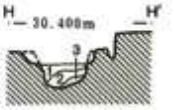
遺物はすべて覆土中からの出土で、破片となって散乱していた。



第168図　第25・26号住居跡(1)







第26号住居跡土層説明

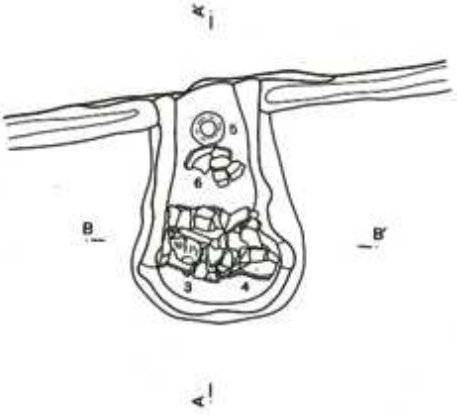
1．10YR3/4　暗褐色土　Gブロック・B・C粒多。
2．10YR3/2　黒褐色土　Lブロックからなる。
3．10YR3/4　暗褐色土　L粒・ブロック多。B・C粒微。
4．10YR4/3　にぶい黄褐色土　2に近似。B・C粒微。
5．10YR4/3　にぶい黄褐色土　4に準ずる。B・C粒多。
6．10YR4/3　にぶい黄褐色土　L・Gブロックよりなる。下層との境にC薄層。
7．10YR4/2　灰黄褐色土　Gよりなる。
8．10YR3/4　暗褐色土　Lブロック少。B・C粒多。
9．10YR4/3　にぶい黄褐色土　8に近似。部材の腐食土か。
10．10YR4/4　褐色土　ほとんどし。壁・床の溶軟化層。
11．10YR4/2　灰黄褐色土　3に近似。B・C粒多。

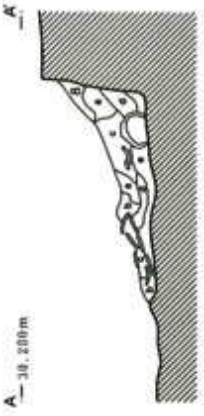
第25号住居跡土層説明

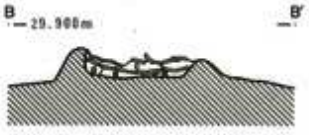
1．10YR3/4　暗褐色土　L粒・ブロック多く含む。B・C粒微。
2．10YR2/3　黒褐色土　L・G・黒色土粒よりなる。B・C粒微。
3．10YR3/3　暗褐色土　基本は2。G粒まざる。

第25号住居跡カマド土層説明

a．10YR2/3　黒褐色土　Bブロック多くボソボソ。天井・壁部崩落土層。
b．10YR3/1　黒褐色土　単純灰層。パサパサ。
c．10YR4/4　褐色土　ほとんどL。床の溶軟化層。



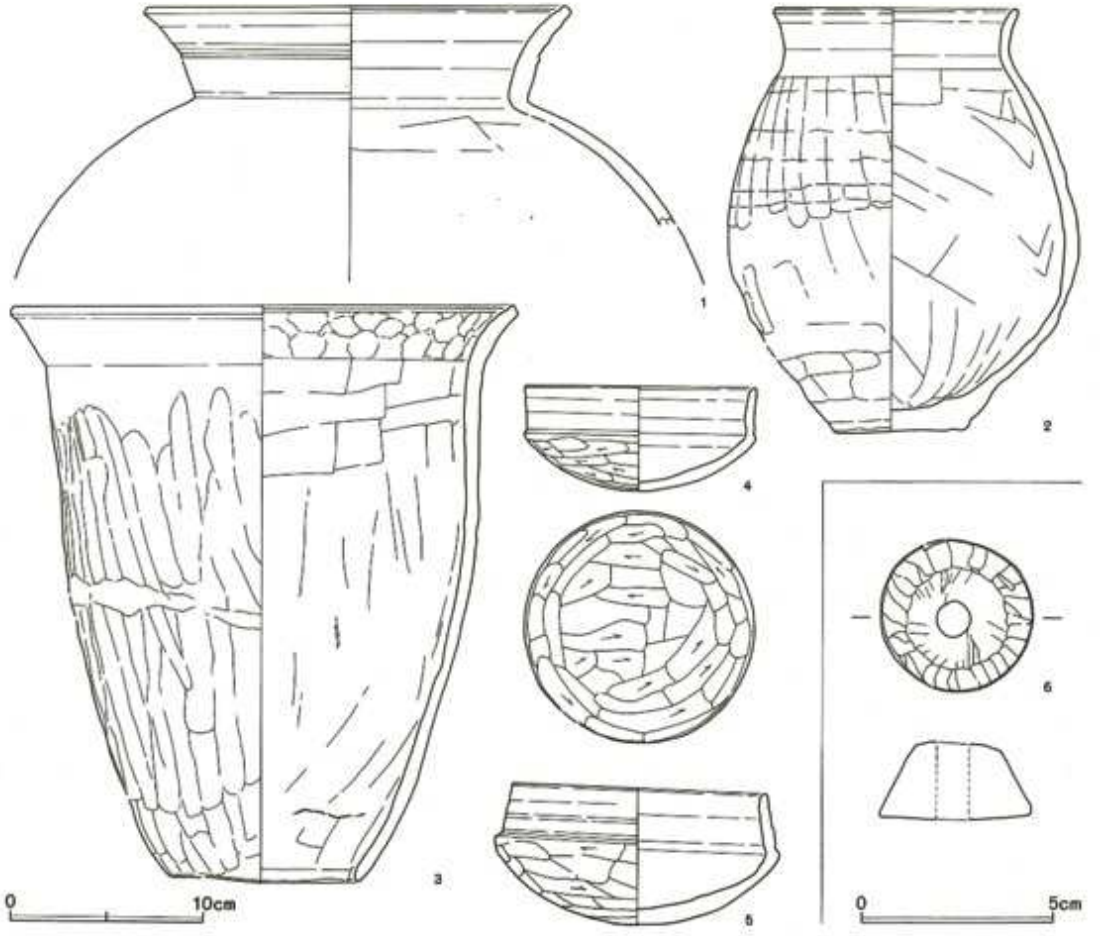




第26号住居跡カマド土層説明

a．10YR4/6　にぶい黄橙色土　L・Gからなる。天井部崩落土層。
b．10R3/4　暗赤色土　aの完全焼土化したもの。
c．10YR3/4　暗褐色土　Lブロック少。B・C粒多。
d．2.5YR4/8　赤褐色土　Bブロックからなる。天井・壁部崩落土層。
e．10YR3/1　黒褐色土　骨片を多く含む灰層。

第169図　第25・26号住居跡(2)　第26号住居跡カマド



第170図　第25号住居跡出土遺物

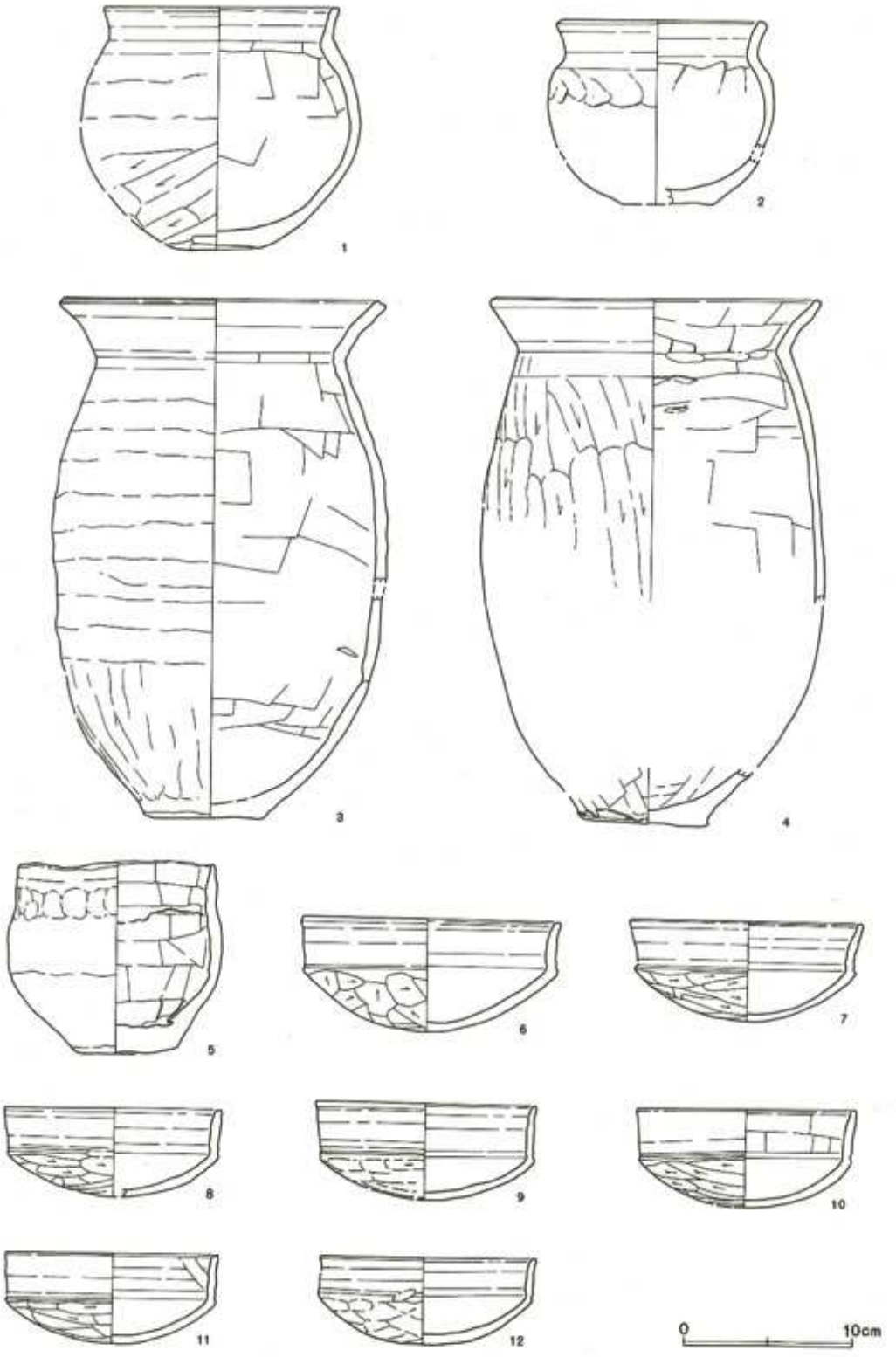
第25号住居跡出土遺物(第170図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	21.6 ×(15.2)×　—	口縁～肩部	W+W′+R+B′	明赤褐	
2	甕	12.5 × 22.0 ×　6.8	95%	W′+B′多	にぶい橙	
3	甑	25.0～26.4 × 29.7 ×孔9.2	95%	W+W′+B′+粗礫	赤褐	
4	坏	11.8 ×　5.4 ×　—	完形	W+W′+R+B′	橙	
5	〃	13.2 ×(7.0)×　—	70%	W′+B′	にぶい橙	

第26号住居跡(第168・169図)

つ—13—13グリッドを中心に位置する。覆土上位に第25号住居跡が乗っており、北西壁が一部削られている。また、噴砂の亀裂により、覆土と床面に段差が生じている。全体はきれいな方形を呈し、軸長4.48m×4.55m、面積20.4㎡をそれぞれ測る。主軸の方向はおよそN—27°—Wを指す。

覆土は地山のブロックを主体とし、焼土粒や炭化物粒をよく含んでいる。3層は第25号住居跡の床面にあたっており、かなり強くしまっている。遺構確認面から床までは約65cmである。床面は概ね平坦で、硬く踏みしまっている。中央部には斜めに地割れが走り、その内部は陥没している。



第171図　第26号住居跡出土遺物

壁の立ち上がりは急であるが、地震によって覆土とともに崩落した部分も見られる。壁溝は北隅でわずかに途切れる以外は、幅約15cm、深さ2cm～5cmで全周している。

カマドは北西壁の北寄りに取り付いている。壁の中位から削り出された袖は、焚き口へ向けて次第に低くなり、床面との境では突堤状となって巡っている。天井部は不明ながら、焚き口部の上辺に構架されていたと思しき2個の甕(3・4)が、横に並べられた状態で出土している。燃焼部は口の狭まったU字形で、内面はバリバリに焼けている。火床面は床面よりも2cm～3cm高く、ほぼ平坦となっている。直上には骨片を多く含む灰層の形成が顕著である。壁際には小型甕(5)を逆位に据え、支脚としている。ここが器設部であるとすると、煙道は壁外に延びないのであろうか。

柱穴は対角線上に4本検出されている。直径は25cm～30cmで、深さは最も浅いもの(南)で約20cm、深いもの(東)で約60cmを測る。いずれも明瞭な柱痕は観察されていない。

貯蔵穴は住居跡の東隅部、やや南寄りに設けられている。周囲は床面より5cmほど低く、軟質である。平面は径73cm×65cmの円形で、断面は深さ約84cmの筒状となっている。底面は平坦となり、これより壁が垂直に立ち上がる。

貯蔵穴の南側、カマド対位置の壁には幅約38cm、高さ約8cmの突堤がU字状に巡っている。内部の床面は軟質で、直径10cmほどの小穴が3本存在する。おそらくは、出入口にかかわる施設であろう。

また、カマド右脇の東隅には直径約42cm、深さ約17cmの掘り込みが検出されている。砂田遺跡第5・7号住居跡に見られたような、カマドに伴う施設とも考えられよう。

なお、本跡は住居跡の形状や方向、出土遺物が第28号住居跡によく似ている。

第26号住居跡出土遺物(第171図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	小型壺	14.0 × 14.3 × 5.0	40%	(W+W')多+B'	橙	
2	〃	12.4 × 10.9 ×(5.0)	40%	W+W'多	〃	
3	甕	19.2 × 30.6 × 7.0	95%	W+W'+B	〃	
4	〃	19.6 × 18.2/3.5 ×(7.6)	口縁～胴部・底部	W+W'多	〃	
5	小型甕	11.6 × 11.4 × 6.0	完形	W+W'多	明赤褐	
6	坏	15.4 × 6.6 × —	70%	W'+R+B'	〃	
7	〃	13.2 × 5.9 × —	70%	W'+B'	橙	
8	〃	12.8 × 5.2 × —	50%	W'多+R	〃	
9	〃	13.0 × 5.8 × —	75%	W+R	〃	磨耗著しい
10	〃	13.0 ×(5.8)× —	70%	W+R少+B'	〃	
11	〃	(12.4)× 5.8 × —	55%	W+W'+B'	〃	
12	〃	12.8 × 5.2 × —	80%	W'+R+B'	〃	磨耗著しい

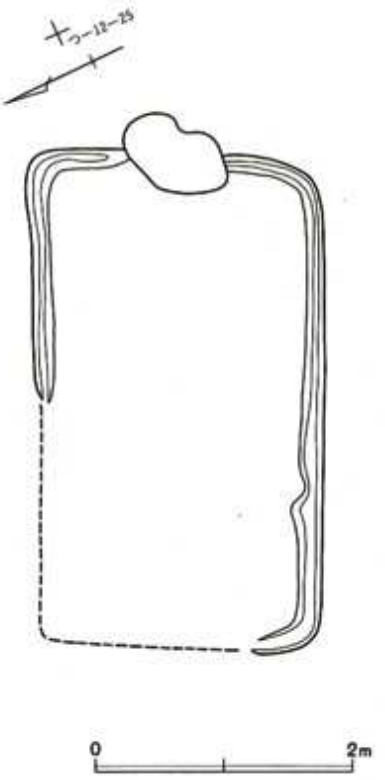
第27号住居跡(第172図)

つ—12—25グリッドを中心に位置する。東壁の一部を第4号堀立柱建物跡に切断されるほか、削平によって北西部を失う。残存する壁溝からは、長軸3.85m、短軸2.25m、面積約8.7m²ほどの長方形の住居跡であることが知れる。長軸の方向はおよそN—65°—Wを指す。

覆土と床面は完全に削平されている。カマドも失われたものか、まったく検出できなかった。形

態的にはやや長すぎるきらいもあり、あるいは住居跡ではないのかもしれない。

壁溝は幅約10cm、深さ約6cmで、遺物出土はない。



第172図　第27号住居跡

第28号住居跡(第173・174図)

つ—12—20グリッドを中心に位置する。西隅から床にかけて、幅25cmほどの噴砂が走る。全体は5.0m×5.1mのきれいな方形を呈し、各隅部は直角をなしている。面積は約25.5m²を測り、主軸方向はほぼN—32°—Wを指す。

覆土のうち、2層中には多量にFA状のブロックが含まれており、直上からは粘板岩質石灰岩の磨製石鏃(26)が出土している。軟質な石材から見て、実用品とは考えられない。また最下層と床の間には、炭化物の薄層が全面に挟まれている。遺構確認面から床までは約56cmである。床面はかなり硬化し、中央部がわずかに高まっている。

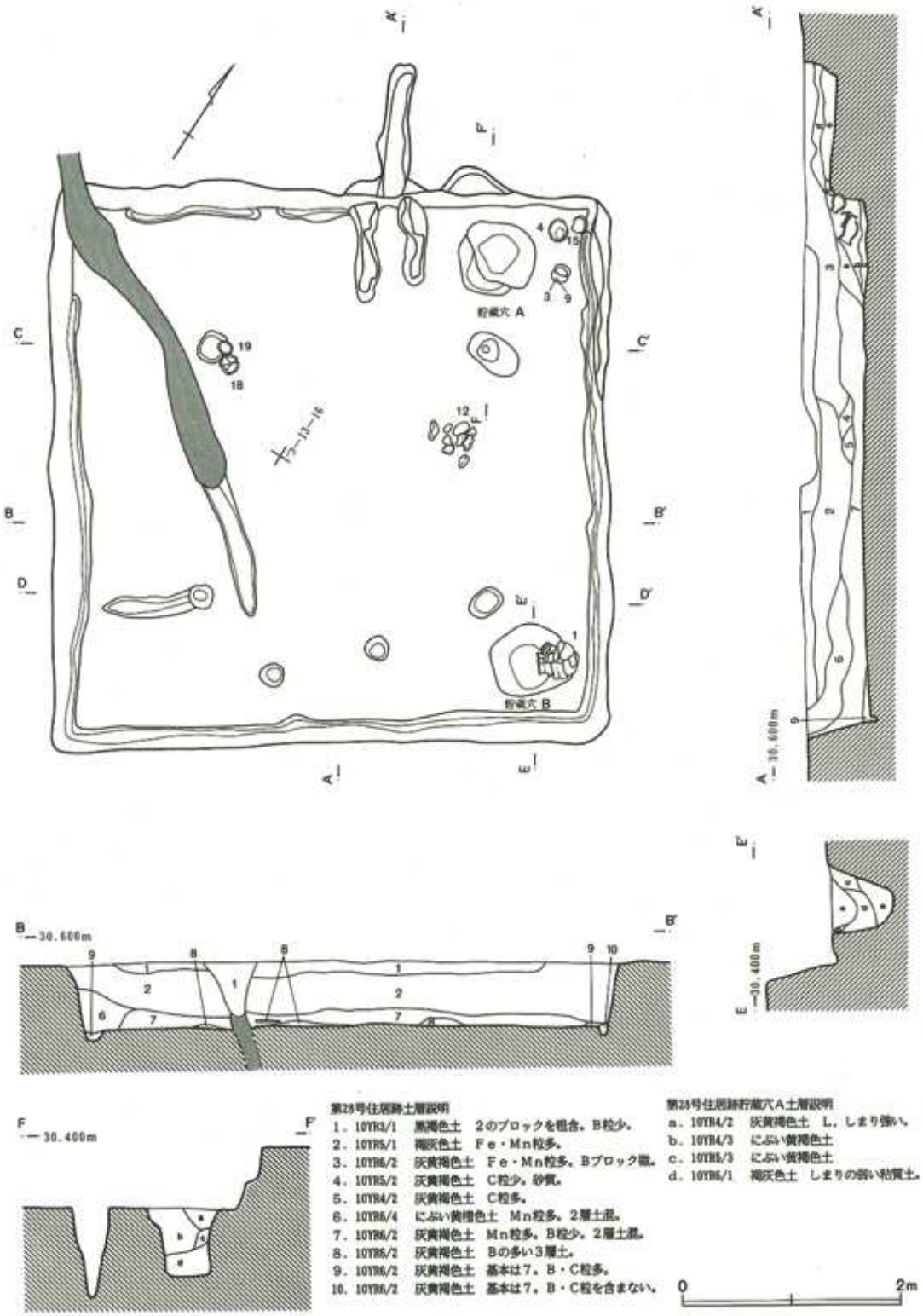
壁の立ち上がりは急で、直下には幅約20cm、深さ5cm～10cmの壁溝が巡っている。

カマドは北西壁の中央部から、わずかに北へ寄っている。両袖は壁から90cmほど垂直に削り出され、床面からは壁部で15cm、焚き口部で9cmの高さを測る。燃焼部は幅約30cmで、火床面は床面より2cmばかり低い。ここには厚く灰層が形成されるが、天井部の崩落を示すような焼土ブロック層は見られない。煙道は幅約22cm、長さ120cmほどの溝状で、底面は下向している。

燃焼部にはおおよそ使用時の状況を保つように、多くの土器が一括して出土している。これを復元してみると、次のような状態となる。まず火床面の右袖寄りには、支脚として小型の甕(10)が伏せ置かれる。この上には甕(8)がのせられ、手前側には甕(6・7)が並べられる。この時3個の甕は密着し、両袖によって支持される。さらに、支脚上の甕と奥壁の間には、小型の甕(11)が架けられる。このほか、袖の左脇には3個体の坏(20・22・24)、右脇には滑石製の臼玉(27～30)が見いだされている。

貯蔵穴は北および東の隅部、2箇所で検出された。北隅のものは、径75cm×60cmほどの不整な円形で、カマド寄りにテラス状の浅い段を持つ。断面形は円筒状となり、床面から平坦な底面までは約90cmである。覆土の最下層より壺の下半部(2)と甑(13・14)が、壁との間より坏(15)と小型壺(3・4)が出土している。東隅の貯蔵穴は径およそ80cm×64cmの楕円形で、断面はU字形を呈する。深さ約60cmを測り、肩部の覆土中からは完形の壺(1)が検出されている。

柱穴は6本確認された。このうち、対角線上に位置する4本の主柱穴は径25cm～30cm、深さ60cmほどで、柱痕や充填土は観察できなかった。残る2本は南東の壁際に並行しており、深さは約20cmと浅い。出入口にかかわるものと考えられる。



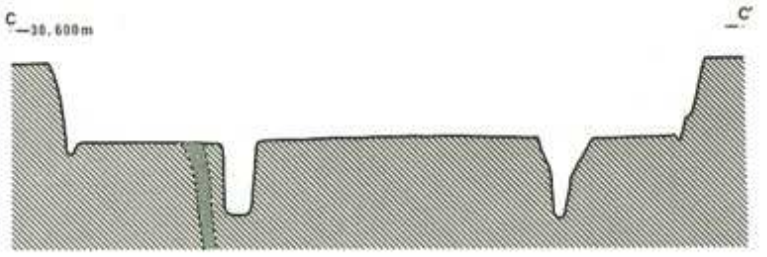
第28号住居跡土層説明

1. 10YR3/1　黒褐色土　2のブロックを粗含。B粒少。
2. 10YR5/1　褐灰色土　Fe・Mn粒多。
3. 10YR6/2　灰黄褐色土　Fe・Mn粒多。Bブロック微。
4. 10YR5/2　灰黄褐色土　C粒少。砂質。
5. 10YR4/2　灰黄褐色土　C粒多。
6. 10YR6/4　にぶい黄橙色土　Mn粒多。2層土混。
7. 10YR6/2　灰黄褐色土　Mn粒多。B粒少。2層土混。
8. 10YR6/2　灰黄褐色土　Bの多い3層土。
9. 10YR6/2　灰黄褐色土　基本は7。B・C粒多。
10. 10YR6/2　灰黄褐色土　基本は7。B・C粒を含まない。

第28号住居跡貯蔵穴A土層説明

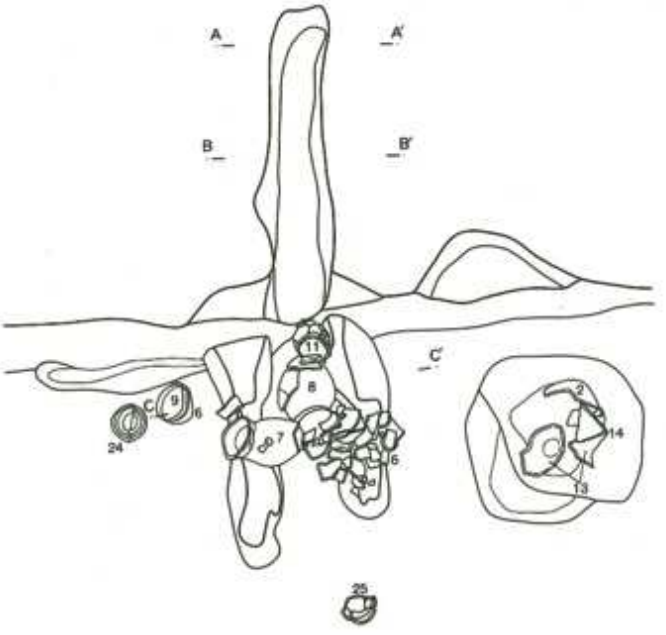
a. 10YR4/2　灰黄褐色土　L。しまり強い。
b. 10YR4/3　にぶい黄褐色土
c. 10YR5/3　にぶい黄褐色土
d. 10YR6/1　褐灰色土　しまりの弱い粘質土。

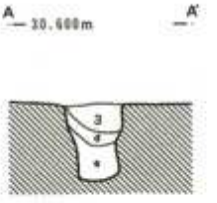
第173図　第28号住居跡(1)

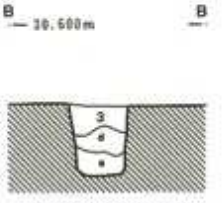


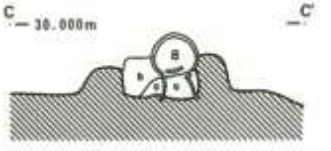
第28号住居跡貯蔵穴B土層説明
a．10YR5/2　灰黄褐色土　B・C粒相含。
b．10YR5/1　褐灰色土　Fe粒多。
c．10YR5/6　黄褐色土　Fe粒多。
d．10YR5/3　にぶい黄褐色土　貯蔵穴Aのcと同。
e．10YR6/1　褐灰色土　貯蔵穴Aのdと同。

0　2m





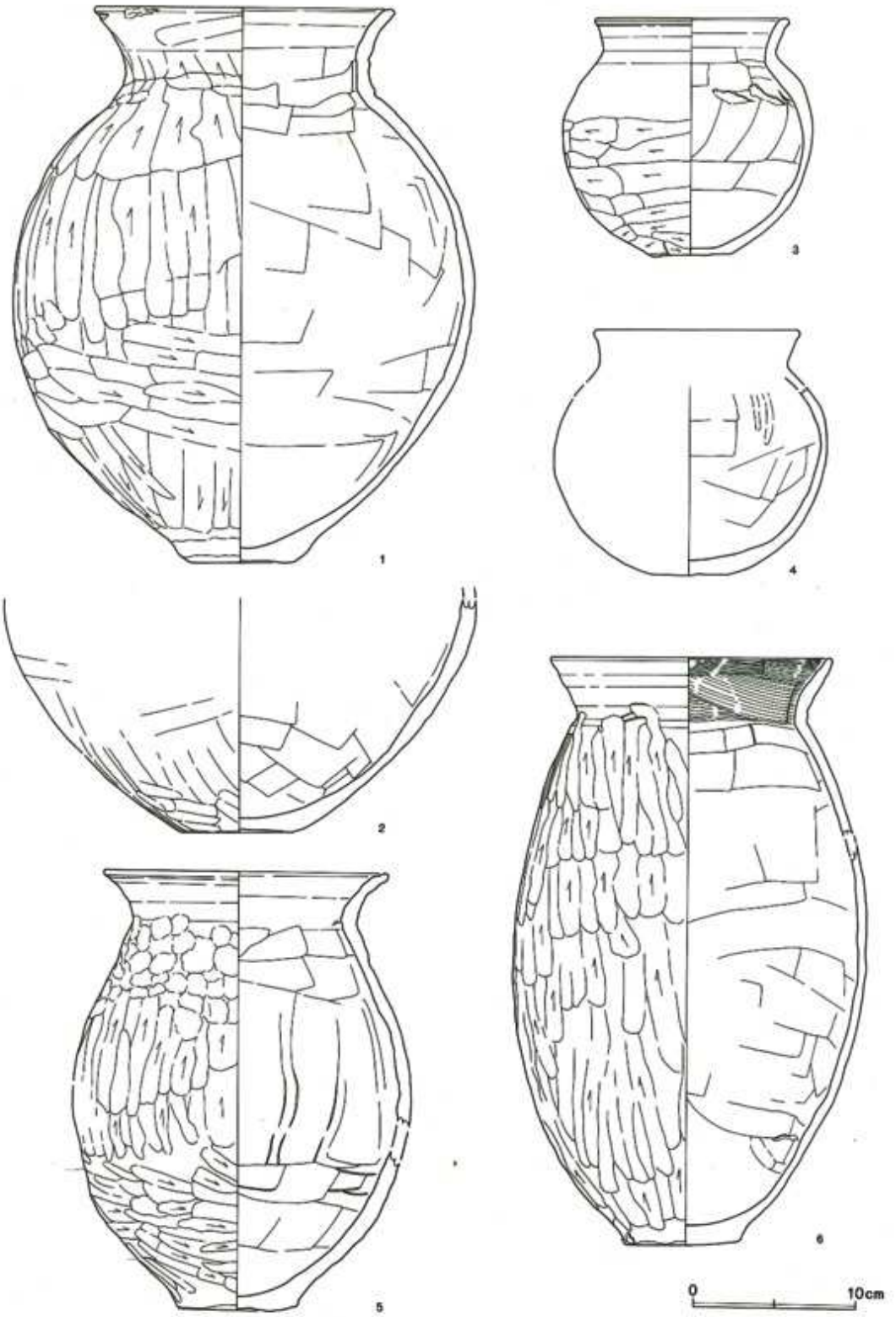




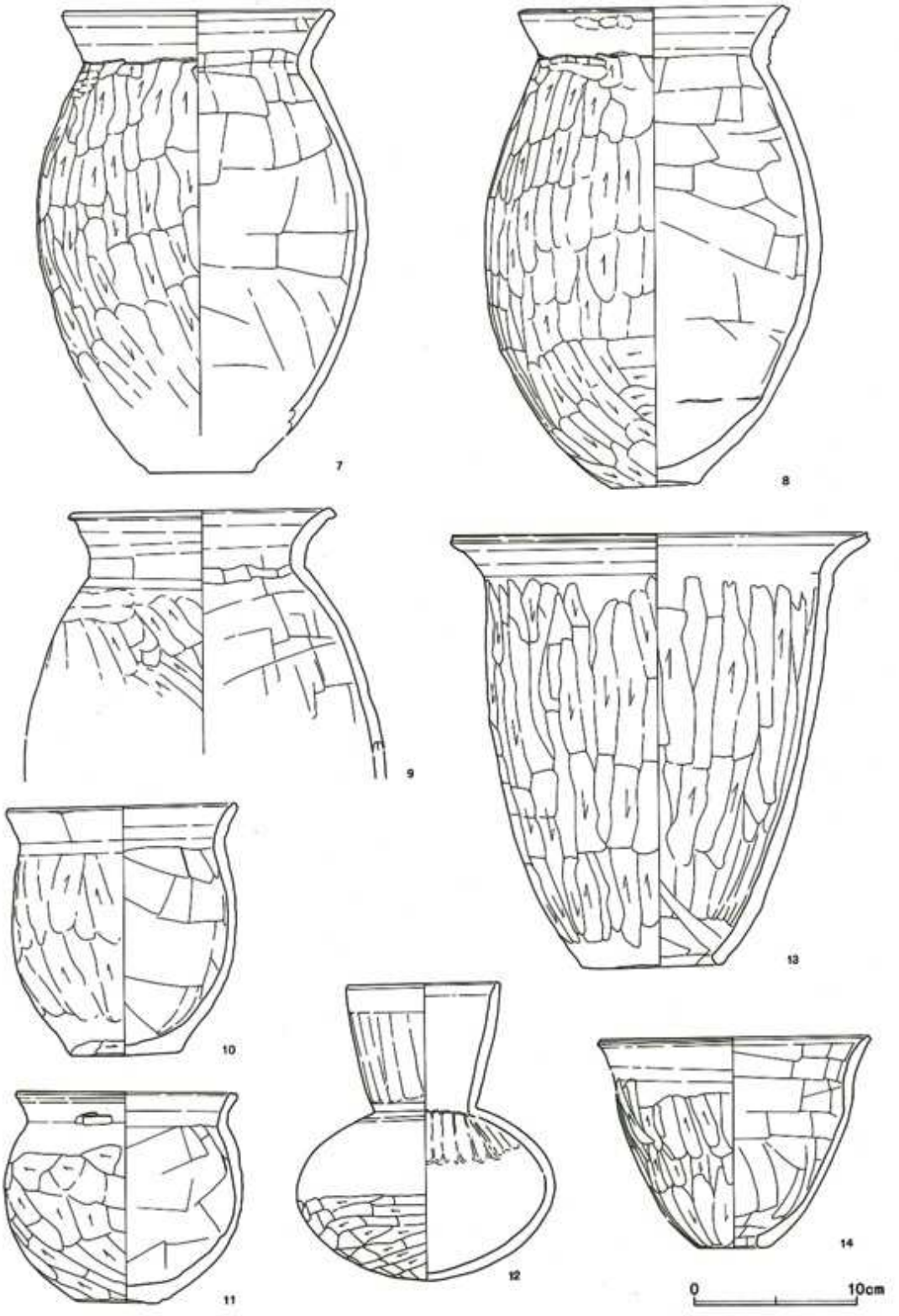
第28号住居跡カマド土層説明
a．10YR6/2　灰黄褐色土　B・Cブロック少。
b．10YR5/1　褐灰色土　Bブロック少。灰分微。
c．10YR5/1　褐灰色土　Bブロックをわずかに含む灰層。
d．10YR5/2　灰黄褐色土　Bブロック少。
e．10YR6/1　褐灰色土　Bブロック微。

0　1m

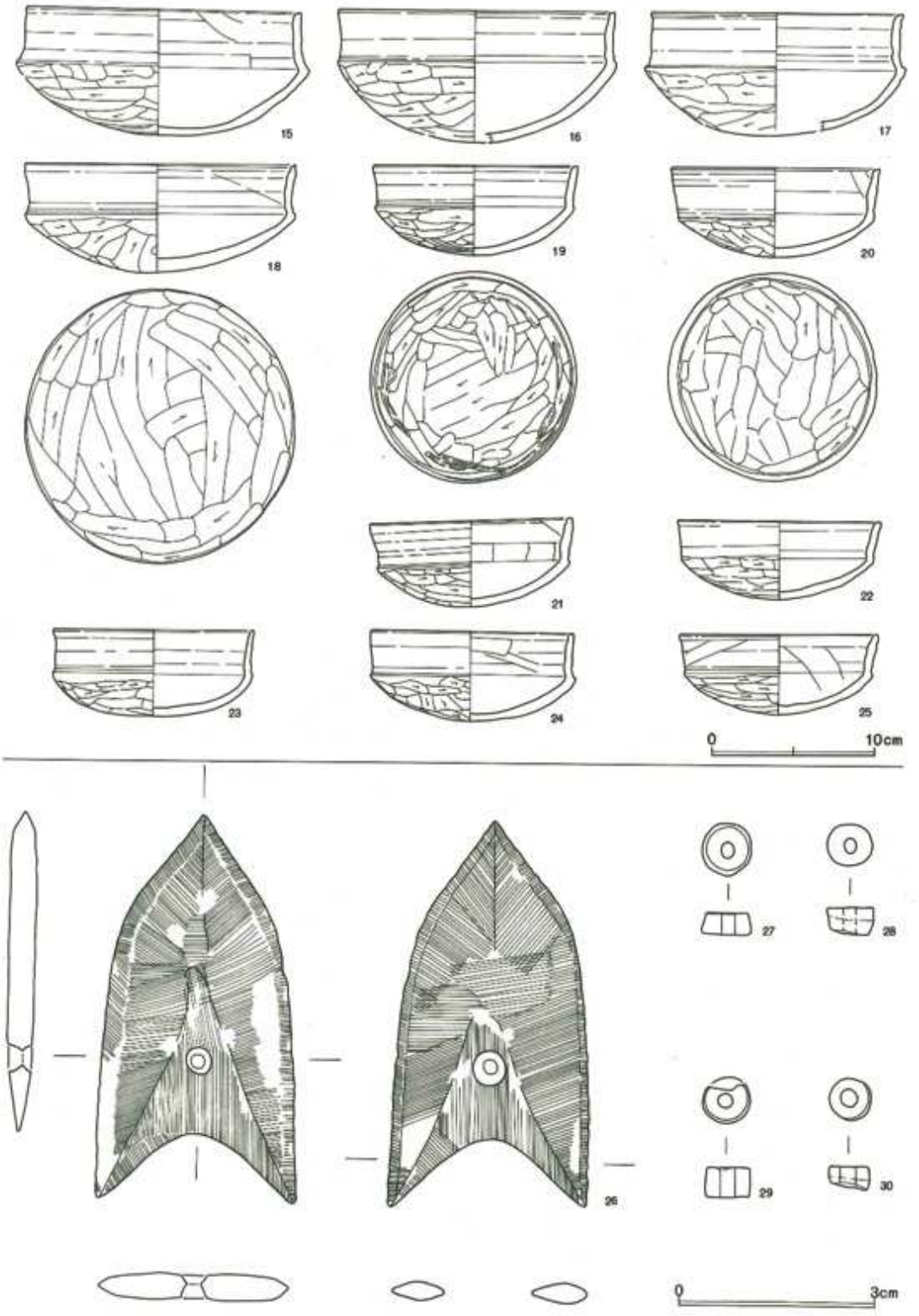
第174図　第28号住居跡(2)



第175図　第28号住居跡出土遺物(1)



第176図　第28号住居跡出土遺物(2)



第177図　第28号住居跡出土遺物(3)

第28号住居跡出土遺物(第175・176・177図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	18.4 × 33.7 × 6.2	95%	粗(W′+B′)多	にぶい黄橙	
2	〃	— ×(14.3)× 7.5	胴下半部～底部	W+W′+B′	橙	
3	小型壺	11.7 × 14.4 × 4.6	完形	W′+B′	〃	
4	〃	— ×(11.5)× 4.6	肩部～底部	W′+R+B′	〃	
5	甕	18.6 × 26.6 × 7.2	60%	W′+B+B′	にぶい橙	
6	〃	17.2 × 35.8 × 6.6	95%	粗W′多	橙	
7	〃	16.5 ×(25.9)× —	80%	W′+B′	にぶい黄橙	
8	〃	17.0 × 29.2 × 5.7	ほぼ完形	W′多+B+B′	〃	
9	〃	16.4 ×(16.4)× —	口縁～胴中部	W+B+B′	明赤褐	
10	小型甕	14.2 × 15.4 × 6.8	完形	粗W′多	橙	
11	〃	13.4 × 13.1 × 4.8	90%	W′+B+B′	〃	
12	坩	9.4 × 18.1 × —	95%	W+W′少+R+B′	〃	
13	甑	26.0～27.0 × 26.5 ×孔7.6	完形	W+粗R多+B′	明赤褐	
14	〃	(17.0)× 13.0 ×孔3.2	50%	W′+B′	橙	
15	坏	17.2 × 7.5 × —	75%	W′+R+B′	〃	
16	〃	17.0 × 8.1 × —	80%	W+W′+R+B′	〃	
17	〃	15.7 ×(7.3)× —	60%	W+W′+粗R+B′	〃	
18	〃	16.7 × 6.6 × —	完形	W+W′+B′	〃	
19	〃	12.6 × 5.6 × —	〃	W+W′+B	〃	
20	〃	12.8 × 5.5 × —	〃	W+W′+B′	〃	
21	〃	12.3 × 5.3 × —	95%	W′+B′	にぶい褐	
22	〃	12.6 × 4.9 × —	完形	W+B′	橙	
23	〃	12.4 × 5.3 × —	ほぼ完形	W′+R+B′	〃	
24	〃	12.6 × 5.5 × —	完形	W′+B′	〃	
25	〃	12.2 × 5.0 × —	75%	W′少+B′	〃	

第29号住居跡出土遺物(第179図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	小型壺	(15.0)×(16.6)× —	口縁片	W′+B′	橙	
2	甑?	(21.6)×(12.4)× —	〃	W+W′+B′多	にぶい黄橙	
3	甕	— ×(7.8)× 5.5	底部	W+W′+R少+B′	〃	
4	鉢	18.6 × 10.4 × —	完形	W+W′+B′	橙	焚割れ
5	坏	12.0 × 7.9 × —	50%	W+W′+R+B′	にぶい黄橙	磨耗
6	〃	12.3 × 4.6 × —	80%	W′+B′	橙	磨耗著しい
7	〃	12.9 × 4.5 × —	60%	W+W′+R+B′	明赤褐	
8	〃	13.5 × 4.3 × —	ほぼ完形	W′多+R+B′	にぶい褐	
9	〃	13.0 × 3.9 × —	70%	W′+R+B′多	橙	

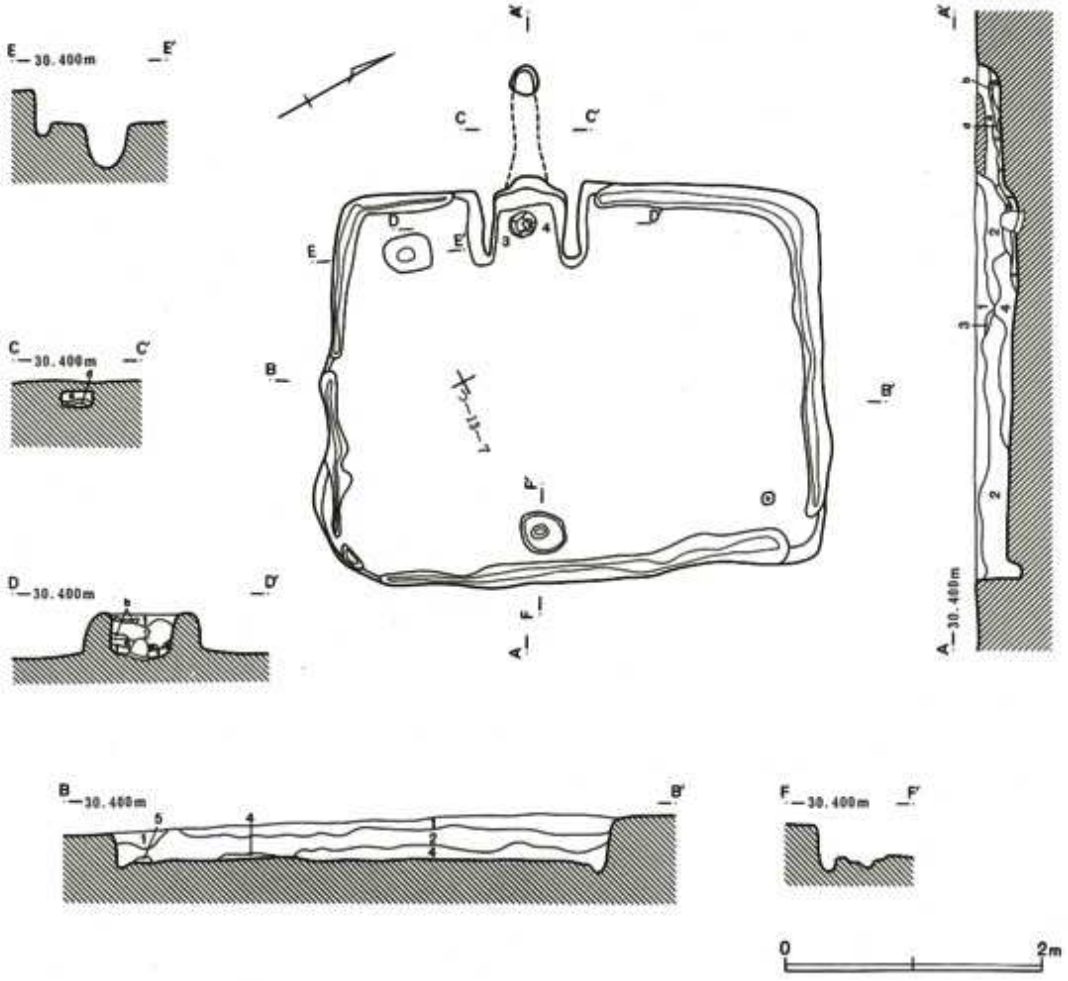
第29号住居跡(第178図)

つ—13—6グリッドを中心に位置する。軸長約3.8m×2.9mの長方形を呈し、面積は約11.0㎡を測る。主軸方向はおよそN—62°—Wである。

遺構確認面から床までは約34cmで、壁の立ち上がりはかなり急である。壁溝は深さ5cm～8cmでほぼ全周し、幅は北半部で20cmと広くなっている。

床面は硬くしまっているが、カマドの前面では特に硬化している。面的には概ね平坦である。

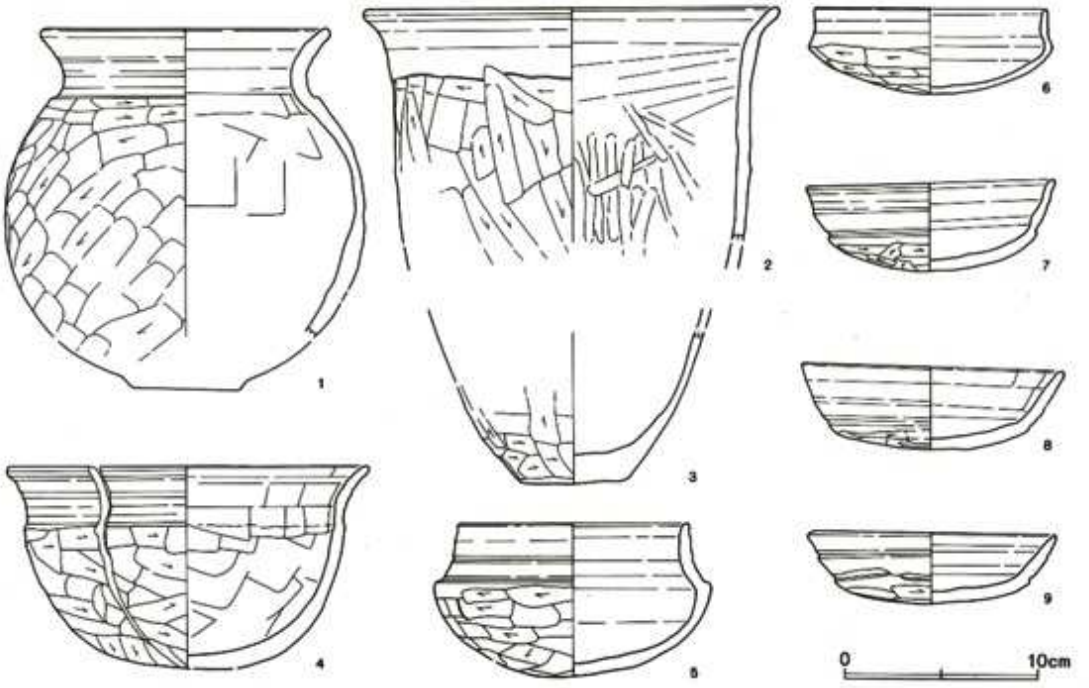
カマドは北西壁の南寄りに設けられている。燃焼部は両袖と壁によって、幅55cm、長さ60cmほどの箱形となっている。火床面は床面とほとんど同じ高さであり、明瞭な掘り込みは認められない。火床面の中央部には、支脚として鉢(4)が伏せ置かれている。さらに、その上には甕の底部(3)がかぶせられ、かさあげされているようである。なお、下の鉢は火床面にくい込んでいる。煙道は天井部分が残存しており、地山が刳り抜かれたものであることが分かる。観察によれば、煙道の断面は幅約22cm、高さ約12cmの長方形で、長さは約95cmである。底面は緩やかな傾斜を有し、煙り出し



第29号住居跡カマド土層説明
a. 10YR5/2　灰黄褐色土
b. 10YR5/2　灰黄褐色土
c. 10YR5/2　灰黄褐色土　灰とBブロックからなる。
d. 10YR5/2　灰黄褐色土　Lブロックからなる。
e. 2.5YR5/8　明赤褐色土　Bブロック多。天井・壁部崩落土層。
f. N5／　灰色土　単純灰層。

第29号住居跡土層説明
1. 10YR5/2　灰黄褐色土　Lブロックよりなる。
2. 10YR5/2　灰黄褐色土　Lブロックよりなる。
3. 10YR5/1　褐灰色土
4. 10YR5/2　灰黄褐色土　Lブロックよりなる。
5. 10YR5/1　褐灰色土

第178図　第29号住居跡



第179図　第29号住居跡出土遺物

部は急角度で立ち上がっている。

貯蔵穴は西隅とカマド左袖の中央部に備わる。このため、空間的な占有性は高いものとなっている。平面は37cm×28cmほどの長方形で、深さも約35cmと小型である。

主柱穴は確認されなかったが、カマドの対位置には直径約35cm、深さ約4cmの窪みが存在する。その中心にはさらに浅く小孔が穿たれている。これも出入口にかかわる施設の一部と思われる。

カマド内からのものを除き、図示した遺物の出土はすべて覆土中からである。

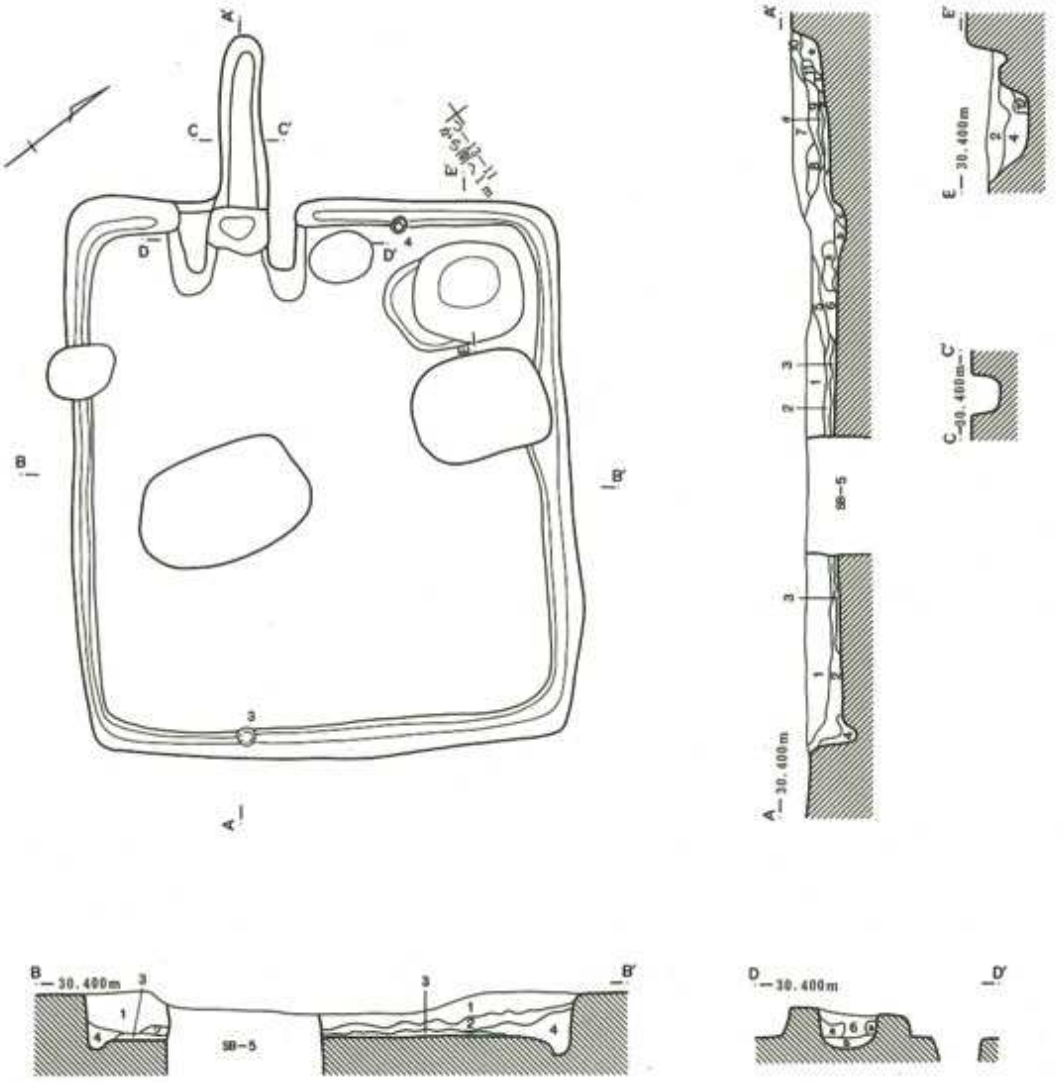
第30号住居跡(第180図)

つ—12—10グリッドを中心に位置し、壁と床の一部を第5号掘立柱建物跡に切られる。本跡と第29・31号住居跡は、その形状や主軸方向、また出土土器も非常によく似ている。第31号住居跡とは近接する壁間が約1mで、きれいに並んでいる。全体は4.33m×3.85mの長方形を呈し、面積は約16.7m²を測る。主軸の方向はN—55°—Wを指す。

覆土は地山の粘質土を主体とする自然堆積で、遺構確認面から床までは約36cmである。床面は中央部がわずかに高まり、この部分を中心に硬く踏みしまっている。

壁溝は全周し、南西壁でやや狭いものの、およそ幅20cm、深さ8cmと一定している。南東と北西の壁溝肩部からは、それぞれ完形の坏(3・4)が出土している。

カマドは北西壁の南寄りに付設されている。袖は床から22cmの高さを有するが、壁の上端には及んでいない。焚き口部の幅は約55cmで、燃焼部の断面は広いU字形を呈している。火床面は床面からだらだらと傾斜し、壁寄りは約6cmほど深く方形に掘られている。煙道は燃焼部と同じ幅で延び、長さ約134cmを測る。横断面は箱形で、緩やかに立ち上がる。



第30号住居跡土層説明

1．10YR2/2　黒褐色土　大型Lブロック多。B・C粒少。
2．10YR3/3　暗褐色土　L粒少。単一的。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　ほとんどL。床の溜軟化層。
4．10YR3/3　暗褐色土　基本は2。Lブロック多。床・壁の溜軟化層。
5．10YR2/2　黒褐色土　1の基本層。Lブロック少。大型B・C粒を含む。
6．10YR3/4　暗褐色土　多量のB・C粒を含む。
7．10YR5/2　灰黄褐色土　Mn・軽石粒を含む。
8．10YR5/2　灰黄褐色土　Bブロック。
9．10YR4/2　灰黄褐色土　Mn粒を多く含む。
10．10YR5/1　褐灰色土　Mn粒・Lブロックを多く含む。
11．10YR4/1　褐灰色土　Lブロックを多く含む。
12．地山L　掘りすぎ。

第30号住居跡カマド土層説明

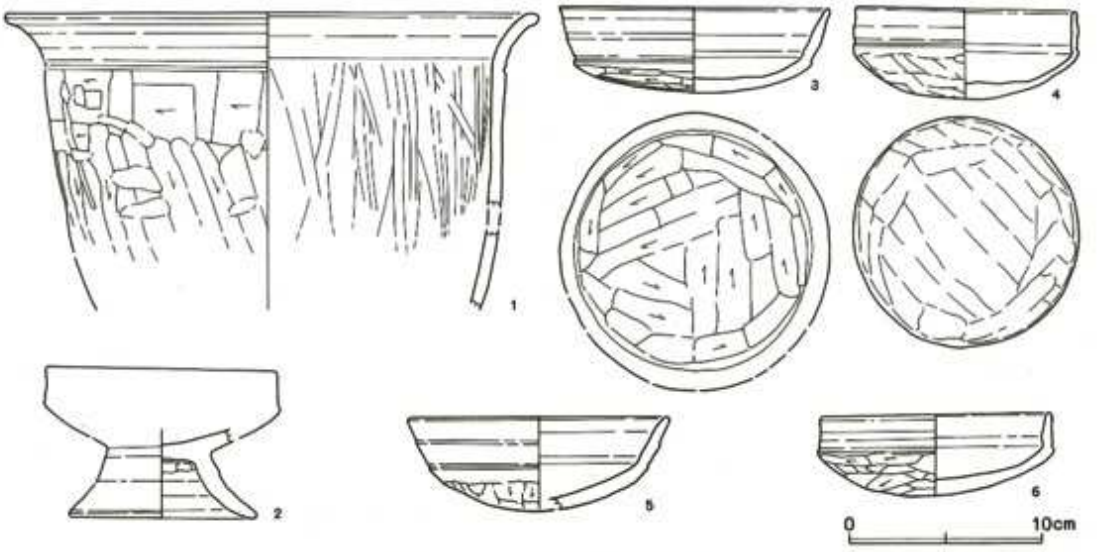
a．10YR3/4　暗褐色土　大型L・Bブロック多。天井部崩落土層。
b．10YR1.7/1　黒色土　B・C粒少。単純灰層。
c．10YR4/3　にぶい黄褐色土　砂質Lブロック多。
d．10YR4/2　灰黄褐色土　L・Bブロックを含む。
e．10YR4/2　灰黄褐色土　Lブロック・Mn・B粒を含む。
f．10YR5/1　褐灰色土

0　2m

第180図　第30号住居跡

貯蔵穴は北隅部に位置する。平面は84cm×77cmの長方形を呈し、深さは30cmほどである。カマド寄りには半円状のテラスが見られ、住居に対してはかなり大きい印象を受ける。

壁溝部以外から出土した遺物はすべて破片で、床からは浮いていた。



第181図　第30号住居跡出土遺物

第30号住居跡出土遺物(第181図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甑	27.4 ×(15.3)× —	口縁～胴中部	W少+W′+B′多	橙	
2	高坏	— ×(4.5)×裾10.0	脚部80%	W+W′+B′	〃	
3	坏	13.8 × 4.4 × —	完形	W′多+R+B′多	〃	
4	〃	11.5 × 4.7 × —	ほぼ完形	細(W+W′+B′)	〃	磨耗著しい
5	〃	13.4 ×(4.4)× —	50%	W+W′+B′多	にぶい黄橙	
6	〃	11.8 × 4.2 × —	75%	細(W′+B′)	〃	磨耗著しい

第31号住居跡(第182図)

つ—13—1グリッドを中心に位置する。本跡の北側には第30号住居跡、西側には第29号住居跡が接している。また、南側は埋没河川に臨んでいる。東隅や床を第5号掘立柱建物跡に切断されるが、全体は3.42m×2.75mの長方形を呈する。地形的に南側が低くなるためか、やや南西の壁が短くなっている。面積は約9.4m²で、主軸方向はおよそN—60°—Wを指す。

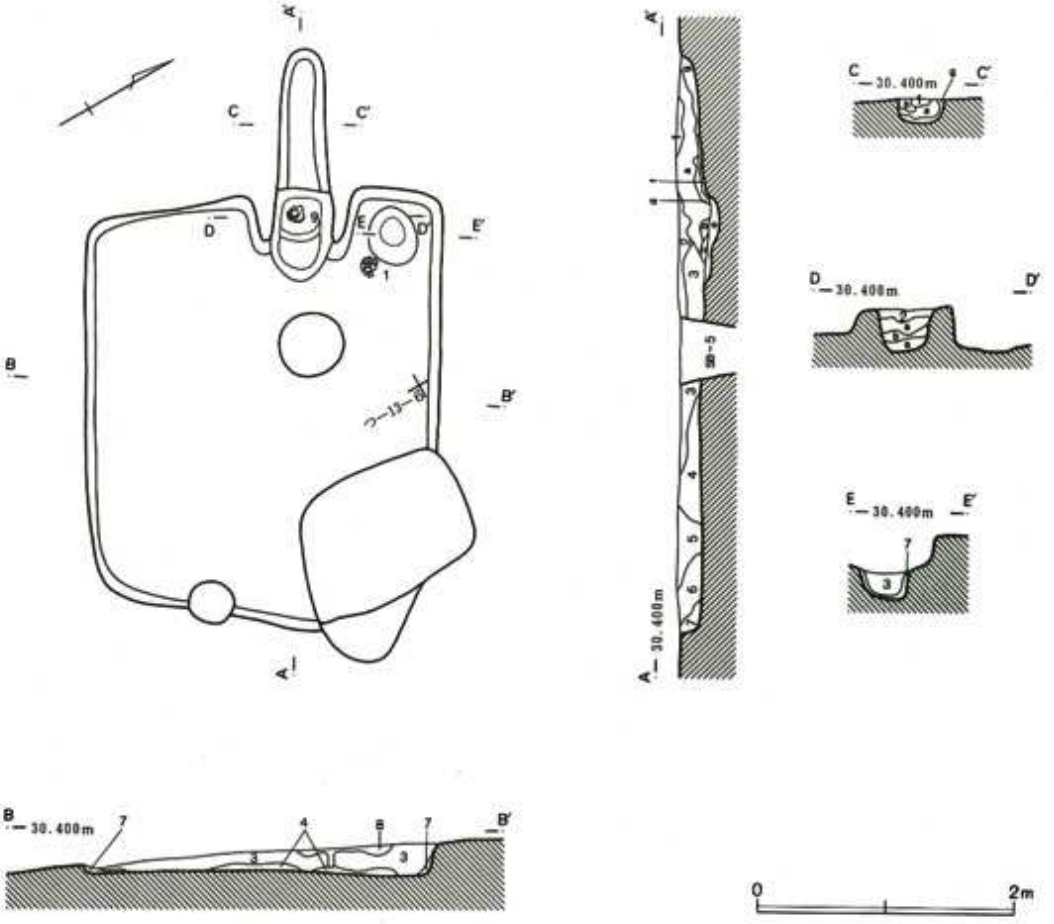
覆土はだいぶ乱れているものの、主に地山の粘質土で構成され、人為的に埋め戻された様子は窺われなかった。床までは北側で最大24cmである。床面は中央部が心持ち膨らみ、よく踏みしまっている。

カマドは北西壁の中央部から、わずかに北へ寄っている。燃焼部は両袖と壁によって箱形となり、焚き口部では半円状となる。長さは約72cm、幅は約45cmを測り、袖内面はよく焼けている。火床面は焚き口部で床面よりも4cmほど低く、奥部はここよりさらに8cmほど深くなっている。その中央部には土製の支脚(9)が据えられている。煙道の基部は燃焼部と同じ幅で、底面は火床面からはわ

ずかに高い。幅約35cm、長さ約108cmの溝状で、緩やかに立ち上がる。

貯蔵穴は住居跡の北隅、カマドとの間に掘られている。それゆえ、この一角は貯蔵穴のためともいえる空間になっている。径42cm×37cmの円形を呈し、横断面は深さ28cmのU字形となる。カマド側の肩部床面上からは、ほぼ完形の坏(1)が出土している。

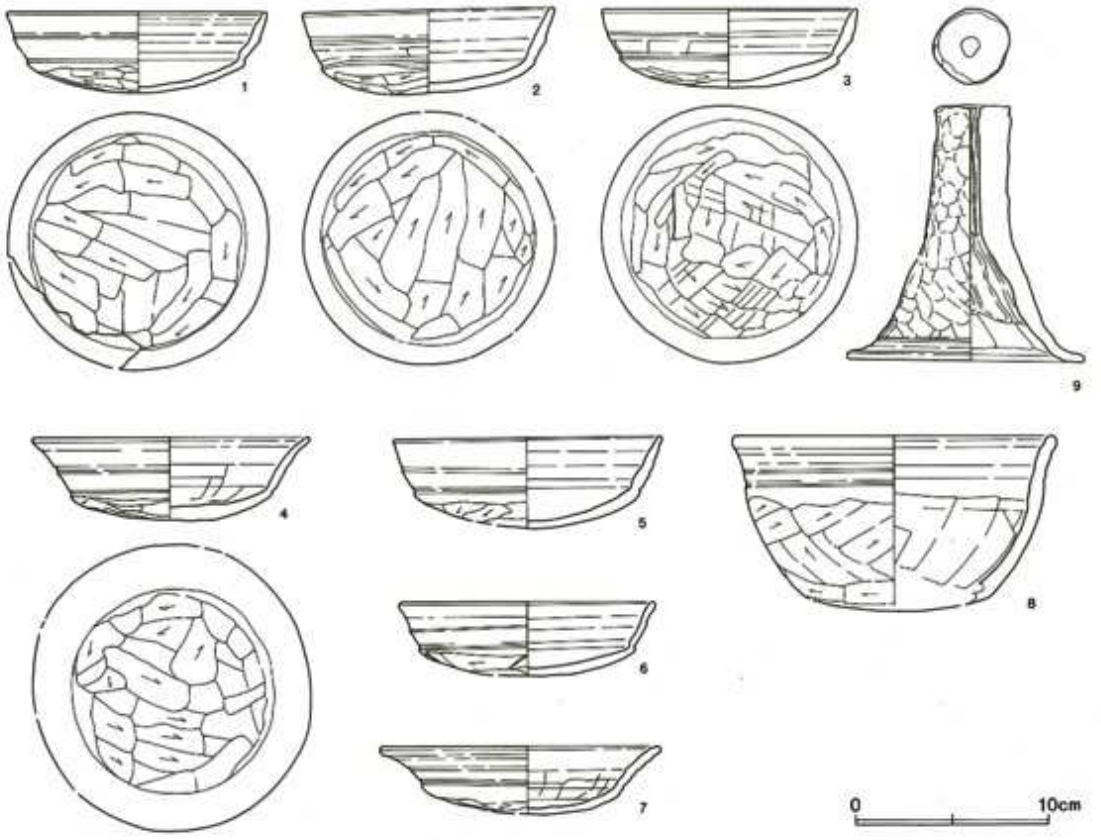
図示した遺物のうち、上述のもの以外はすべて覆土中からの出土である。



第31号住居跡土層説明
1. 10YR6/3　にぶい黄橙色土　B粒少。
2. 10YR4/2　灰黄褐色土　Fe粒多。
3. 10YR6/1　褐灰色土　C粒多。
4. 10YR6/1　褐灰色土　Fe粒少。
5. 10YR6/1　褐灰色土　Fe粒多。
6. 10YR6/1　褐灰色土　Fe粒少。Lブロック多。
7. 10YR5/2　灰黄褐色土　Fe粒多。Lブロック少。
8. 10YR5/2　灰黄褐色土　B・Cブロック微。

第31号住居跡カマド土層説明
a. 10YR5/2　灰黄褐色土　L・FAブロック少。
b. 10YR5/1　褐灰色土　B粒多。灰分少。
c. 10YR4/2　灰黄褐色土　B粒多。
d. 10YR5/2　灰黄褐色土　Lブロック微。B粒少。
e. N4/　灰色土　C粒少。灰層。
f. 10YR5/1　褐灰色土　灰分多。
g. 10YR5/1　褐灰色土　Lブロック少。Bブロック微。
h. 10YR5/2　灰黄褐色土　L粒少。Fe粒多。

第182図　第31号住居跡



第183図　第31号住居跡出土遺物

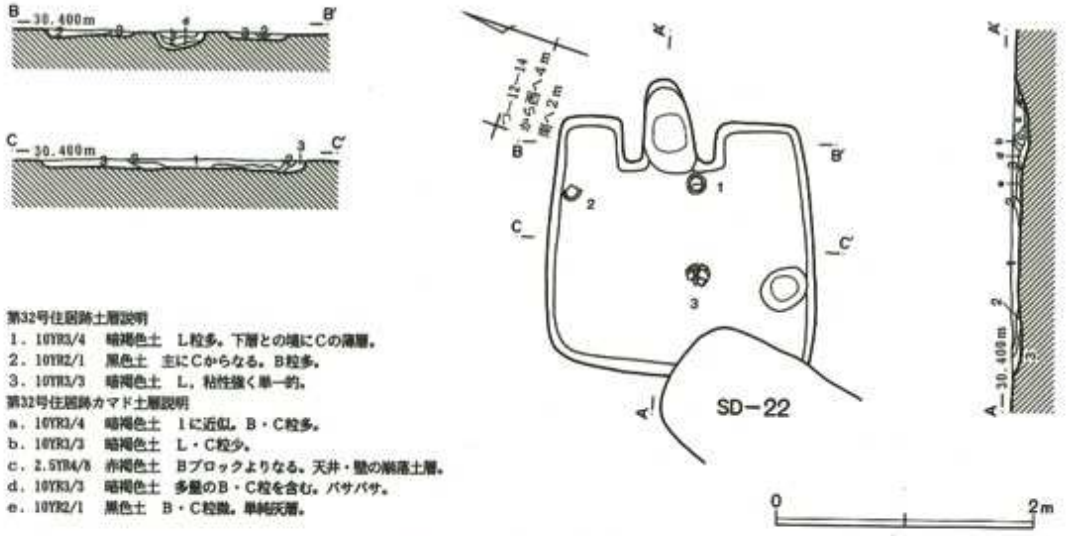
第31号住居跡出土遺物(第183図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	坏	13.6 × 4.4 × —	90%	細(W′+B′)	明赤褐	
2	〃	13.0 × 4.4 × —	ほぼ完形	細(W′+B′少)+R	にぶい橙	二次焼成
3	〃	13.2 × 4.1 × —	完形	W+W′少+B′	明赤褐	〃
4	〃	14.6 × 4.4 × —	90%	W+W′多+B′	にぶい褐	磨耗著しい
5	〃	(14.1)× 4.7 × —	50%	W+W′+粗R+B′+粗砂	にぶい橙	
6	〃	(13.2)× 3.8 × —	30%	W′少+R+B′少	橙	
7	〃	14.1 × 3.6 × —	50%	W′多+R+B′	褐	
8	鉢	16.8 ×(8.8)× —	75%	W+W′+R少+B′	にぶい橙	磨耗著しい
9	支脚	器受部径 3.7 × 孔 0.9 高13.1 × 裾(12.0)	70%	W+W′+B′	明赤褐	

第32号住居跡(第184図)

つ—12—9グリッドに位置する。南隅を第22号溝に切断されるが、全体は壁のやや張る方形を呈している。主軸はともに1.9mほどで、面積は約3.6㎡となる。柳町遺跡において検出された中では、最も規模の小さい住居跡である。主軸の方向はほぼN—70°—Eを指す。

覆土で2層としたものは炭化物を主体にしており、上下層との境界は明瞭となっている。この層は一部で床面と接しているものの、住居の埋没過程で堆積した層で、本跡が焼失住居であることを



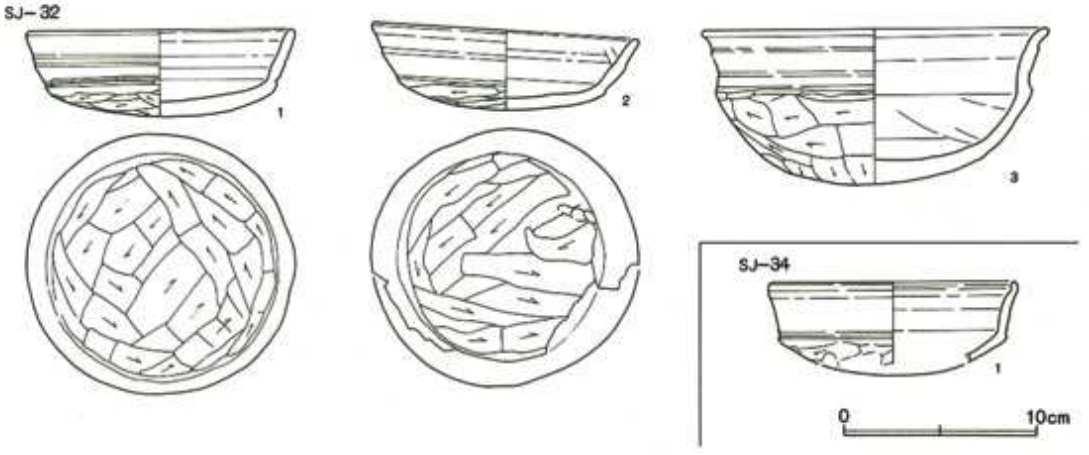
第184図　第32号住居跡

示すものではない。削平のため、床までは6cmが測れるにすぎない。床面は軟質で、おおよそ平坦である。

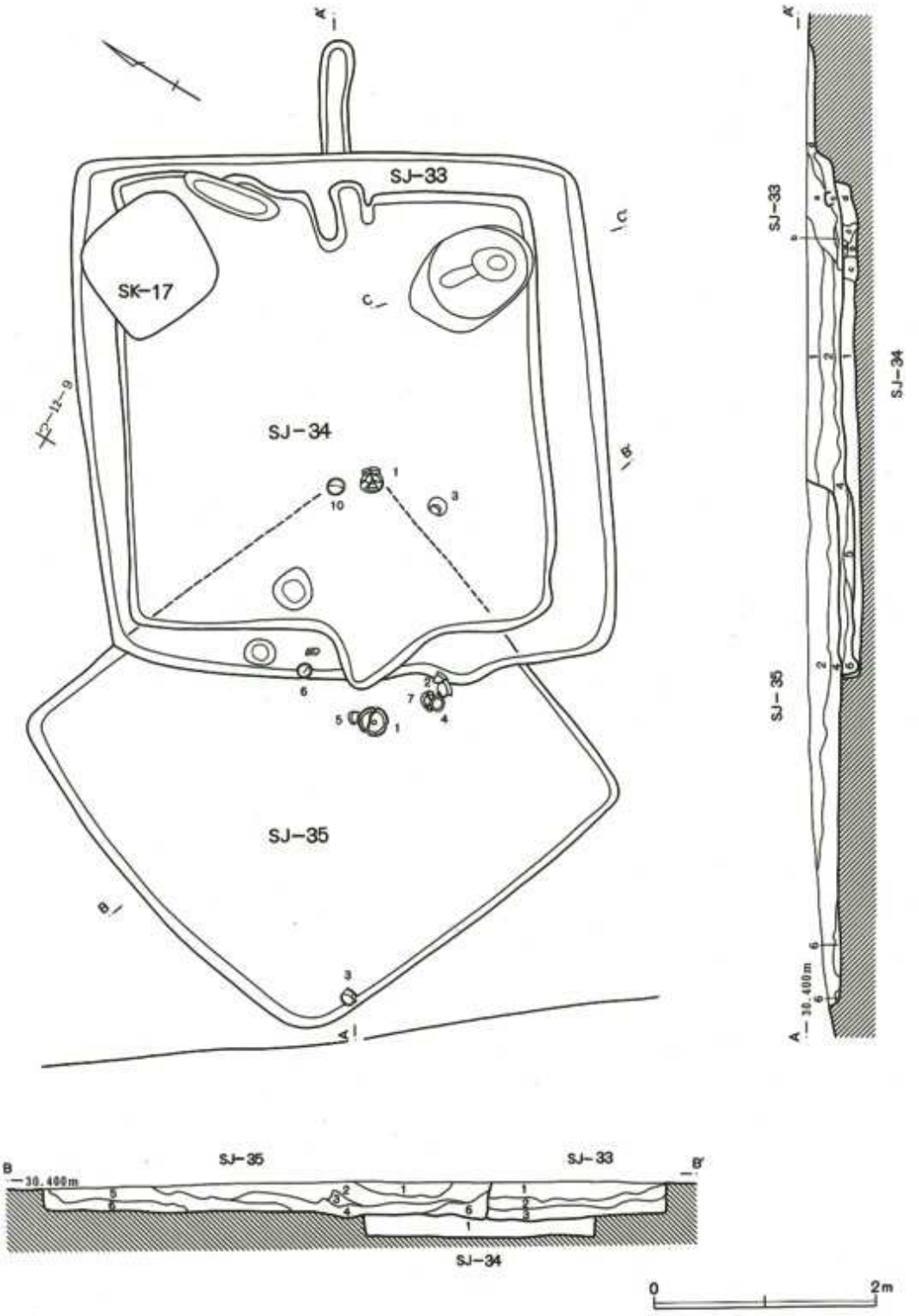
カマドは北東壁のわずか北寄りに設けられる。燃焼部は72cm×40cmほどの楕円形を呈し、火床面は床面より4cm深い。ここにはきれいな灰層が形成されている。削り出された右袖の先端より、完形の坏(1)が出土している。

貯蔵穴や柱穴は検出されなかった。平面図の南東壁際にある小穴は、皿状のわずかな窪みを表現したものである。

遺物は他に、北西壁際より坏(2)、床中央部より鉢(3)が出土している。ともに床面に直接乗っている。



第185図　第32・34号住居跡出土遺物



第186図　第33～35号住居跡(1)

第32・34号住居跡出土遺物(第185図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
第32号						
1	坏	13.9 × 4.5 × —	完形	細(W+W′+B′)	にぶい橙	内面黒変(ススケ?)
2	〃	13.2 × 4.3 × —	80%	W′+B′	灰黄褐	口縁歪みが強い
3	鉢	(18.6)× 7.9 × —	80%	W+W′多+R+B′	にぶい黄橙	
第34号						
1	坏	(13.0)×(4.7)× —	破片	W+W′+R	橙	

第33・34号住居跡(第186・187図)

つ—12—3グリッドを中心に位置する。各々、個別の住居跡番号を付したが、本来は1軒の拡張住居である。ここでは、小型で先行するものを第34号住居跡拡張されたものを第33号住居跡とした。拡張はすべての壁が均一に広がり、主軸方向はともにN—56°—Eを示す。なお、第33号住居跡上には、埋没後に第35号住居跡が設営される。また、北隅は攪乱坑に切られている。

拡張前の第34号住居跡は、軸長3.94m×3.78m、面積約14.9m²を測る。カマドの対位置にあたる南西壁は、三角形状に突出している。出入口に関係するのであろうか。

覆土は地山の粘質土単一で、硬くしまっている。明らかに拡張後の床面を形成するため、故意に充填されたものである。遺構確認面から床までは約46cmで、床面は充填土と同質化している。

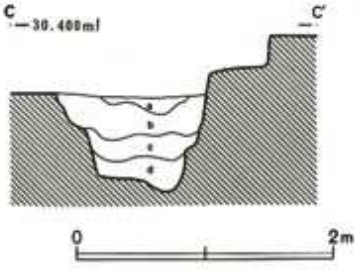
第33号住居跡土層説明
1. 10YR6/1　褐灰色土　L・Fe粒多。
2. 10YR6/2　灰黄褐色土　L粒少。Fe粒多。
3. 10YR5/2　灰黄褐色土　L・Fe粒少。C粒微。
4. 10YR6/1　褐灰色土　L粒多。Fe・C粒少。
5. 10YR6/1　褐灰色土　C粒多。
6. 10YR6/1　褐灰色土　C粒多。Fe粒少。

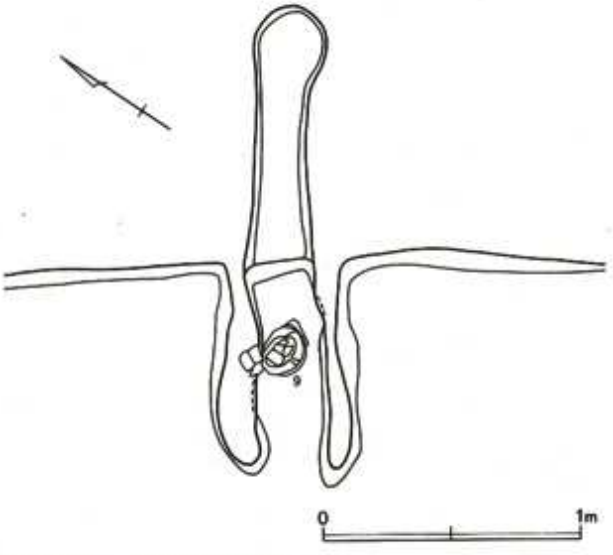
第34号住居跡土層説明
1. 10YR6/1　褐灰色土　ブロック状Lからなる。埋め戻し土層。

第34号住居跡カマド土層説明
a. 5YR6/4　にぶい橙色土　Bブロックからなる。
b. 10YR6/2　灰黄褐色土　FAをわずかに含む。
c. 10YR6/1　褐灰色土　B粒微。灰層。
d. 10YR6/2　灰黄褐色土　Fe粒多。

第35号住居跡土層説明
1. 10YR6/1　褐灰色土　Fe粒多。
2. 10YR6/1　褐灰色土　L・Fe粒多。
3. 10YR7/2　にぶい黄橙色土　L・Fe粒少。
4. 10YR5/2　灰黄褐色土　L粒多。Fe粒少。
5. 10YR6/1　褐灰色土　L粒多。Fe粒少。
6. 10YR6/1　褐灰色土　L・Fe粒多。

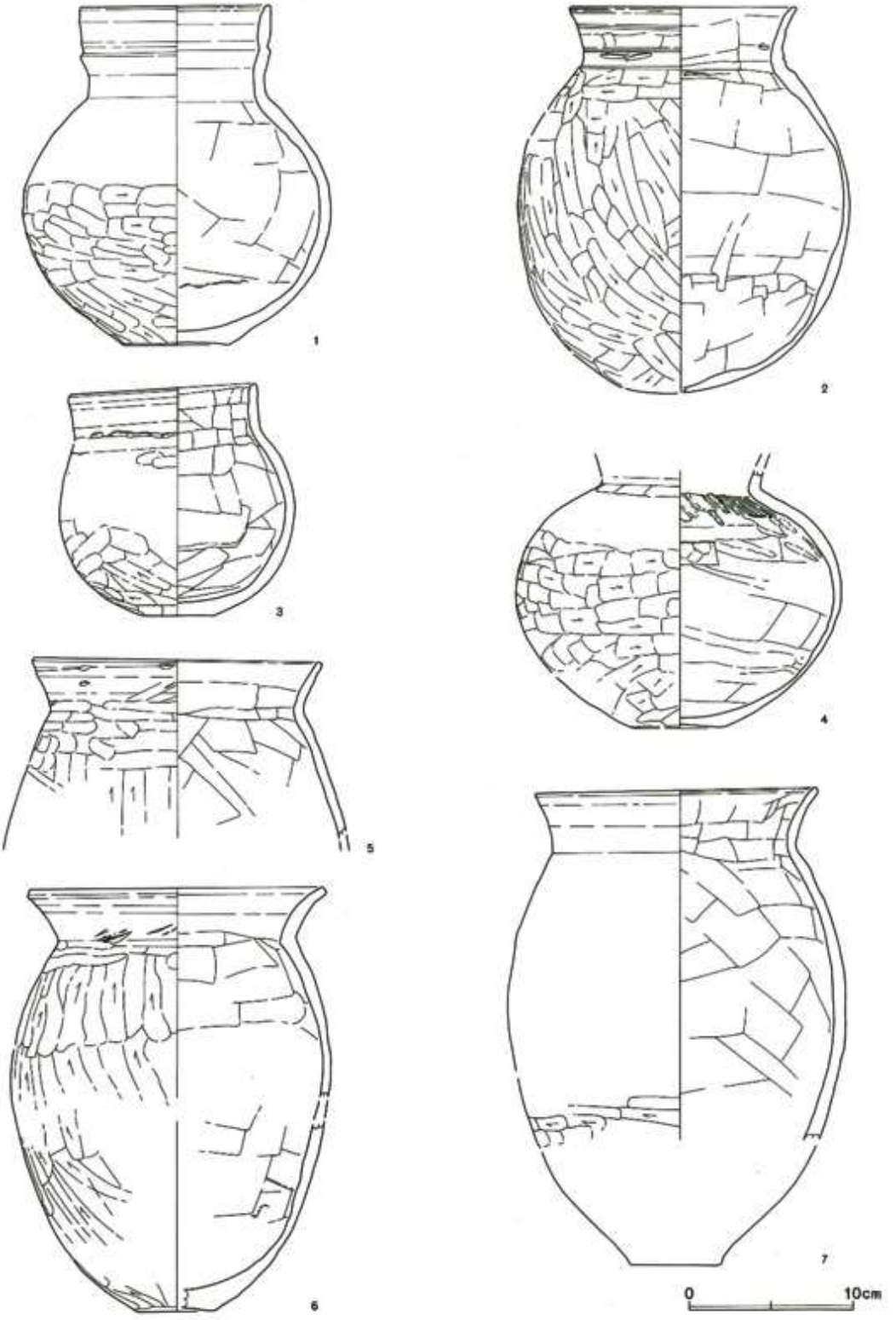
第33号住居跡カマド土層説明
a. 10YR6/1　褐灰色土　Fe・C粒少。
b. 10YR6/2　灰黄褐色土　C粒を含む。
c. N4/　灰色土　C粒少。灰層。
d. 10YR6/1　褐灰色土　C粒少。焼土。



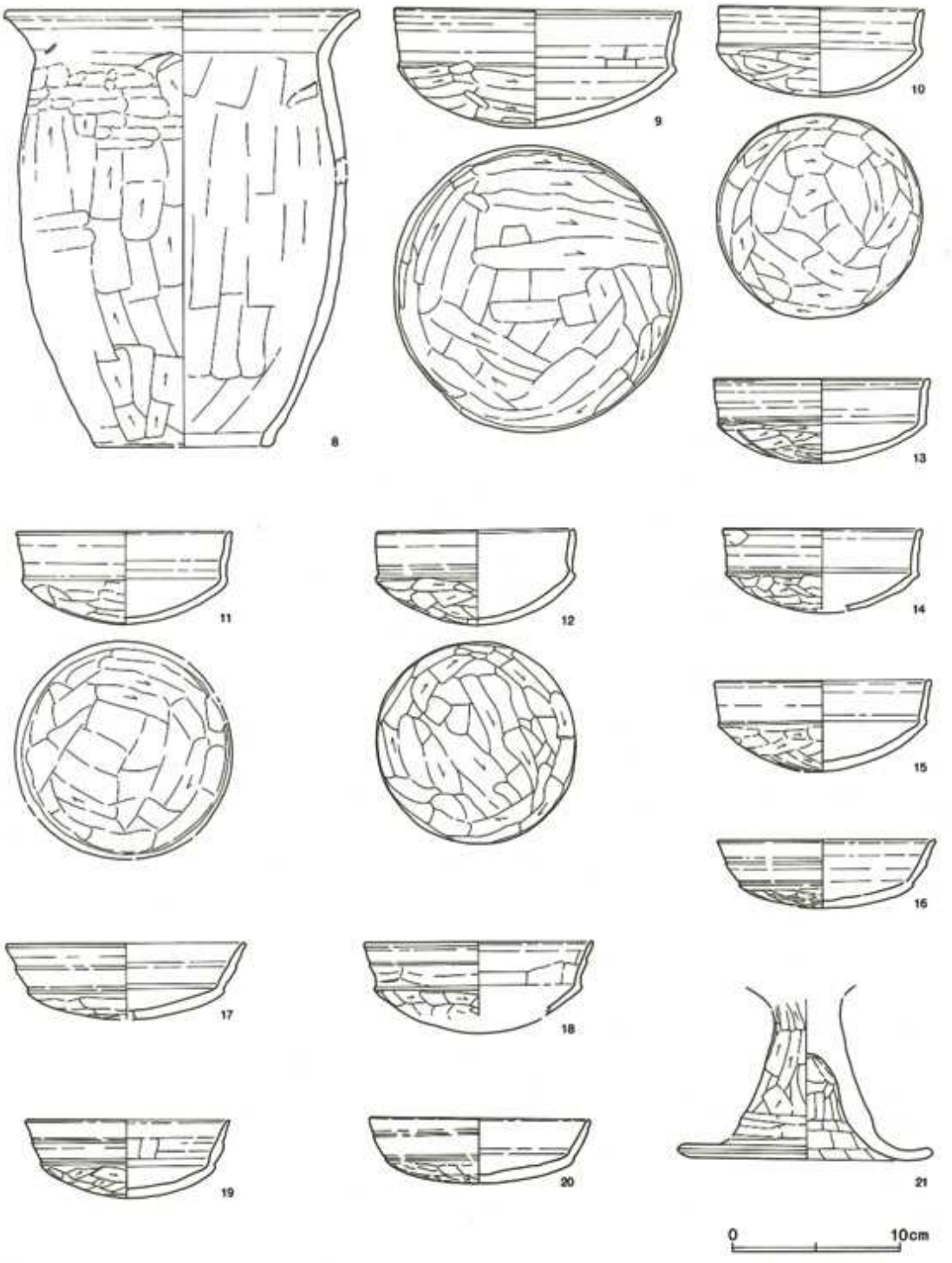


第34号住居跡貯蔵穴土層説明(C—C′)
a. 10YR6/2　灰黄褐色土　C粒微。Fe粒多。
b. 10YR5/2　灰黄褐色土　L・Fe粒多。
c. 10YR6/1　褐灰色土　B粒微。
d. 10YR5/1　褐灰色土　砂粒少。

第187図　第33～35号住居跡(2)　第33号住居跡カマド



第188図　第33号住居跡出土遺物(1)



第189図　第33号住居跡出土遺物(2)

カマドは北東壁の中央部に設けられている。やはり、削り出された袖は充塡土と同質化しており、検出は困難であった。燃焼部は幅30cmほどで、覆土は灰や焼土ブロックで構成されている。

貯蔵穴は東の隅部に備わり、大型の楕円形を呈する。規模は径112cm×82cm、深さ75cmほどである。覆土はさほど強くしまってはいないが、地山ブロック主体の埋め戻し土である。第33号住居跡床面の精査時には検出されなかったため、拡張にあたって放棄されたものと考えられる。

遺物は充塡土中より、坏の破片(1)が1点出土したのみである。

拡張後の第33号は、両軸長が約4.7mで、面積は約22.1㎡となる。軸長はおよそ80cm～90cm延び、面積は約1.5倍広くなっている。

床は充塡土によって10cm程度かさあげされ、硬く踏みしまっている。床面は概ね平坦で、西側がやや低めになっている。

カマドは拡張前と同位置に存在する。袖は拡張分を新たに削り出してはいるものの、基本的には拡張前のものを利用している。このため、壁から焚き口に向けて低くなり、燃焼部の幅は30cmのままである。火床面は旧カマドの覆土上にあり、床面との差はほとんどない。この中央部の灰層には、完形の坏(9)が伏せられている。支脚としたものであろう。

遺物の出土は多く、覆土下層から床面の直上に見いだされている。ただし、16～20の坏は第35号住居跡からの混入かもしれない。

第33号住居跡出土遺物(第188・189図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	小型壺	11.6 × 20.5 × 6.4	ほぼ完形	細(W+W′+B′)+R	橙	
2	壺	13.7 × 23.2 × —	80%	細(W′少+B′多)+R	〃	
3	小型壺	11.6 × 14.0 × 4.5	80%	細(W少+W′少+B′)+R	〃	
4	壺	— ×(15.7)× 5.6	70%	W+W′+粗R+B′	〃	磨耗著しい
5	甕	(16.6)×(10.5)× —	口縁～胴部片	W′+R多+B′	〃	
6	〃	(18.4)×(25.6)×(5.3)	口縁～胴部、底部片	粗(W+W′)多+R+B	〃	磨耗著しい
7	〃	17.0 ×(21.2)× —	70%	粗W+W′+金雲母微	〃	
8	甑	(21.4)× 25.8 ×孔(9.4)	30%	W+粗R多+B′	〃	
9	坏	17.0 × 7.1 × —	ほぼ完形	W+W′+粗R+B′少	〃	
10	〃	12.4 × 5.4 × —	完形	W+W′+B′少	〃	磨耗著しい
11	〃	13.0 × 5.4 × —	ほぼ完形	W′+B′	〃	〃
12	〃	12.0 × 5.7 × —	90%	W+W′多+B′少	〃	
13	〃	13.2 × 5.0 × —	90%	W+W′	明赤褐	
14	〃	(12.0)× 4.9 × —	30%	W少+W′少+粗R+B′	橙	
15	〃	(13.0)× 5.4 × —	50%	W少+W′+R+B′	〃	磨耗著しい
16	〃	(13.6)× 3.9 × —	25%	細(W+W′+B′)	灰黄褐	
17	〃	(14.4)× 4.7 × —	40%	W+W′	にぶい黄橙	
18	〃	(14.0)×(4.5)× —	35%	W少+W′+B′	橙	
19	〃	12.6 × 4.6 × —	65%	W+W′	褐灰	
20	〃	(13.6)× 3.8 × —	60%	W′+B′	明赤褐	
21	高坏	— ×(9.9)×(15.0)	脚部60%	W+W′+粗B′多	橙	

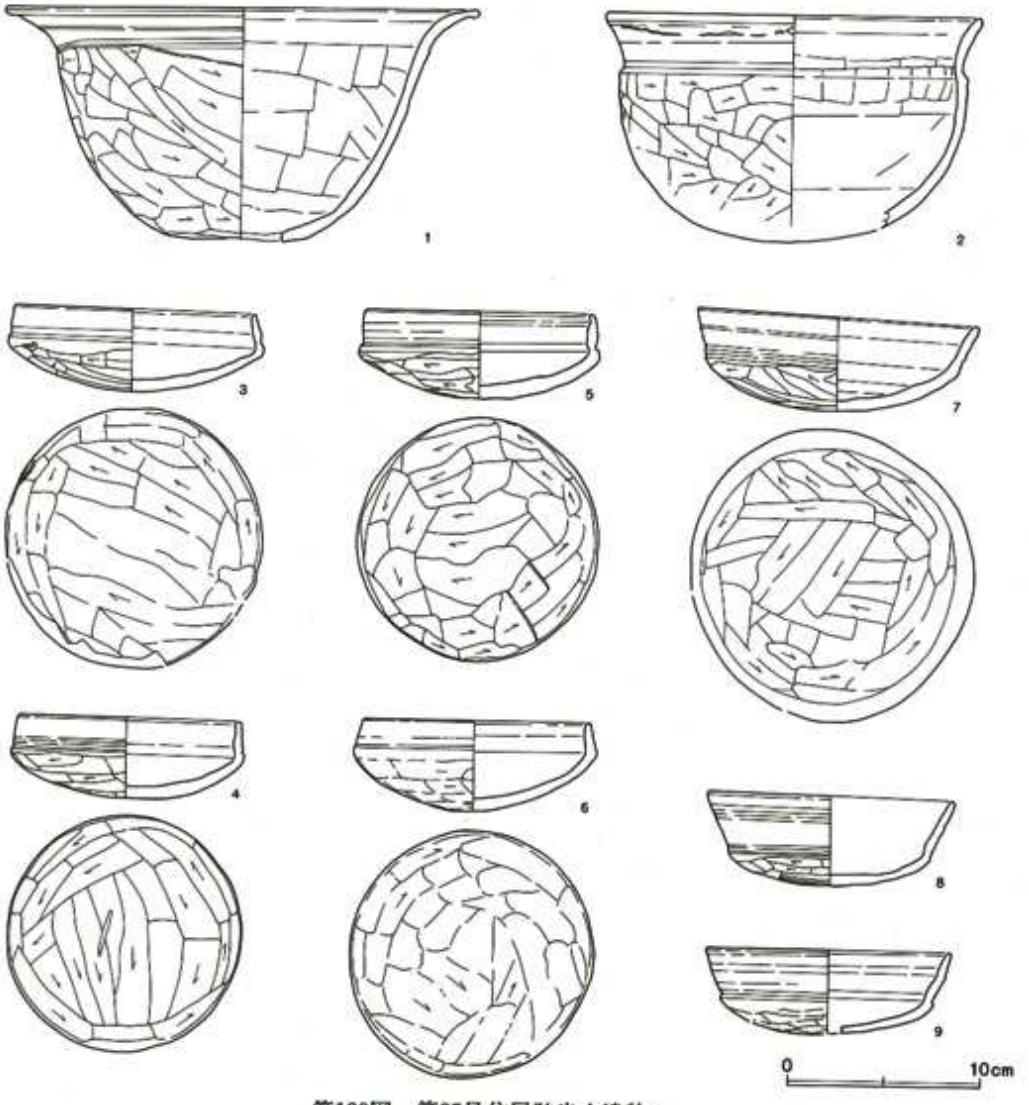
第35号住居跡(第186図)

つ—12—4グリッドを中心に位置する。第34号住居跡埋没後に構築されており、平面は3.9m×4.0mの方形を呈している。面積は約15.7m²を測り、長軸方向はおよそN—68°—Wを指す。

確認面から床までは約30cmで、床面は非常に軟質である。覆土は第34号住居跡とよく似ているため、北東隅部の平面確認はできなかった。

カマドは精査したにもかかわらず、ついに検出には至らなかった。本跡も第19・42・53号住居跡のように、本来的にカマドが備わらないのかもしれない。貯蔵穴や柱穴も検出されず、床面の状態も異なるなど、他の住居跡に比して異質な印象である。

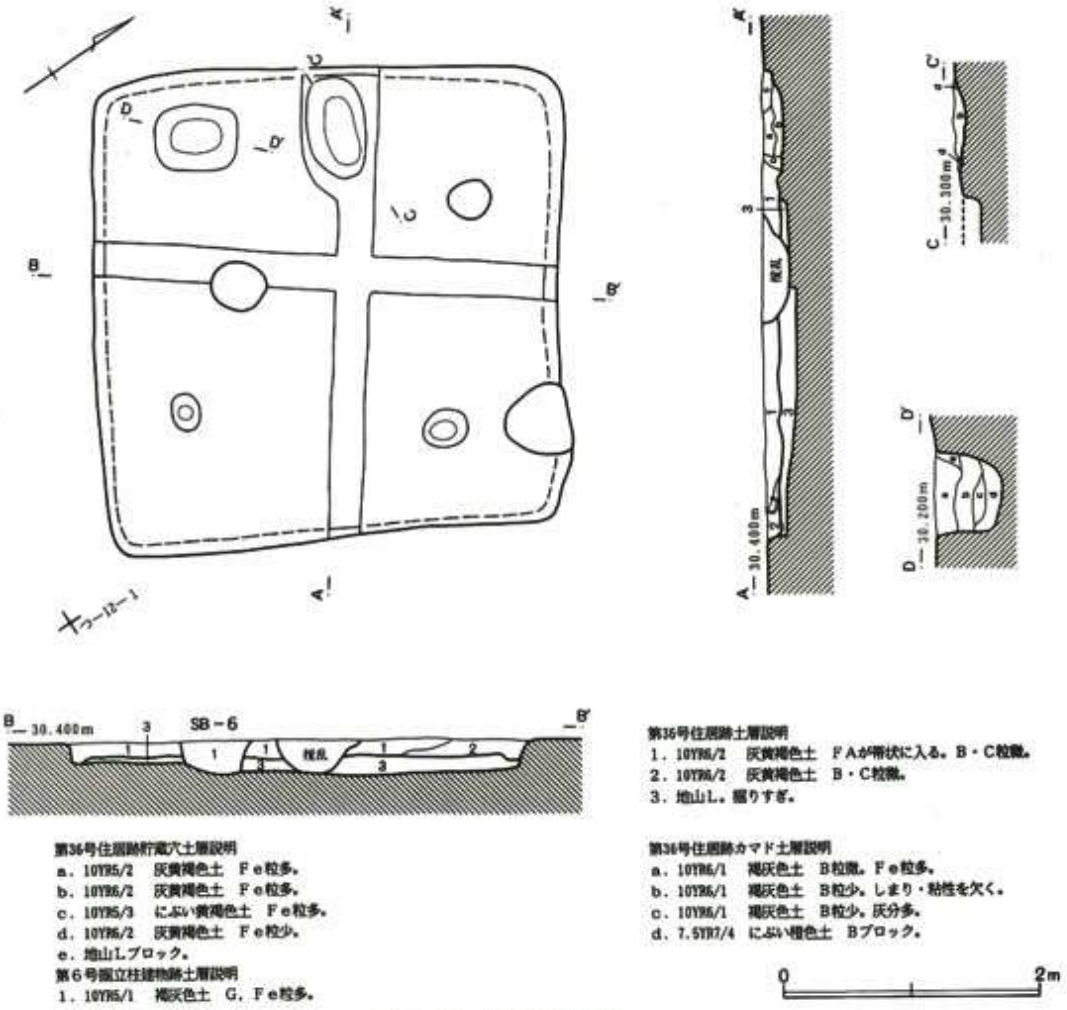
遺物は住居跡中央の床面直上より、甑(1)や鉢(2)、坏(5～7)が出土している。



第190図　第35号住居跡出土遺物

第35号住居跡出土遺物(第190図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甑	24.6 × 12.1 ×孔4.4	ほぼ完形	W＋W′＋B′多	橙	
2	鉢	(20.6)×(11.3)× —	破片	W＋W′＋B′多	にぶい橙	
3	坏	12.6 × 4.4 × —	90%	W′多＋R＋B′	明赤褐	磨耗著しい
4	〃	11.6 × 4.2 × —	ほぼ完形	W少＋W′＋B′多	橙	
5	〃	11.0 × 4.5 × —	ほぼ完形	W′＋B′	〃	
6	〃	11.8 × 4.7 × —	完形	W少＋W′＋B′	にぶい橙	磨耗著しい
7	〃	15.0 × 5.0 × —	95%	細(W少＋W′＋B′)	橙	歪みが強い
8	〃	12.9 × 4.8 × —	80%	W′＋B′	〃	
9	〃	13.0 ×(4.4)× —	80%	細(W′＋B′多)	〃	



第191図　第36号住居跡

第36号住居跡(第191図)

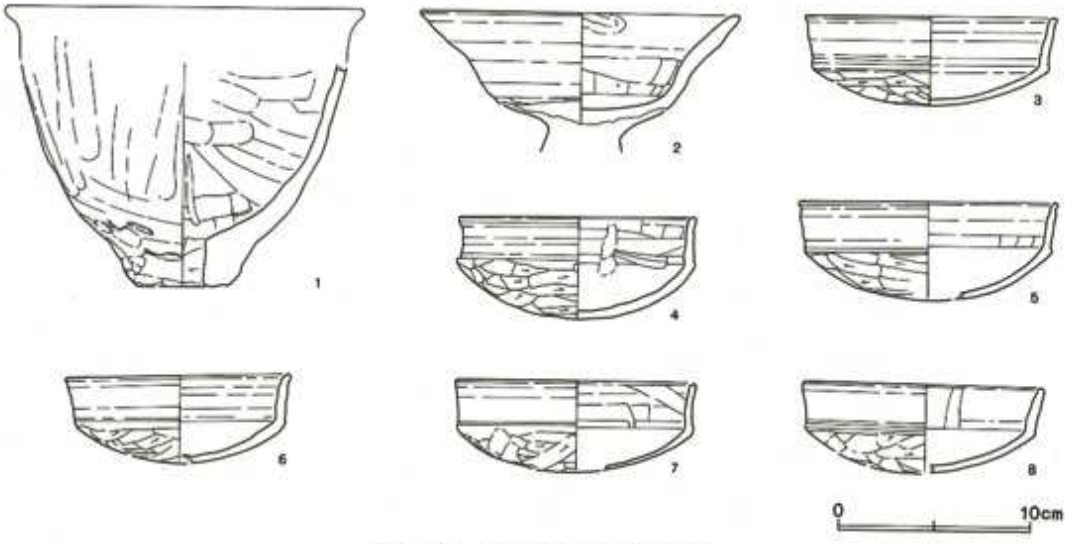
つ—12—2グリッドを中心に位置する。床と壁の一部を第6号掘立柱建物跡に切られる。全体は軸長3.7mほどの方形をなし、面積は約13.7m²を測る。主軸方向はおよそN—58°—Wを指す。

覆土は自然堆積を示し、1層中にはFAの薄層が挟まれている。確認面からの深さは約12cmである。床面とカマドの袖は、担当調査員の不注意で掘り抜いてしまった。ただ、断面で見る限り床はほぼ平坦となり、壁下には壁溝が巡るようである。このほか、床には2個の小穴が見られる。ともに浅い窪みで、柱穴とは思われない。

カマドも火床面のみの検出となってしまい、袖の状態は示すことができない。位置的には北西壁の中央部に設けられ、火床面は床面より6cmほど深くなっている。

貯蔵穴は住居跡の西隅部、カマドの左脇に検出された。現状では65cm×52cmの長方形で、深さは52cmほどとなっている。平坦な底面からの壁の立ち上がりは急で、横断面は箱形を呈している。

遺物はいずれも覆土中から出土している。



第192図　第36号住居跡出土遺物

第36号住居跡出土遺物(第192図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甑	—　×(12.2)×孔3.2	胴部片～底部	W+R多+B′	橙	
2	高坏	16.8 ×(5.9)× —	坏部70%	細(W少+W′+B′)+R多	〃	
3	坏	13.0 × 4.8 × —	50%	W+W′+R+B′	明赤褐	
4	〃	12.4 × 5.3 × —	80%	W+W′+R多+B′	橙	
5	〃	13.2 ×(5.0)× —	40%	W多+R+B′	〃	
6	〃	11.6 × 4.6 × —	70%	W′+粗R多+B′	明赤褐	
7	〃	12.1～12.6 ×(4.9)× —	95%	粗(W+W′+B)+粗R多	橙	
8	〃	12.6 × 4.7 × —	70%	W+W′+R	〃	

第37号住居跡(第193図)

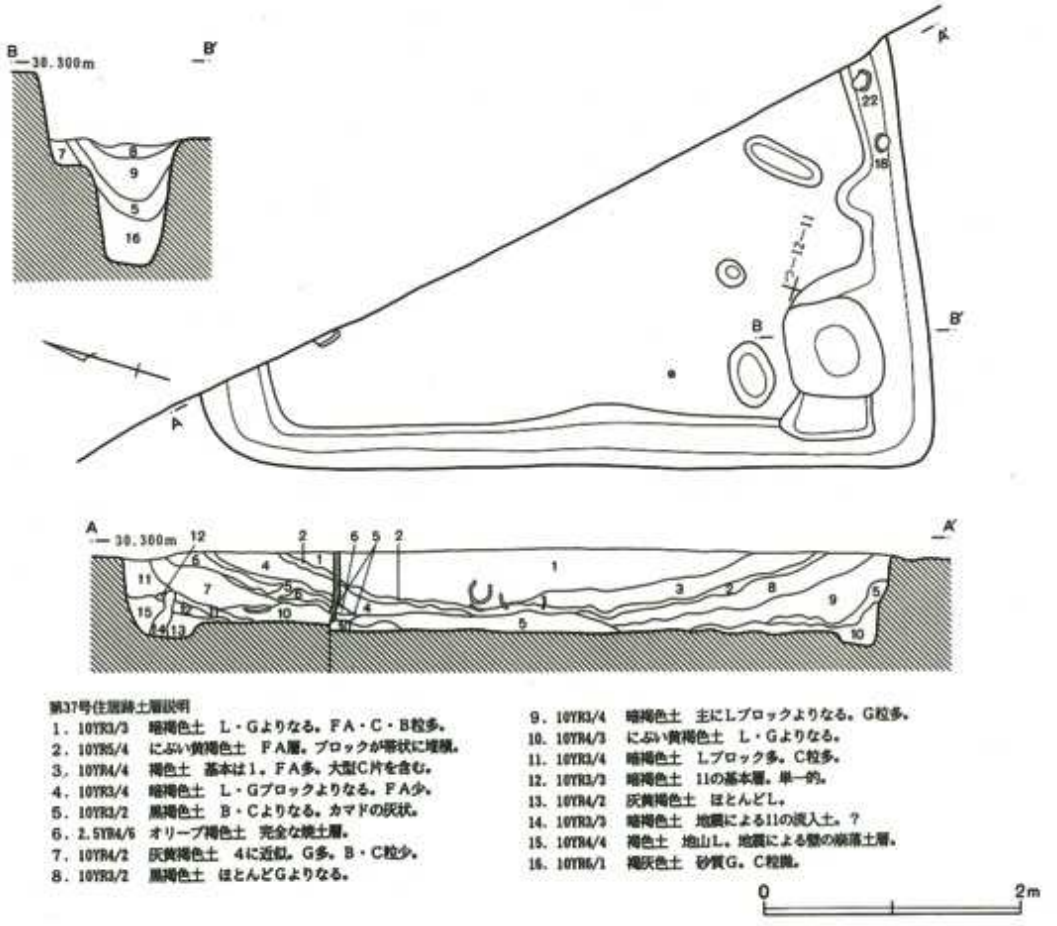
つ—12—11グリッドを中心に位置する。北東部は調査区外となるため、検出されたのは全体の半分以下である。南西壁の長さは5.68mを測り、平面は平行四辺形ぎみの(長)方形になるものと思われる。

覆土はきれいな自然堆積を示している。このうち2はFAの二次堆積層、5がカマドの灰状層、6が焼土層である。遺構確認面から床までは約60cmの深さを有する。床面は軟質で、地震による段差が生じている。

壁溝は調査部分では全周しており、幅は30cm～40cmと広く、深さは10cmで一定している。南東の壁溝中より坏(18・22)が出土している。

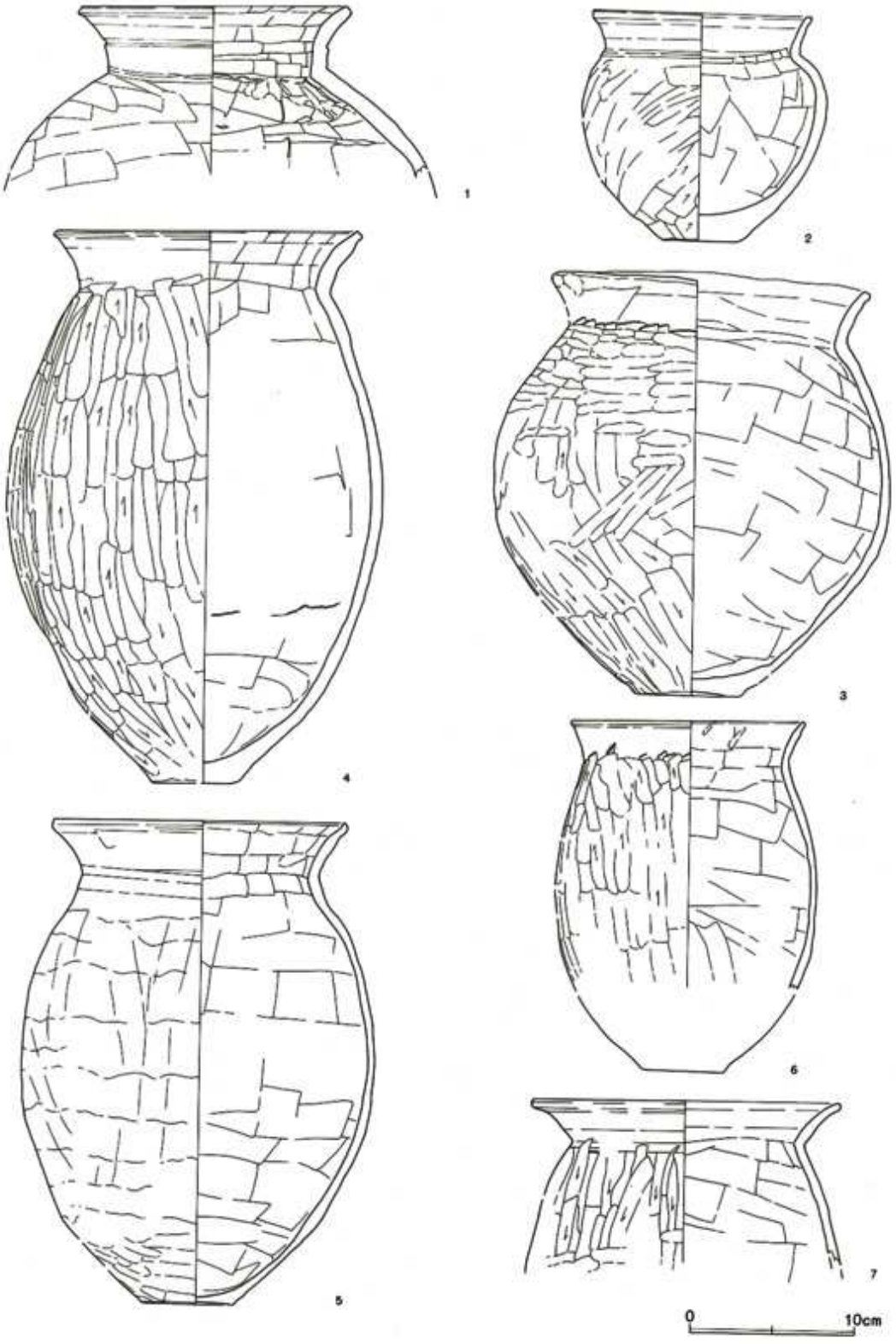
カマドは調査区内では検出されなかった。貯蔵穴の位置から見れば、北側東西壁のいずれかに存在するものと考えられる。

遺物は出水による調査区壁の崩落に伴い、覆土中にあったものが多く転落出土している。確実なところは判明しないが、大半のものはFA層よりも上位に属するようである。

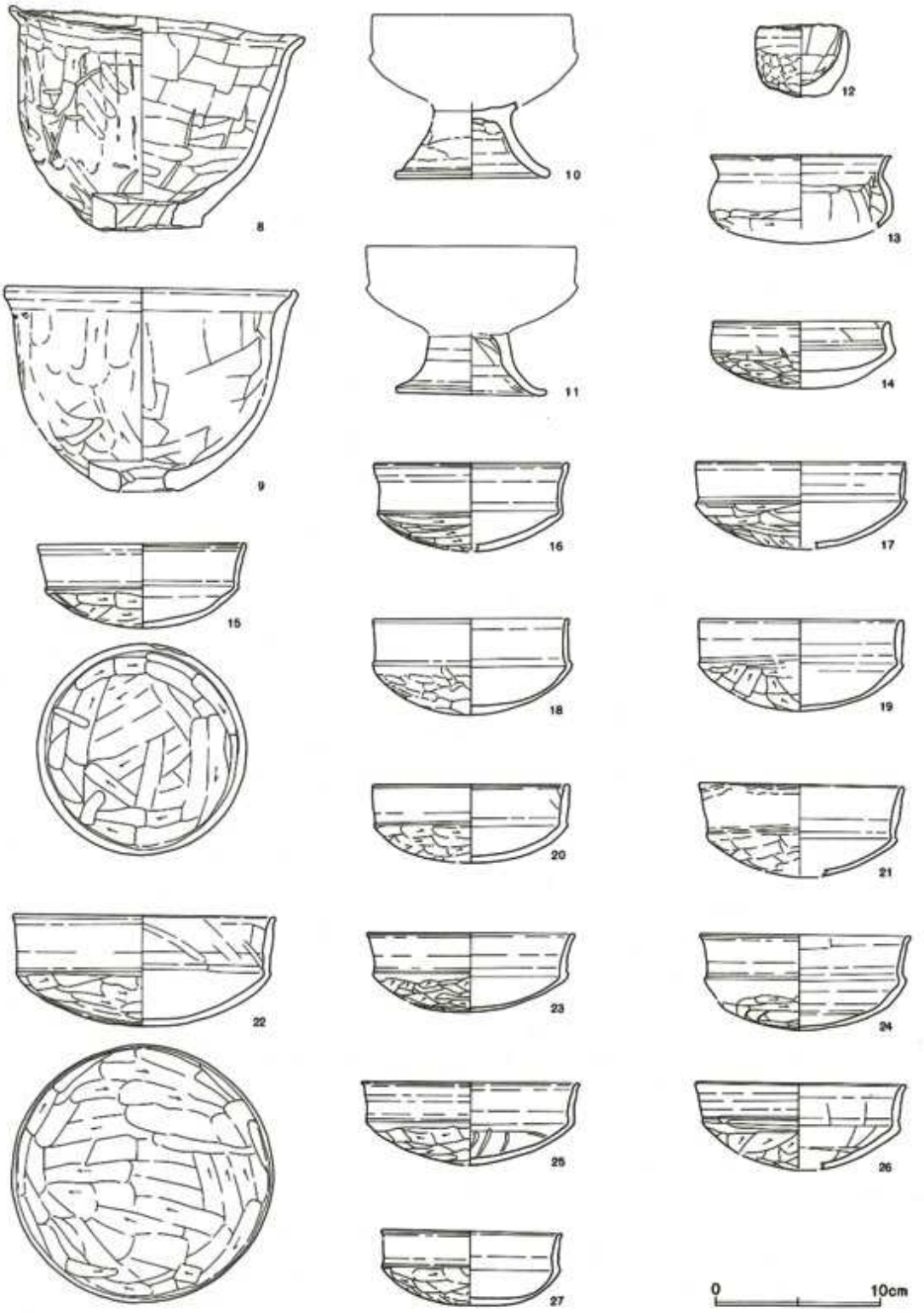


第37号住居跡土層説明
1. 10YR3/3　暗褐色土　L・Gよりなる。FA・C・B粒多。
2. 10YR5/4　にぶい黄褐色土　FA層。ブロックが帯状に堆積。
3. 10YR4/4　褐色土　基本は1。FA多。大型C片を含む。
4. 10YR3/4　暗褐色土　L・Gブロックよりなる。FA少。
5. 10YR3/2　黒褐色土　B・Cよりなる。カマドの灰状。
6. 2.5YR4/6　オリーブ褐色土　完全な焼土層。
7. 10YR4/2　灰黄褐色土　4に近似。G多。B・C粒少。
8. 10YR3/2　黒褐色土　ほとんどGよりなる。
9. 10YR3/4　暗褐色土　主にLブロックよりなる。G粒多。
10. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　L・Gよりなる。
11. 10YR3/4　暗褐色土　Lブロック多。C粒多。
12. 10YR3/3　暗褐色土　11の基本層。単一的。
13. 10YR4/2　灰黄褐色土　ほとんどL。
14. 10YR3/3　暗褐色土　地震による11の流入土。?
15. 10YR4/4　褐色土　地山L。地震による壁の崩落土層。
16. 10YR6/1　褐灰色土　砂質G。C粒微。

第193図　第37号住居跡



第194図　第37号住居跡出土遺物(1)



第195図　第37号住居跡出土遺物(2)

第37号住居跡出土遺物(第194・195図)

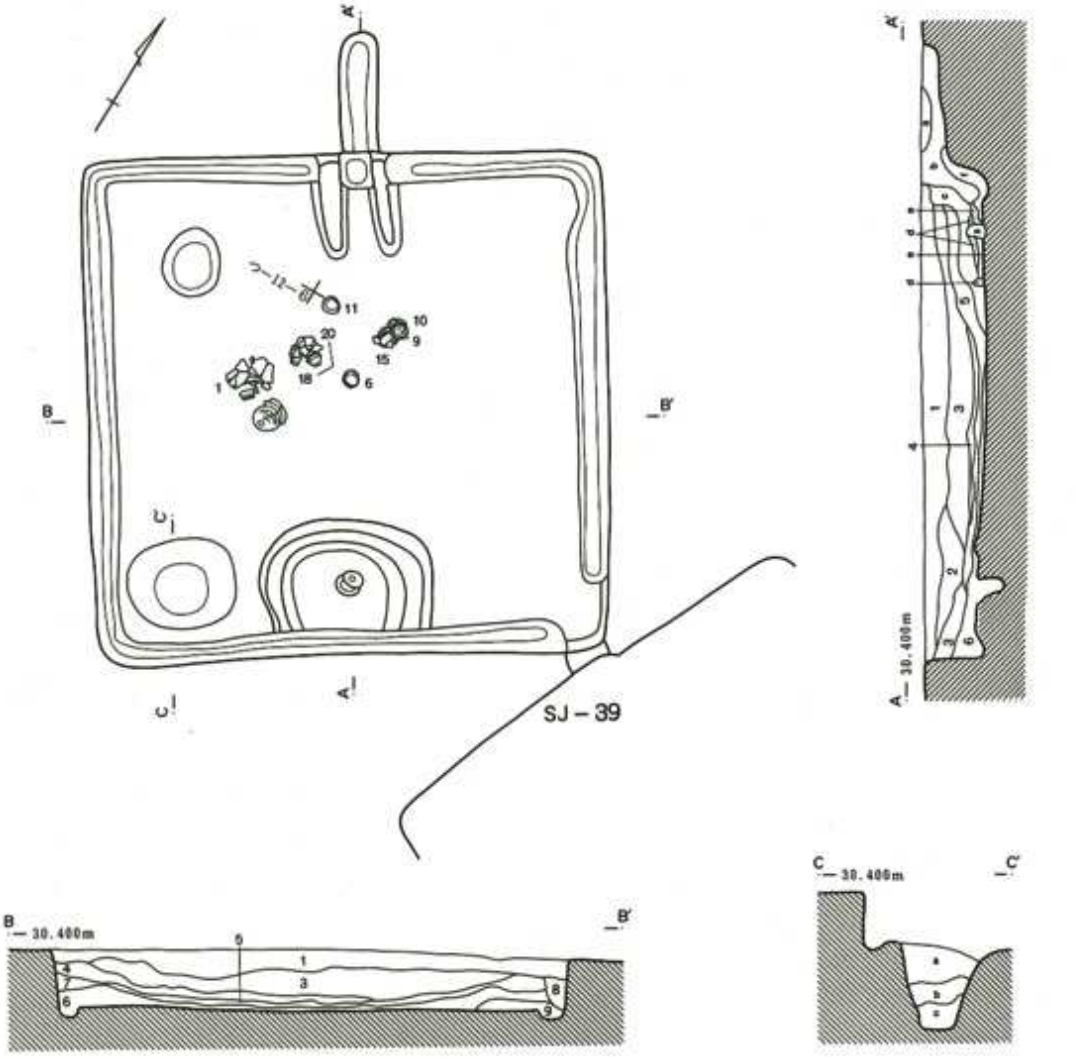
No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	15.8～16.6×(10.2)× —	口縁～肩部	W+W′+B′	にぶい黄橙	
2	小型壺	13.4 × 14.0 × 5.0	80%	細(W多+W′+B′)+R	橙	
3	甕	19.4 × 25.3 × 6.6	90%	粗砂(W多+B)+(W′+R)	にぶい黄橙	
4	〃	18.8～19.4× 33.2 × 3.9	85%	粗(W+W′)+R少	〃	
5	〃	18.0 × 29.2 × 5.4	70%	粗砂(W+B)+W′+B′	にぶい橙	
6	〃	(14.2)×(17.0)× —	口縁～胴部片	細(W+W′+B′)	にぶい黄橙	磨耗著しい
7	〃	(18.9)×(10.9)× —	口縁～胴上半部	粗礫(W+W′+B)+B′	橙	
8	甑	18.4 × 13.2 ×底6.0～7.2 孔3.2	ほぼ完形	W+W′+B+B′	〃	
9	〃	18.2 × 12.2 ×孔2.6	80%	細(W+W′+B′)	〃	
10	高坏	— ×(4.6)×(裾9.6)	脚部50%	W+W′+B′	〃	
11	〃	— ×(4.0)×裾9.3	脚部100%	W+W′+B微	〃	
12	手捏ね	5.2 × 4.1 × —	完形	W′多+B′	〃	
13	甕	(11.0)×(4.4)× —	20%	W+R+B′	〃	
14	坏	10.8 × 4.1 × —	80%	細(W+W′)少+B′	〃	
15	〃	12.8 × 5.2 × —	ほぼ完形	W+W′+R	〃	磨耗著しい
16	〃	(12.0)× 5.5 × —	65%	細B′+R	〃	
17	〃	(12.8)×(5.2)× —	50%	細(W+B′多)+R少	〃	
18	〃	12.0 × 5.8 × —	完形	W+W′+R少	〃	磨耗著しい
19	〃	(12.6)× 5.7 × —	40%	W′少+粗R+B′	〃	
20	〃	(12.0)×(4.7)× —	50%	W+W′	〃	磨耗著しい
21	〃	12.4 ×(5.6)× —	75%	W+W′+R	明赤褐	〃
22	〃	15.8 × 6.7 × —	完形	W+W′+R多	橙	〃
23	〃	(13.0)× 4.9 × —	40%	細W+W′+B′	〃	
24	〃	(13.4)× 5.8 × —	55%	細(W+W′)少+B′	〃	
25	〃	(13.4)×(5.2)× —	30%	細W+W′+B′	〃	
26	〃	12.8 ×(5.4)× —	70%	粗(W+B)多+W′	〃	
27	〃	11.1 × 4.8 × —	60%	W多+W′少+B′	〃	磨耗著しい

第38号住居跡(第196図)

つ—11—10グリッドを中心に位置する。本跡の埋没後、東隅を第39号住居跡のカマド煙道が切り込んでいる。全体は整った方形を呈し、規模は軸長3.86m×4.06m、面積約15.7㎡を測る。主軸の方向はおよそN—31°—Wを指す。

覆土は主に地山の粘質土で構成される。遺構確認面から床までの深さは約50cmである。床面は比較的硬質で、中央部がわずかに窪んでいる。

壁の立ち上がりはほとんど垂直となり、東隅部を除き、直下には壁溝がきれいに巡る。幅約20cm、深さ8cmほどで一定している。



第38号住居跡カマド土層説明

a．10YR7/2　にぶい黄橙色土　主にLからなる。Bブロック少。
b．10YR6/2　灰黄褐色土　L・Bブロック微。
c．10YR6/2　灰黄褐色土　Lブロック少。
d．10YR6/1　褐灰色土　Bブロック多。天井・壁崩落土層。
e．N4／　灰色土　Bブロック・骨片多。
f．10YR5/3　にぶい黄褐色土　Bブロック・灰多。

第38号住居跡貯蔵穴土層説明（C－C'）

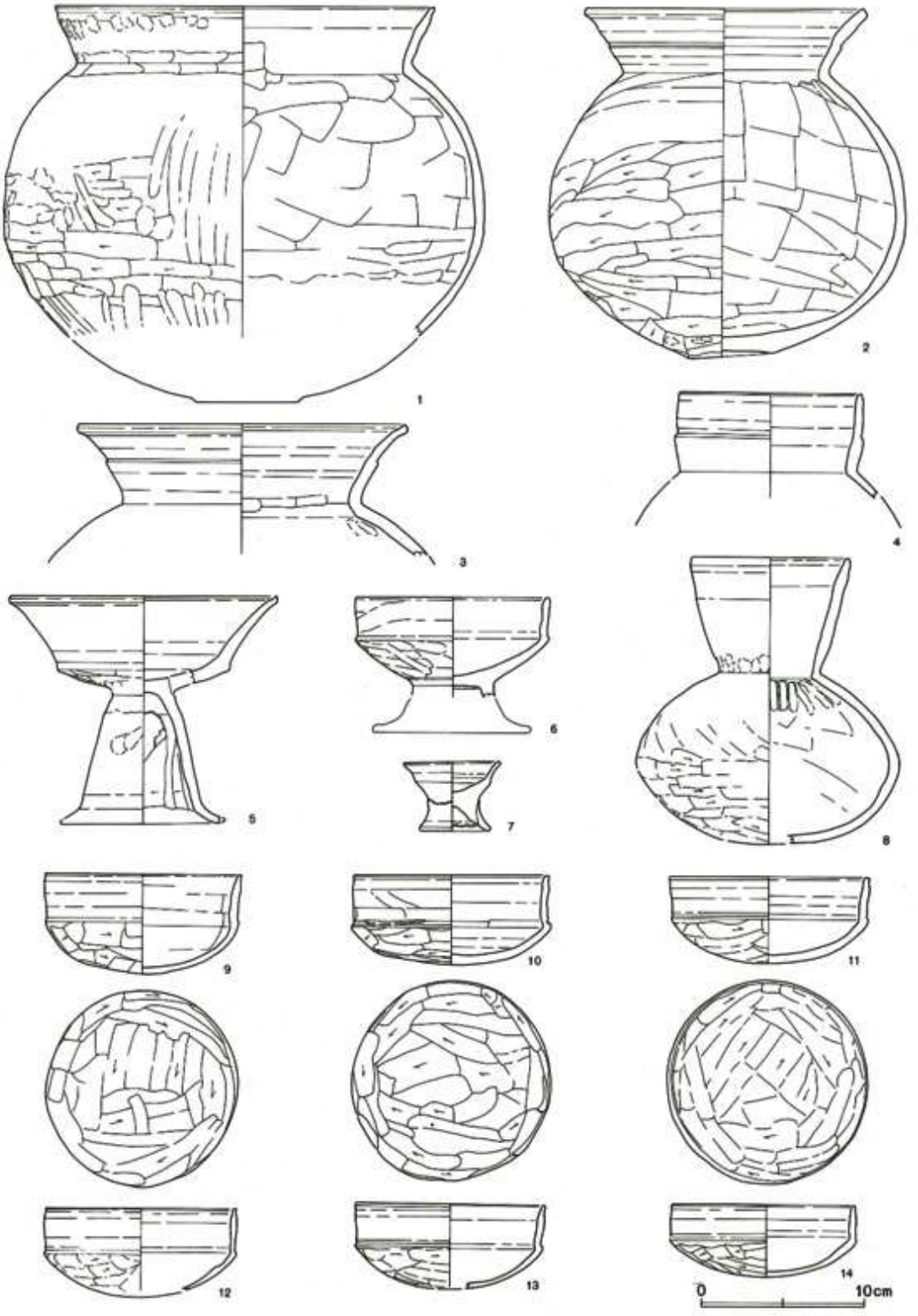
a．10YR5/2　灰黄褐色土　B粒微。Fe粒多。
b．10YR5/2　灰黄褐色土　Fe粒少。
c．10YR5/1　褐灰色土　Fe粒少。粘質土。

第38号住居跡土層説明

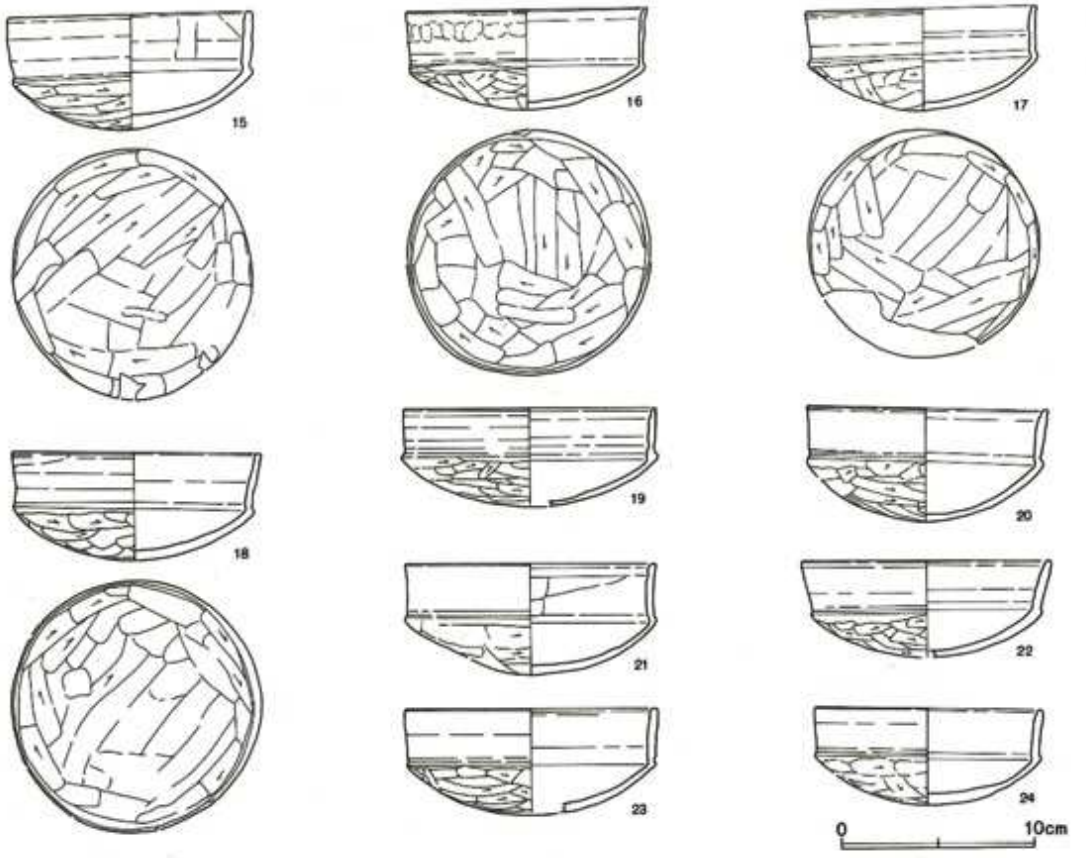
1．10YR6/2　灰黄褐色土　Lブロック・C粒多。
2．10YR6/2　灰黄褐色土　Lブロック多。Bブロック微。
3．10YR6/2　灰黄褐色土　Bブロック微。
4．10YR6/1　褐灰色土　Lブロック少。
5．10YR6/1　褐灰色土　Lブロック少。Bブロック・C粒少。
6．10YR6/1　褐灰色土　L・Bブロック微。
7．10YR6/2　灰黄褐色土　Fe粒微。
8．2.5Y6/2　灰黄色土　L・C粒多。
9．10YR6/2　灰黄褐色土　Fe粒微。

0　2m

第196図　第38号住居跡



第197図　第38号住居跡出土遺物(1)



第198図　第38号住居跡出土遺物(2)

カマドは北西壁の中央に付設される。袖は壁の中位より垂直に延び、焚き口部へ向かって次第に低くなる。燃焼面はほぼ直立し、赤くバリバリに焼けている。燃焼部の幅は約30cmと狭く、奥行きは約80cmと細長い。火床面はほぼ床面と同じ高さで、壁際のみが壁溝の続きのようになっている。このことから見れば、袖は削出されたものではなく、地山の粘質土によって構築されたものかもしれない。

貯蔵穴は南隅に構えられる。平面は径84cm×70cmの楕円形を呈し、深さ65cmを測る断面形は漏斗状となっている。底面は平坦となり、覆土下層は粘土化している。なお、カマドの左側に図示した円形の穴は、底面が軟質なごく浅い窪みで、貯蔵穴や柱穴などの施設とは異なる。

このほか、南東壁の中央部には半円状の突堤が検出されている。突堤は幅25cm～36cm、高さ5cm弱に削り出されたもので、中心部には斜行する小穴が穿たれている。こうした突堤は本跡以外でも、第26・40号住居跡において確認されている。出入口にかかわるものであろう。

遺物は床面中央部に集中し、壺(1・2)や高坏(6)、坏(9・10・11・15・18・20)が出土している。

第39号住居跡(第199図)

つ―11―5グリッドを中心に位置する。本跡はカマドの煙道で第38号住居跡の壁を切り、南東壁で第40号住居跡のカマド煙道を切断する。軸長3.8m×3.97mの方形を呈し、面積約15.1m²を測る。主軸方向はおよそN―65°―Wを指す。

第38号住居跡出土遺物(第197・198図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	壺	(23.4)×(20.1)× —	40%	細(W+W′+B′)+R	橙	
2	〃	17.0 × 21.2 × 5.0	ほぼ完形	W+W′+R多+B′	〃	
3	〃	(20.8)×(8.3)× —	口縁～頸部70%	W′少+粗R多+B′	〃	
4	〃	11.4～12.1×(6.3)× —	口縁～頸部	W+W′+R+B′	〃	
5	高坏	(16.6)×(5.4)× —	坏30%	W+W′多+R+B′少	〃	
6	〃	12.0 ×(6.2)× —	坏95%	W+W′+粗R+B′少	〃	磨耗著しい
7	ミニチュア高坏	6.0 × 4.3 × 4.3	70%	細W+W′少+B′	〃	
8	坩	9.6 × 17.5 × —	80%	細(W+W′)+R	明赤褐	
9	坏	12.2 × 6.0 × —	ほぼ完形	W少+R+B′	橙	
10	〃	12.1 × 5.4 × —	完形	細(W微+W′+B′多)+R	〃	
11	〃	12.4 × 5.3 × —	〃	W多+W′+R少+B′	〃	磨耗著しい
12	〃	(11.8)×(5.0)× —	30%	W′多+R+B′少	〃	磨耗著しく歪み強い
13	〃	11.8 ×(5.2)× —	80%	細(W+W′+B′微)+R	〃	
14	〃	(11.0)× 4.5 × —	50%	W′+粗R+B′	〃	
15	〃	12.9 × 5.9 × —	90%	(W+W′+B′)少	〃	
16	〃	12.6 × 5.1 × —	80%	W微+W′+粗R多+B′多	〃	
17	〃	12.1 × 5.3 × —	80%	W+W′少+R+B′	〃	磨耗
18	〃	13.0 × 5.5 × —	95%	W+W′+R多+B′多	〃	磨耗著しい
19	〃	(13.2)×(5.0)× —	30%	細(W′+B′多)+R少	〃	
20	〃	20.6 × 5.8 × —	70%	W少+W′+B′	〃	
21	〃	(13.0)× 5.7 × —	50%	W′+R+B′	〃	磨耗著しい
22	〃	(13.0)×(5.1)× —	25%	W′+R多+B′	〃	
23	〃	(13.2)×(5.4)× —	30%	細(W′+B′)	〃	
24	〃	(12.0)× 5.1 × —	60%	W微+W′+粗R多+B′	〃	磨耗著しい

覆土は自然堆積を示しながらも、他の住居跡に比べればかなり特徴的である。1層は目の細かいサラサラの粉末状で、火山灰(FAとは異なる)と思われる。2・3層は滞水中に形成されたものらしく、非常に緻密な粘土質で、下層との境は鉄分沈着のためにバリバリとなっている。また、4層はブロック状にFAを多量に含んでいる。

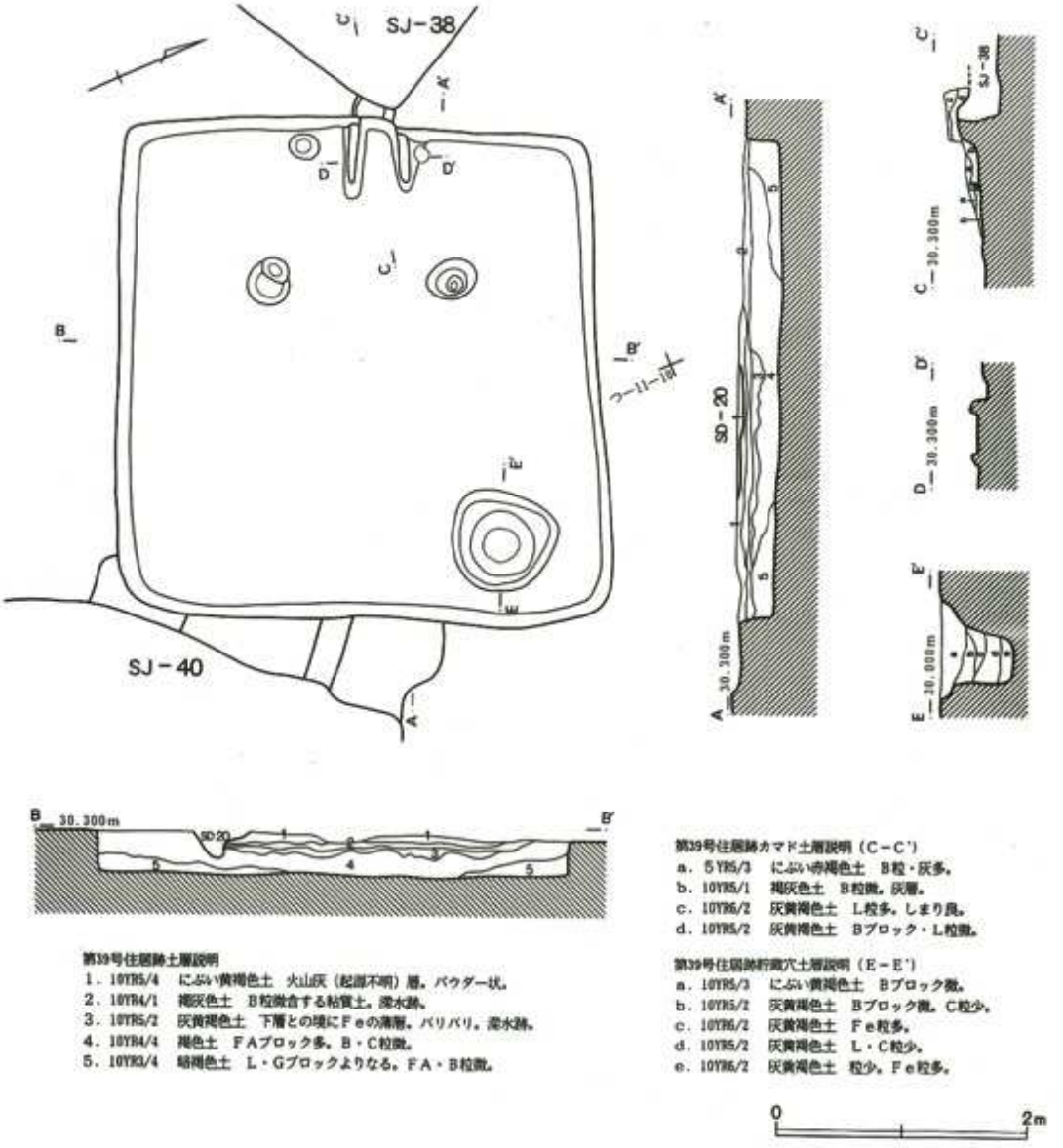
壁はほぼ垂直を保っており、床から確認面までは約35cmの高さを有する。床面は硬質となり、貯蔵穴周辺が盛り上がるように高まっている。

カマドは北西壁の中央、わずかに北へ寄っている。袖は「ハ」字状に削出されるが、かなり細く低いものである。火床面は焚き口部分でよく焼けている。床面とは同じ高さであり、次第に立ち上がって行く。その中央部には、焼土化した地山からなる支脚(土層図で無記名の部分)が造り付けられている。煙道の先端は第38号住居跡調査中に除去してしまい、全容は把握できなかった。検出範囲での幅は約30cmである。

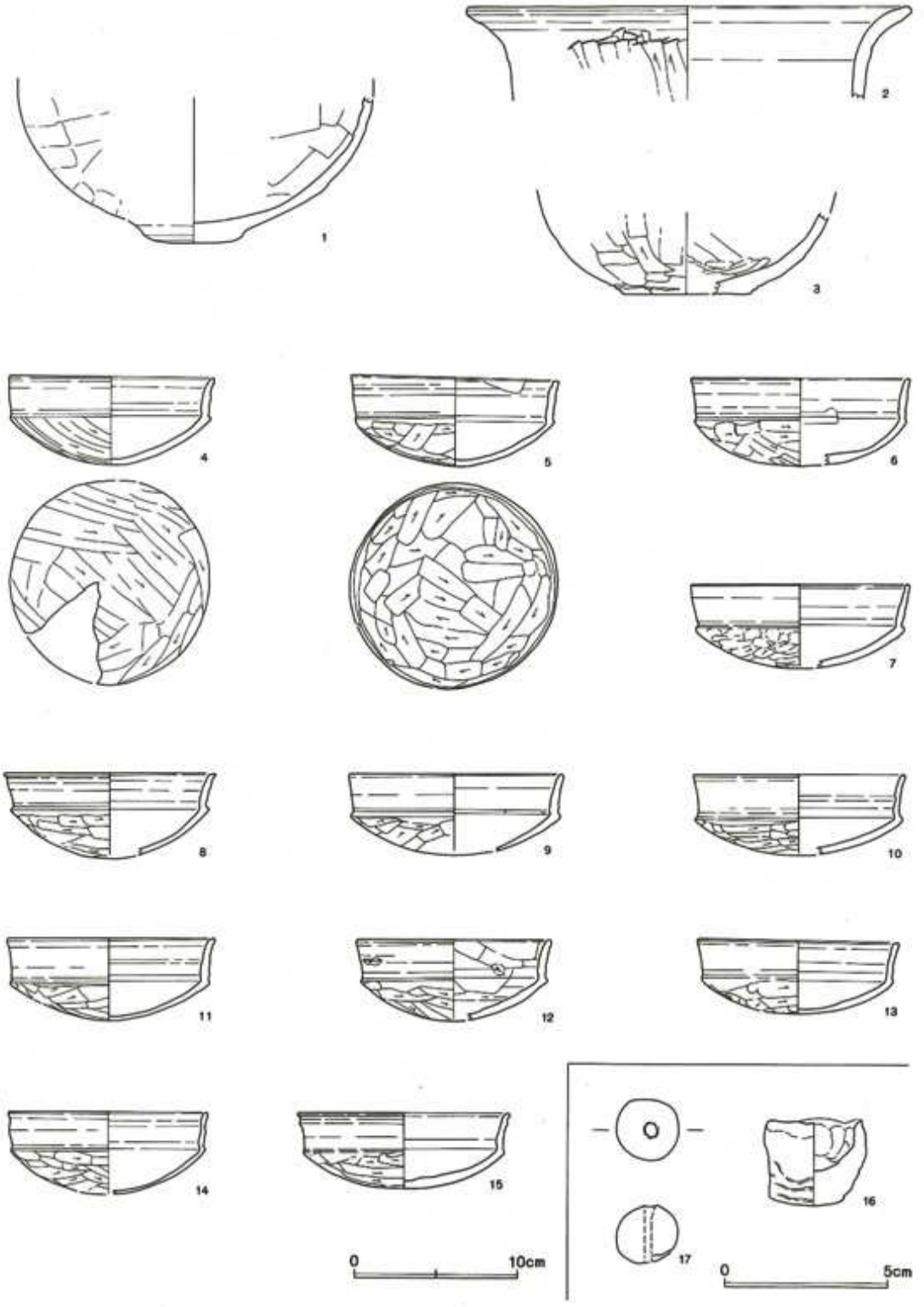
貯蔵穴は東隅部に設けられ、上面で直径85cmほどの円形を呈する。深さ約10cmで段がつき、内部は径55cm×50cmとなる。断面は筒状となり、平坦な底面までは約55cmである。

柱穴は主柱穴と思われるものが２本検出された。両者はカマド寄りの壁に平行し、南の柱穴は直径36cmの深さ26cm、北の柱穴は直径約32cmの深さ28cmを測る。ともに明確な柱痕は観察されなかった。これとは別に、カマドの左脇では直径約20cm、深さ９cmの小穴が確認された。カマドに付随するものなのであろうか。

遺物はすべて覆土下層からの出土で、土玉と手捏ねを含む。



第199図　第39号住居跡



第200図　第39号住居跡出土遺物

第39号住居跡出土遺物(第200図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	—　×(8.9)×5.7	底部	W+W′+粗R多+B′	明赤褐	
2	甕	(26.2)×(5.6)×　—	口縁片	W′+R+B′	橙	3と同一個体
3	〃	—　×(5.0)×(7.6)	底部片	W′+R+B′	〃	2と同一個体
4	坏	12.6×5.3×　—	90%	粗(W+W′+B+B′)+R	〃	
5	〃	12.6×5.4×　—	95%	W微+W′+R+B′多	〃	
6	〃	(13.4)×(5.2)×　—	50%	W′+R+B′	〃	
7	〃	(13.4)×(5.1)×　—	40%	W+粗R+B′	〃	
8	〃	(13.0)×(5.1)×　—	25%	細(W多+W′+B′)	〃	
9	〃	(13.4)×(4.7)×　—	25%	細(W+W′+B′)	〃	
10	〃	(13.0)×(4.6)×　—	40%	細(W+W′+B′)	明赤褐	
11	〃	12.8×5.0×　—	70%	細(W+W′)+粗R+B′多	橙	
12	〃	(12.0)×(4.9)×　—	40%	W′+R+B′+粗礫	〃	
13	〃	(12.0)×4.8×　—	30%	W′多+R+B′	明赤褐	
14	〃	12.3～12.9×4.9×　—	75%	粗W′多+R多+B′	橙	磨耗
15	〃	(13.0)×(4.5)×　—	25%	細(W+W′+R少+B′多)	〃	
16	手捏ね	2.6×2.6×2.2	完形	W′+B′	〃	

第40号住居跡(第201図)

つ—11—3グリッドを中心に位置する。カマドの煙道を第39号住居跡に切断され、覆土上層には第20号溝が重複している。全体は3.34m×3.76mの長方形を呈し、面積は約12.6m²を測る。主軸方向はおよそN—52°—Wを指す。

覆土は主に地山の粘質土からなる。遺構確認面から床までは約55cmで、壁は南側を中心に地震による崩壊が著しい。壁溝はカマド部と東隅部を除き、幅約20cm、深さ約10cmで壁下を巡る。床面は硬質であるが、やはり地震のため起伏が激しくなっている。

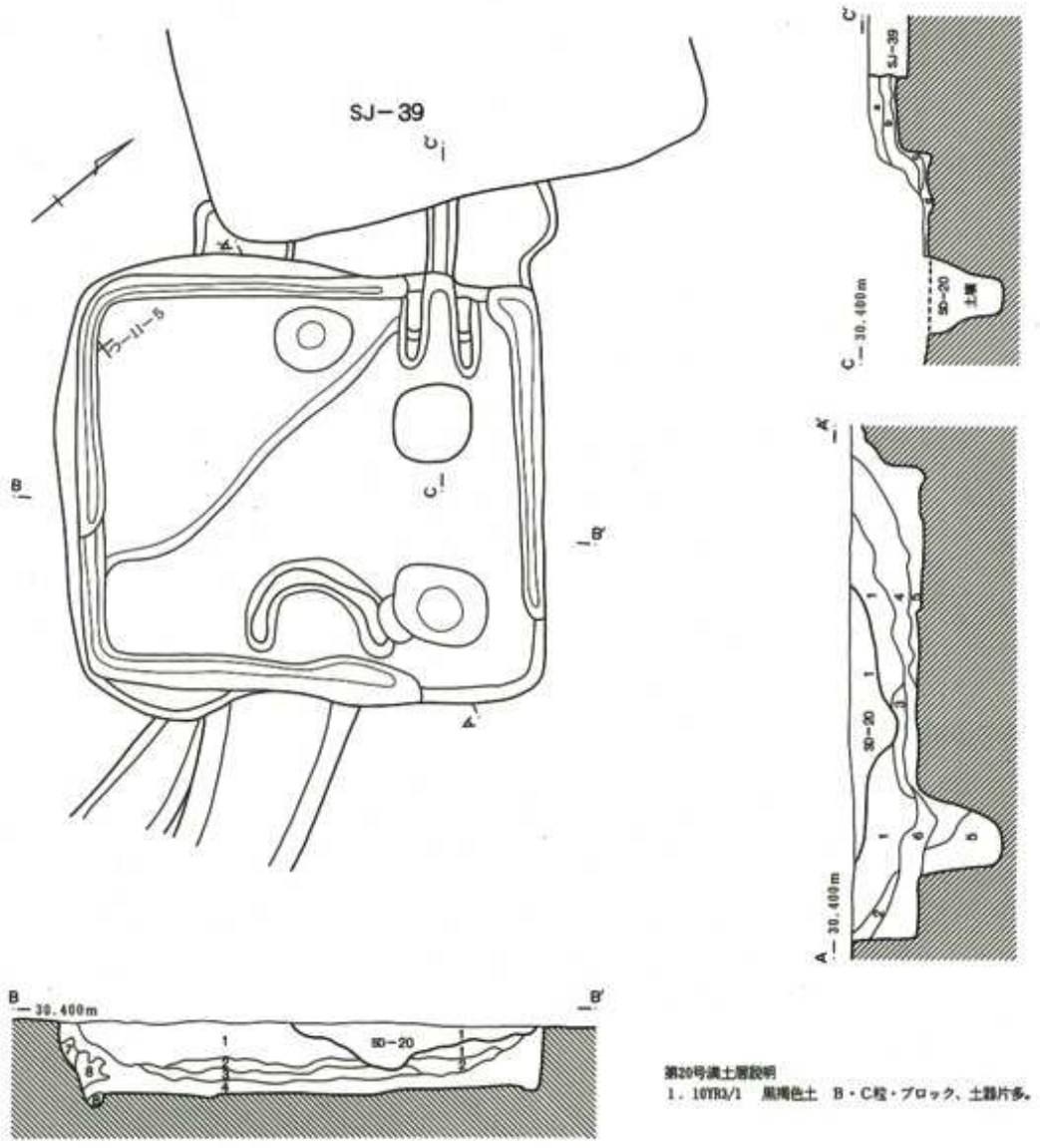
カマドは北西壁でも、ほとんど北隅といってよい位置に設営されている。袖は横から見るとL字形に削出され、横断面は「ハ」字状に内傾している。燃焼部は長さ80cm、幅32cmほどの細長い形になっている。火床面は床面と同一高で、奥壁で垂直に立ち上がる。煙道は火床面より24cm高い部分から壁外に延び、燃焼部から連続するような幅を有している。なお焚き口の前面は、後世の土坑が床を掘り抜いている。

貯蔵穴は東の隅部、カマドとは対位置に穿たれている。平面は隅丸の長方形で、75cm×60cmほどである。床面からの深さは約70cmを測り、底部は丸みが強い。

南東壁の中央部には、幅およそ24cm、高さ4cmほどの突堤が半円状に巡っている。突堤は壁溝までは達しておらず、その中心にも柱穴などは見られない。

突堤の対面、カマド左脇には直径約50cm、深さ27cmの穴が掘られている。規模の差こそあれ、第39号住居跡と同様、カマドにかかわるものではなかろうか。

遺物はすべて覆土中からの出土である。



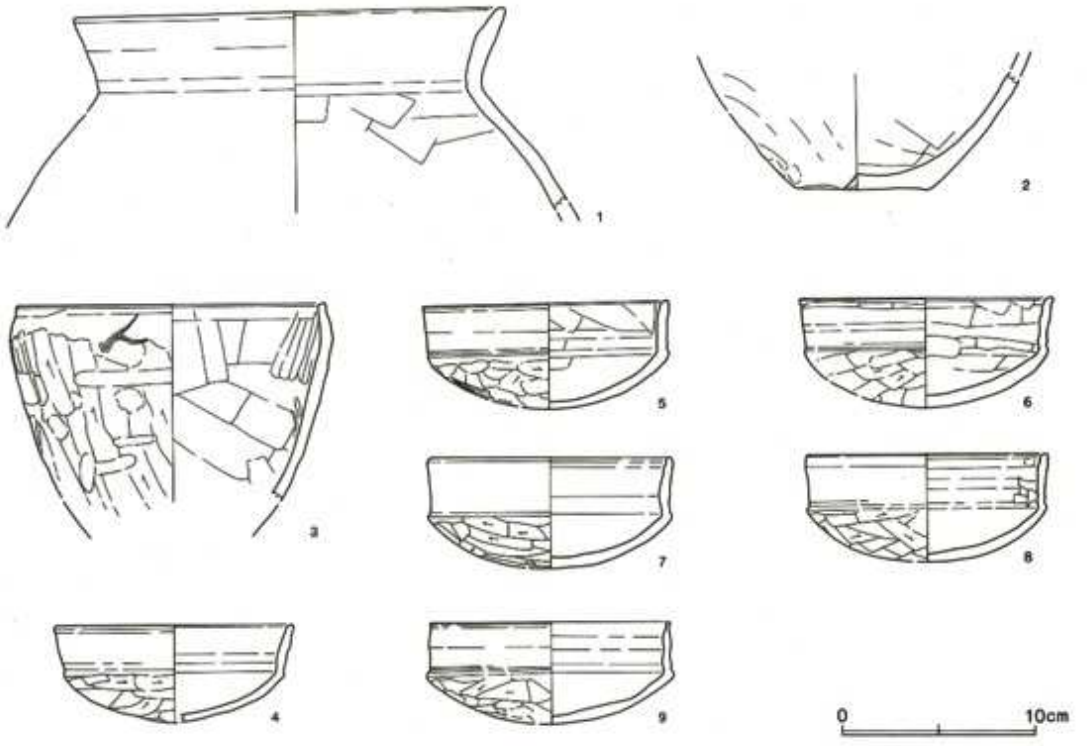
第20号溝土層説明
1．10YR3/1　黒褐色土　B・C粒・ブロック、土器片多。

第40号住居跡土層説明
1．10YR4/4　褐色土　大型Lブロックの溶渡多。
2．10YR3/4　暗褐色土　1の基本層。Lブロックは小型で少量。
3．10YR4/4　褐色土　主に地山Lよりなる。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　Gブロック多。B・C粒少。
5．10YR4/3　にぶい黄褐色土　L粒・Gブロック多。
6．10YR4/2　灰黄褐色土　大型Lブロック多。
7．Lブロック。地震による壁の崩落土塊。
8．Gブロック。地震による壁の崩落土塊。

第40号住居跡カマド土層説明
a．10YR3/3　暗褐色土　被火熱L粒多。B粒微。
b．10YR3/4　暗褐色土　被火熱L粒。B粒・ブロック、C粒多。
c．2.5YR2/3　極暗赤褐色土　Bブロックよりなる。天井・壁部崩落土層。
d．10YR2/1　黒色土　B・C粒と骨片を少量含む灰層。

0　2m

第201図　第40号住居跡



第202図　第40号住居跡出土遺物

第40号住居跡出土遺物(第202図)

No.	器種	法　　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	22.2 ×(12.9)× —	口縁～肩部片	(W+R)多+W′+B′	橙	磨耗著しい
2	甕	— ×(6.1)× 7.0	底部	粗W+W′多+B′	にぶい黄橙	〃
3	甑?	(16.0)×(10.2)× —	口縁片	細W+W′+B′	橙	
4	坏	(12.4)×(5.0)× —	25%	W′+R+B′	にぶい橙	磨耗
5	〃	12.8 × 5.4 × —	90%	W+W′+粗R多+B′	橙	
6	〃	13.0 × 5.5 × —	70%	W+W′+粗R多+B′	〃	
7	〃	(12.6)×(5.6)× —	30%	W+W′+粗R+B′	〃	
8	〃	(13.4)×(5.2)× —	25%	粗R+B′	〃	
9	〃	(12.4)× 5.2 × —	50%	細砂(W′+B′)+R少	にぶい橙	

第41号住居跡(第203図)

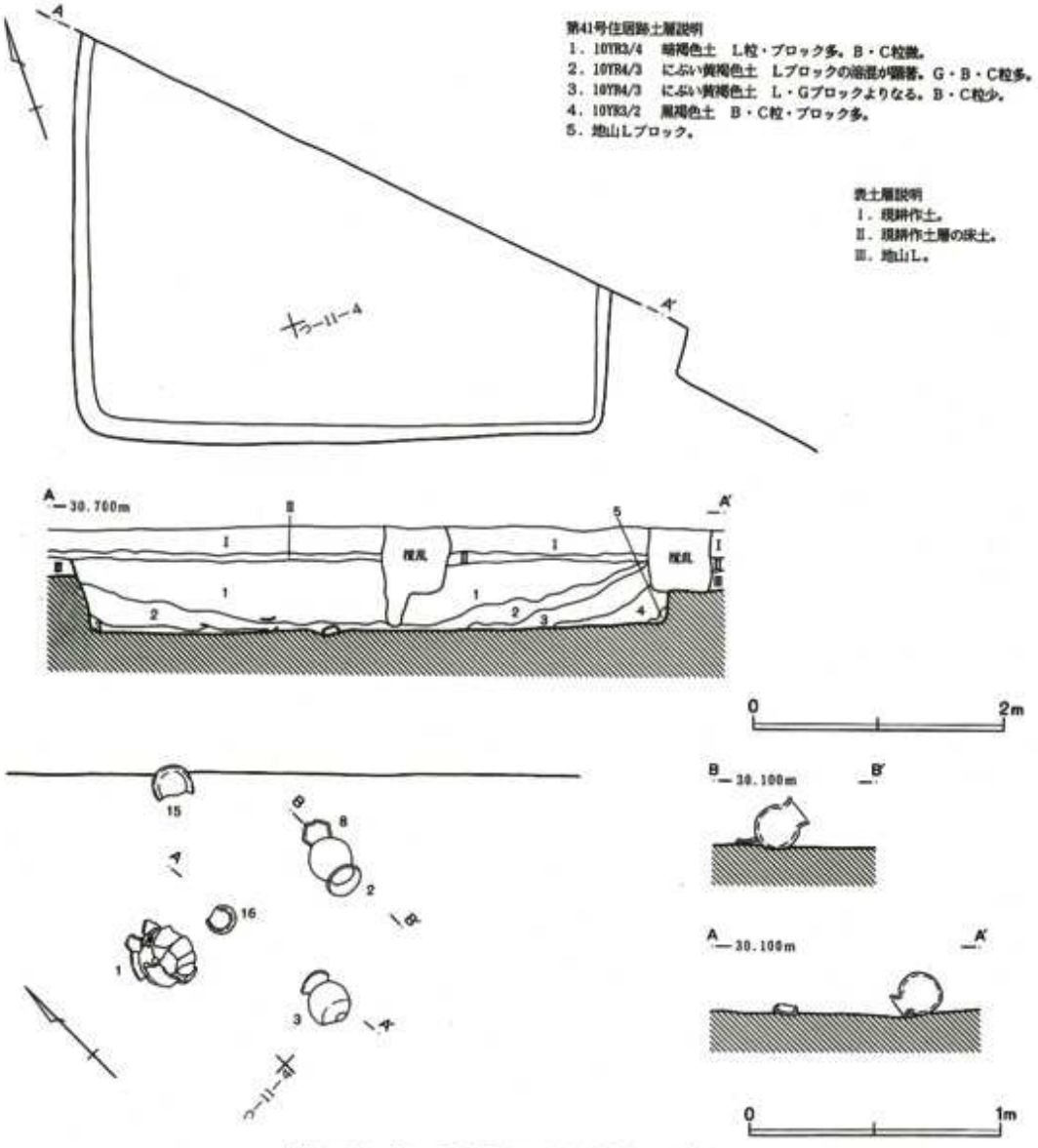
つ—11—3グリッドを中心に位置する。北東部は調査区外となるため、検出されたのは1/2程度である。軸長は4.3m×?で、平面は方形を呈するものと思われる。カマドが北東壁に存在すると仮定すれば、主軸方向はおよそN—21°—Eとなる。

遺構確認面から床までは深さ約60cmである。覆土は地山の粘質土を主体とし、壁の直下には焼土を多量に含む層(4層)が帯状に堆積している。ただし、床や壁は焼けておらず、炭化物などもあまり見られない。

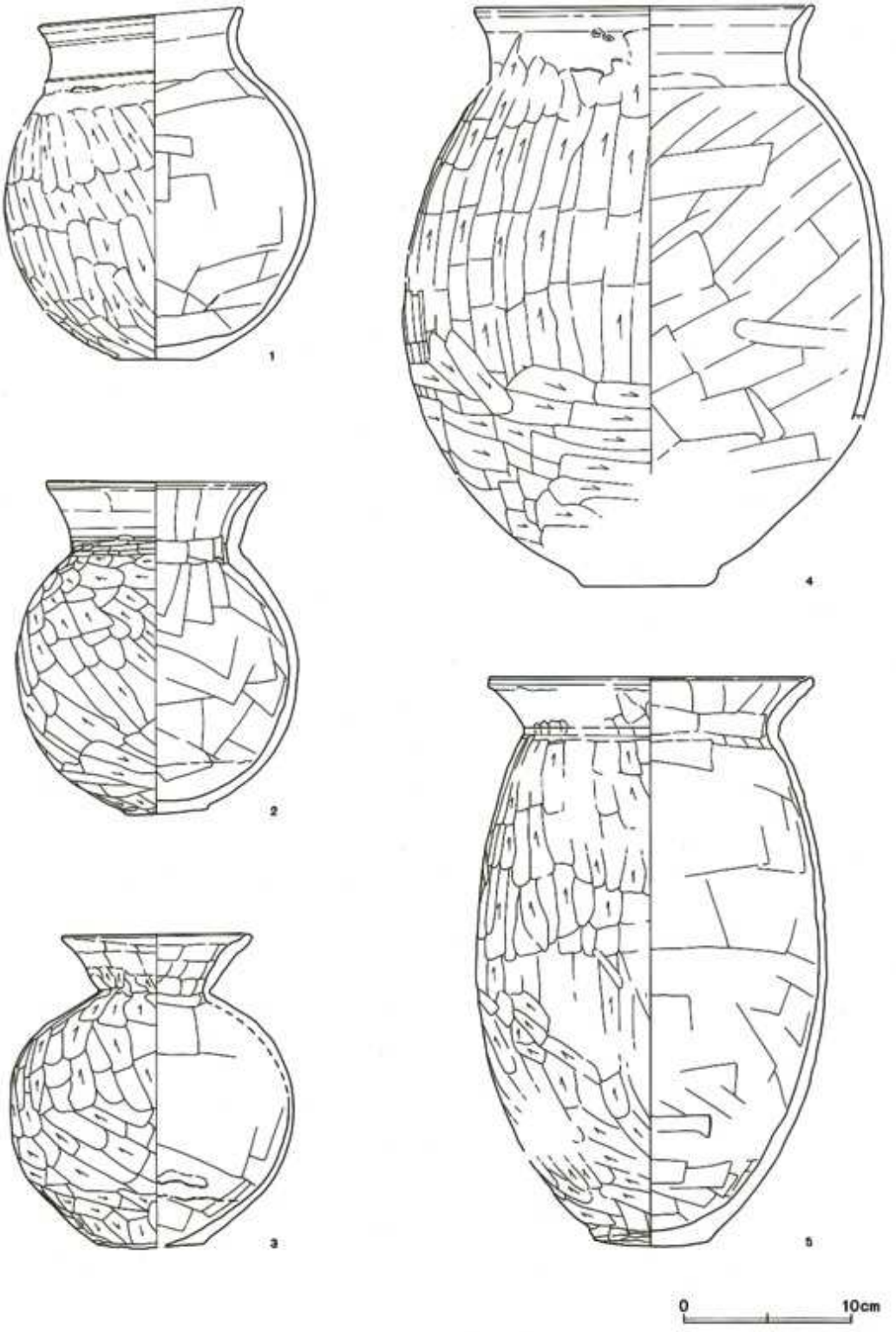
床面は東から西へ向けわずかに傾斜している。覆土との境は明瞭であるが、さほど硬くしまったものではない。

調査範囲においては、カマドや貯蔵穴の検出はなかった。現状や他の住居跡の場合から推して、調査区外の北東壁に設けられていると思われる。

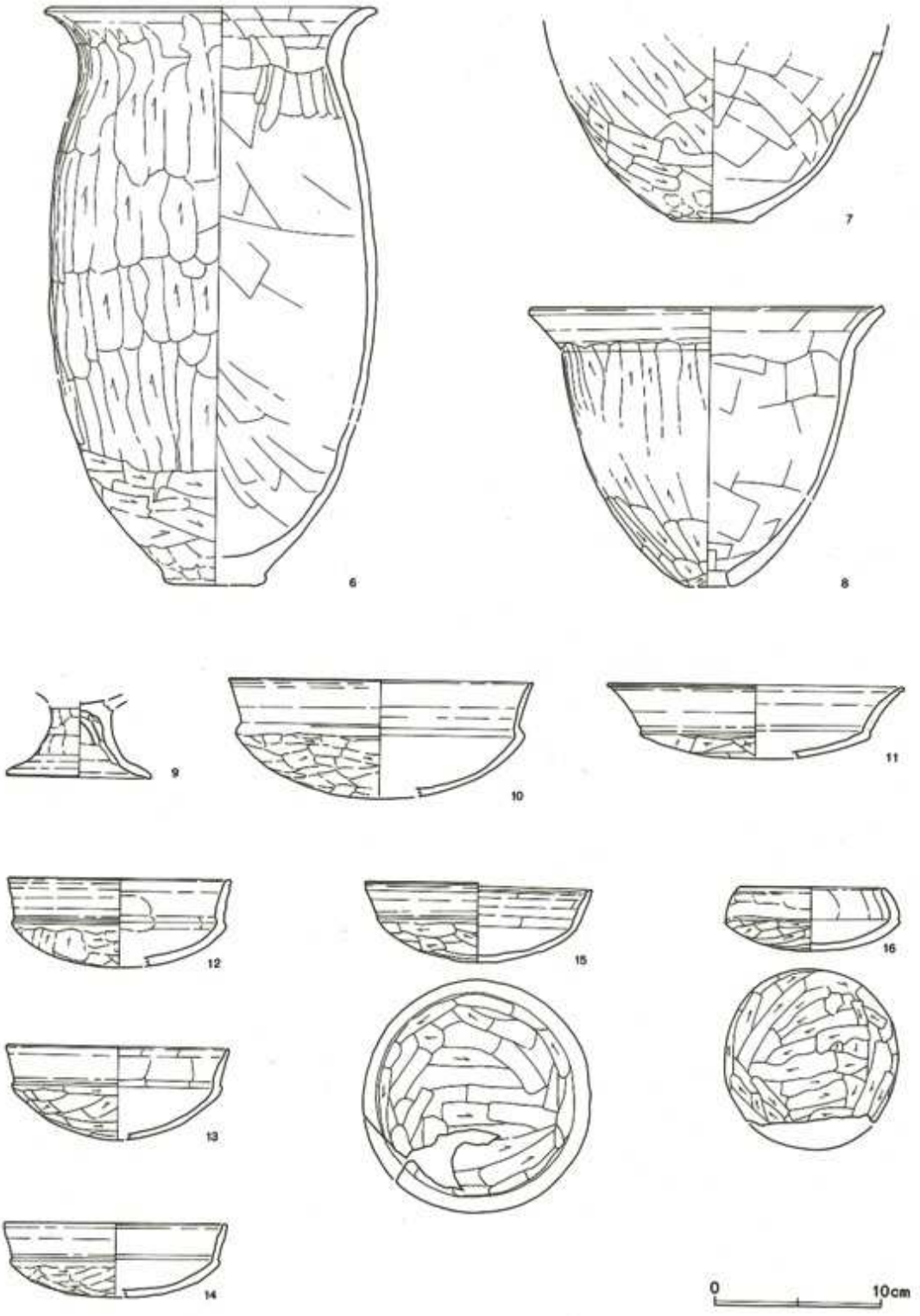
遺物は床面直上より坏(15・16)、壺(1～3)、甑(8)が出土している。また図示した遺物も、そのほとんどは覆土下層に集中していた。



第203図　第41号住居跡・同遺物出土状態



第204図　第41号住居跡出土遺物(1)

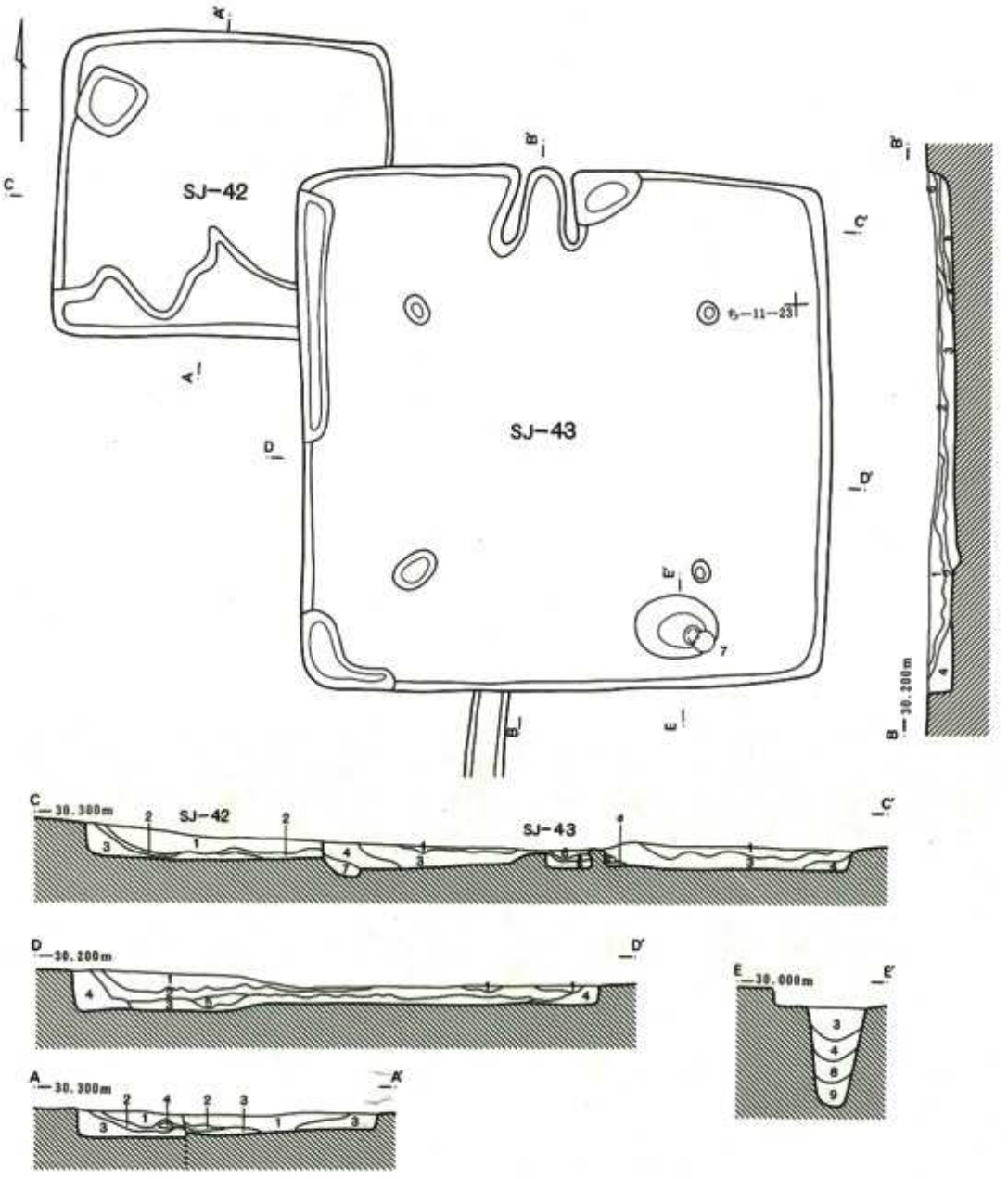


第205図　第41号住居跡出土遺物(2)

第41号住居跡出土遺物（第204・205図）

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	13.3 × 20.5 × 5.1	90%	W＋W′多＋B少	橙	磨耗、剝落著しい
2	〃	13.0 × 19.7 × 5.1	完形	粗(W＋W′多)＋B′	〃	
3	〃	11.4 × 18.5 × 6.0	ほぼ完形	W＋W′＋B′多	〃	
4	〃	19.6 ×(32.2)× —	40%	粗(W＋W′多)＋B′	〃	
5	甕	19.6 × 33.8 × 6.7	70%	粗(W＋W′多)＋R＋B′	〃	
6	〃	19.0 × 34.8 ×(5.5)	60%	粗(W＋W′多)＋R＋B′	〃	
7	〃	— ×(10.5)× 5.0	胴下半部	粗(W＋W′＋B′)＋R少	明赤褐	
8	甑	21.6 × 16.6 ×孔(3.0)	30%	粗(W＋B)＋W′＋B′	橙	
9	高坏	— ×(4.6)×裾 8.8	脚部80%	W＋W′＋R＋B′少	〃	
10	坏	(18.4)×(6.9)× —	20%	W＋W′＋R少＋B′	〃	
11	〃	(18.0)×(4.2)× —	25%	W＋粗B＋B′	〃	
12	〃	(13.4)×(5.5)× —	40%	細(W＋W′多＋B′少)	〃	
13	〃	(13.4)×(5.6)× —	40%	細(W＋W′＋B′)＋粗R少	〃	
14	〃	(13.4)×(4.5)× —	40%	W多＋W′＋B′	〃	磨耗著しい
15	〃	13.8 × 4.7 × —	95%	W＋W′微＋R＋B′少	〃	
16	〃	8.6 × 4.0 × —	80%	粗(W＋W′＋R少＋B′多)	〃	

第43号住居跡調査風景



第43号住居跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　L・G粒よりなる。FA小ブロック少。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色土　G．多量の火山灰（FA？）を含む。
3．10YR4/2　灰黄褐色土　B・C粒微。
4．10YR3/2　黒褐色土　L粒多。粘性強い。
5．10YR3/4　暗褐色土　Lブロックよりなる。
6．10YR3/4　暗褐色土　粘質茶色土よりなる。
7．10YR4/4　褐色土　ほとんどL。壁の崩落土層。
8．10YR4/3　にぶい黄褐色土　大型Lブロック多。
9．10YR4/3　にぶい黄褐色土　基本は8。粘土化。

第42号住居跡土層説明
1．10YR3/3　暗褐色土　主にLブロックよりなる。
2．10YR3/2　黒褐色土　B・C・灰よりなる。上下層を明分する。
3．10YR2/3　黒褐色土　1に近似。B・C粒少。
4．地山Lブロック。

第43号住居跡カマド土層説明
a．2.5YR4/8　赤褐色土　Bブロックよりなる。天井部崩落土層。
b．10YR3/2　黒褐色土　B・C・骨片多。単純灰層。
c．10YR3/4　暗褐色土　B・Lブロックよりなる。袖部の崩落土層。
d．10YR3/2　黒褐色土　bと同じ。灰の捨て場か？

0　2m

第206図　第42・43号住居跡

第42号住居跡(第206・207図)

ち—11—23グリッドを中心に位置する。南東隅部は第43号住居跡に大きく切断される。全体は長方形を呈し、長軸2.78m、短軸2.54m、面積約7.1m²をそれぞれ測る。長軸方向はほぼN—85°—Wを指す。

覆土のうち、2層は主に焼土と灰からなり、これに多量の炭化物を含んでいる。このため、上下の層との境界は明瞭である。遺構確認面から床までは約20cmの深さを有する。床面は軟質であり、中央部がやや窪むほか、地震による段差が生じている。

第19・53号住居跡同様、カマドや貯蔵穴は存在せず、なにやら生活感の薄い住居跡？となっている。なお、北西の隅に方形の掘り込みが見られるが、極めて浅い皿状の窪みである。

反面、遺物の出土は多い(すべて図示した)。それもほとんど完形で、位置も床面の直上である。壺(1・2)はともに倒立して置かれ、坏のうち3個(3・5・6)は重なっていた。さらに注意を引くものとして、ミニチュアの壺がある。

第43号住居跡(第206・207図)

ち—11—18グリッドを中心に位置し、北東隅部で第42号住居跡を切断する。平面は軸長4.38m×4.44mの方形を呈し、面積は約19.5m²を測る。主軸の方向はおよそN—2°—Eを指す。なお、本跡までが埋没河川の北岸に展開する住居跡群である。

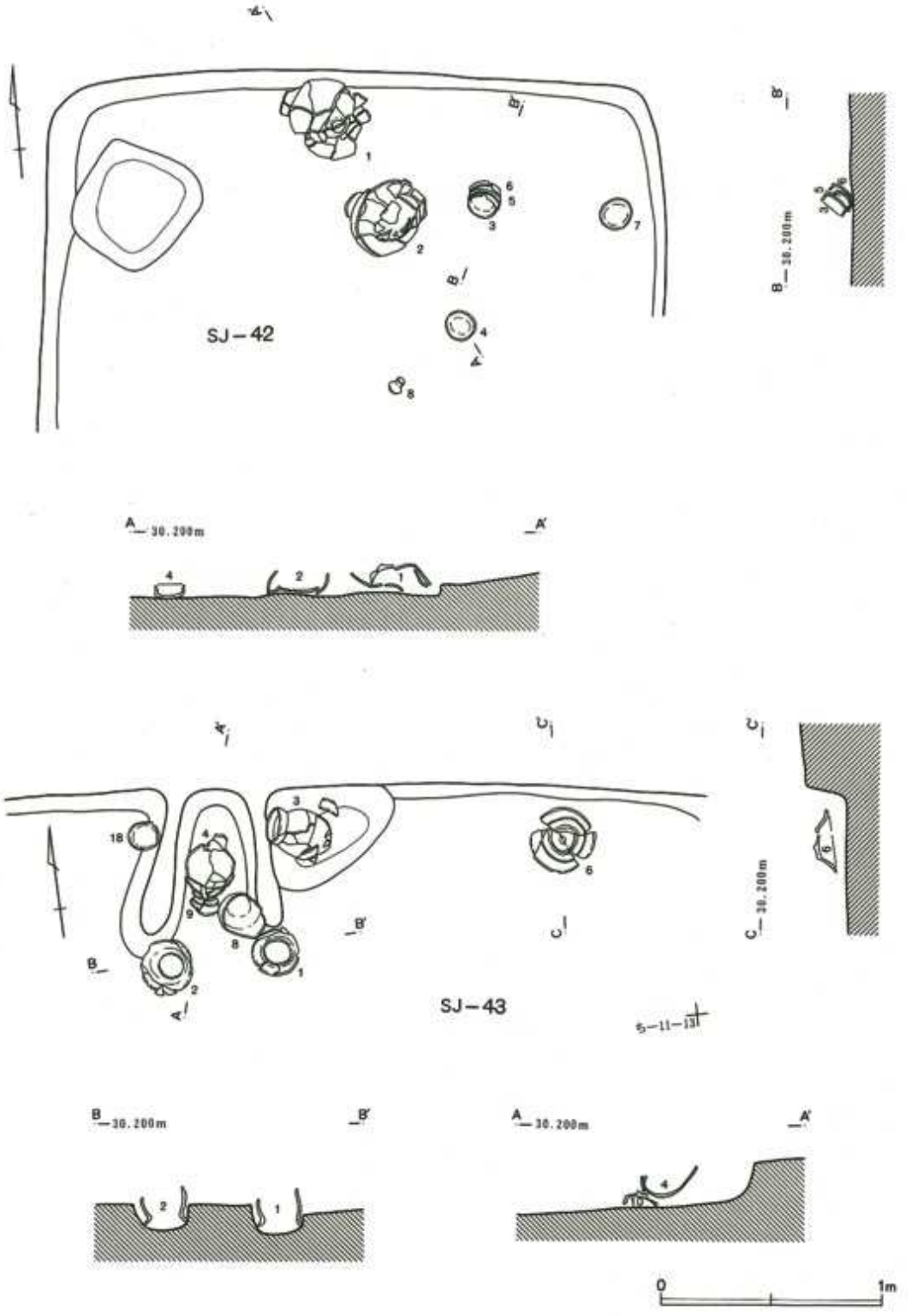
覆土は地山の粘質土を主体とし、2層にはFAと思しき火山灰を多量に含んでいる。壁はほとんど垂直に立ち上がり、遺構確認面から床までは約34cmの高さを有する。床面はあまり硬化しておらず、南部がやや低くなっている。

カマドは北壁中央部に設けられている。袖は「ハ」字状に削り出され、その先端部(焚き口部)には左右とも倒立させた甕(1・2)が埋め立てられている。この部分の開口幅は約28cmである。燃焼部は長さ約90cmで、袖は内傾している。火床面は床面と同じ高さに設定され、全体はほぼ平坦である。この直上には骨片を多く含む灰層が形成されている。灰層は掻き出されたのであろうか、袖の右脇にも堆積している。燃焼部内の遺物遺存状態は良好で、火床面には逆位に置かれた高坏(9)を支脚とし、そこに甕(4)が乗せられている。さらに、右袖との間にも甕(8)が架けられている。また、右袖と壁のくびれ部には浅い皿状の穴が掘られ、ここに甕(3)が据えられている。左袖の同位置には坏(18)も見られる。以上のように、本跡のカマドの状態は、砂田遺跡の第5・7号住居跡の場合によく似ている。

柱穴は住居跡の対角線上に、4本の主柱穴が検出されている。深さは18cm～52cmとまちまちであり、柱痕などは判然としなかった。

貯蔵穴は南東隅部、かなり西寄りに備わる。平面は径70cm×52cmほどの楕円形を呈し、床面からの深さは約82cmを測る。地山からなる覆土は粘土化が進行し、その中位からは甕の上半部(7)が出土している。

上記以外の遺物は、いずれも床面からは少し浮いた状態で出土している。



第207図　第42・43号住居跡遺物出土状態